

川柳塔

創刊大正十三年 通卷二一〇号



日川協加盟

第25回 川柳塔まつり特集

No.1110

十一月号

第八回春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第八回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者 (各題2句 共選)
課題吟

「窓」

「みぎわはな (ふあうすと川柳社)
森山盛桜 (川柳塔社)

「許す」

「梅崎流青 (川柳葦群)
安土理恵 (川柳塔社)

自由吟

「片岡加代 (番傘川柳本社)
小島蘭幸 (川柳塔社)

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

令和二年二月二十日(木)消印有効

送付先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX (〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

★同人参加★

「私の一句」

■今年中に発表された句に限り
■締切 11月20日 (本社事務所宛)

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。
同人・誌友ならびに各句会(川柳会)のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円
1/6頁 三、〇〇〇円

★団体 次の四種といたします。
(巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。)

- ① 1/3頁 六、〇〇〇円
 - ② 1/2頁 九、〇〇〇円
 - ③ 2/3頁 一二、〇〇〇円
 - ④ 1頁 一八、〇〇〇円
- ▼原稿締切 十二月二十日

川柳塔社

感謝

小島 蘭 幸

新家完司理事長の力強い開会の挨拶から、川柳雑誌社・川柳塔社創立95周年記念・第25回川柳塔まつりは始まりました。御祝辞をいただいた一般社団法人川柳協会・本田智彦事務局長、六賞を受賞された皆様の笑顔、新同人の皆様の決意、「路郎の山」と題しておはなしをされた乗原道夫氏、限られた時間の中で一生懸命、選句披講をされた川上大輪、木本朱夏、新家完司、雫石隆子川柳宮城野社主幹、田中新一番傘川柳本社主幹、ご多忙の中を各地からご出席して下さいました三二三名の皆様の顔顔、星影のワルツのリズムに乗って一つの大きな輪になった懇親の宴、木津川計先生の万歳三唱。岡山県久米南町の弓削駅前麻生路郎の句碑の前に立っているとあの日の美しい光景が次々と浮かんできました。私は路郎の句碑に一礼をして、感謝の気持ちを伝えました。

川柳の小径・公園のひだまり広場には、歴代の川柳塔社主幹、中島生々庵、西尾菜、橘高薫風の句碑も建立されています。句碑に一礼をして、記念大会は万全の準備をして下さいましたスタッフの皆様のお蔭で盛会でしたとご報告させて頂きました。木もれび広場には、多くの同人の皆様の句碑も建立されています。

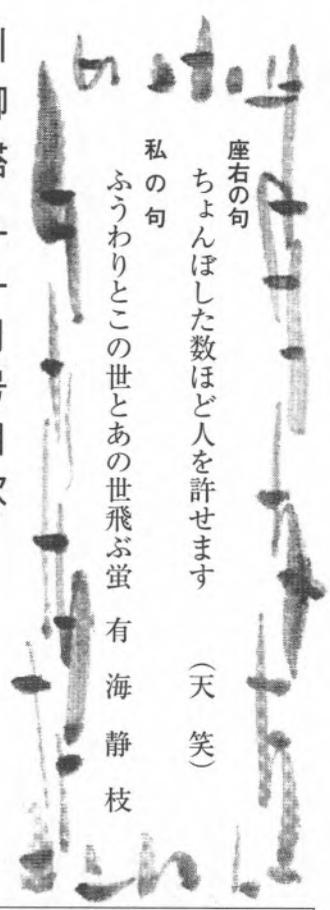
第71回西日本川柳大会、私は前夜交流会から出席しました。昨年初めて出席したのですが、弓削川柳社の皆様のあたたかさ、女性スタッフの手作り料理の味が忘れられなかつたのです。大会の出席者は二六七名、今年も佳句を沢山聞くことが出来ました。

ありがとうございました。

台風一九号により多くの尊い人命が奪われました。犠牲者の方々に衷心より哀悼の意を捧げますと共に被害に遭われました皆様にお見舞い申し上げます。

心身共にお疲れのことと拝察致しますが一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

川柳塔社



座右の句

ちよんぼした数ほど人を許せます

(天笑)

私の句

ふうわりとこの世とあの世飛ぶ螢 有海 静枝

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「納沙布岬」

■巻頭言 感謝

黙って十年……………小島 蘭 幸……………(1)

川柳塔(同人吟)……………小出 智 子……………(2)

温故知新……………小島 蘭 幸 選……………(4)

川柳塔の川柳讚歌……………木津 川 計……………(41)

自選集………………………………………(42)

橘高薫風句抄……………川上 大 輪 選……………(45)

水煙抄……………吉村 侑 久 代……………(46)

英語 de Senryu……………新 家 完 司……………(64)

せんりゆう飛行船………………………………………(65)

誹風柳多留一二篇研究………………………………………(66)

第25回 川柳塔まつり………………………………………(68)

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親會

黙って十年

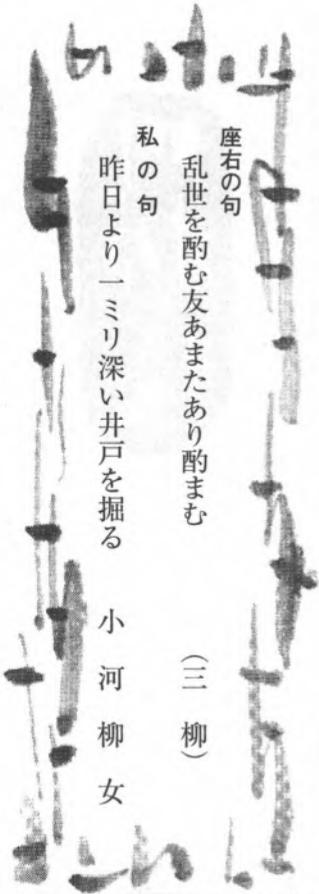
小出 智 子

まだ私が川柳を始めて五、六年経った頃だったでしょうか。「黙って十年句を作れ」と何度か聞かされたものでした。その頃は大きく心にも留めず、そんなものだろうかと思っておりました。そして、内心では結構不満もあり、十年の間には、伝統だの革新だのと考えて、目新しい句に憧れたものでした。でも「黙って十年句を作れ」という言葉が、今になってもまだ心にこびりついているのは、その言葉の持つ深い意味が、この頃になつてようやく納得出来るようになったからかもしれません。

一口に何をしても、十年苦勞しなければとよく聞かされます。川柳もやはり同じです。十年も経ちますと、その間にいろんなことを経験し、一応は川柳界のことともわかつて、句の傾向などが理解出来るようになり、しっかりした基礎も出来て、最も大切な自分の進むべき方向も、自ずと決まってくるのもその頃だと思ふのです。

今頃こんな古い言葉を引っ張り出して、若い方から嗤われるかもしれないが、これも齢の所為かもしれない。

愛染帖	新家完司選	(90)
檸檬抄「降る」	水野黒兎・鴨谷瑠美子共選	(94)
一路集「ハード」	梶谷和郎選	(98)
「低い」	中山春代選	(99)
初歩教室「気まま」	高瀬霜石	(100)
川柳塔鑑賞	山崎武彦	(102)
水煙抄鑑賞	中村 恵	(104)
■追悼文(さようなら中原みさ子さん)	森山盛桜	(105)
インスピレーション・ナビ 印象吟	大西泰世	(106)
各地柳壇(佳句地十選/鴨田昭紀・倉益一瑤)	Sin・平井美智子	(121)
川柳塔WEB句会「出る」	十一月各地句会案内	(122)
柳界展望	■編集後記(ひとこと/斎藤隆浩)	(126)
		朱夏・憲彦	(124)



座右の句

乱世を酌む友あまたあり酌まむ

(三 柳)

私の句

昨日より一ミリ深い井戸を掘る

小河 柳女

ああでもない、こうでもないと言っているうちに、人は年をとってゆく。若い間は無理をしても、一生懸命に生きる事が出来るのですが、年をとってからの生き方はむづかしくなってきます。

つい最近のこと、和歌山の若宮武雄さんの一年間の句を見せて頂く機会を得ました。八十歳になられるそうですが、三年前に奥さまを亡くされて、今は一人暮らしと聞いています。年をとってから奥さまに先立たれた辛さは、想像にあまりあるのですが、今はすっかり立ち直られました。

葉桜の下の広さは老いもの
 齢をとるほど懐かしい子守唄
 すばらしい一日でした もう暮れる
 人形の気持わかつてきた独り
 男独り病めば不様のありつたけ

句のさびしさは覆うべくもありませんが、愚痴っぽさがなく、いい格好の句を作ろうとする気負いもなく、どの句も思い入れの深いしみじみした味わいがあり、心の老いを感じさせない素晴らしい感性の句を発表されておられます。若宮武雄さんの句を見せて頂いて、川柳への情熱さえ持ち続けておれば、これだけの句が作り続けてゆけるのだと教えて頂いたのです。

(川柳塔平成元年3月号)



小島蘭幸選

岡山市 丹下凱夫

浮世絵展出るとキラキラ カンナ咲く

緑陰から緑陰へウォーキング

天罰とみんな思っている猛暑

浮雲と歩幅が合ったウォーキング

パワースポットでラジオ体操してかえる

祭りには祭りの顔で飲みに行く

倉吉市 牧野芳光

登校の列を眠たい目で送る

パソコンの賞状と百均の額

草刈機一本持って草原へ

ミサイルを発射花火を上げるよう

少しづつ寂しい秋になっていく

天国の方へ向かって赤トンボ

大阪市 栃尾奏子

美しい足だ傷だらけの足だ

暗転へ益々君は美しい

過ちを望む三杯目のウォッカ

くちづけの輪郭だけが鮮明だ
夕焼けみたい美しいまま消えた
背景は白標本にされました

大阪市 平井美智子

泣かぬ子は偉い 泣けない子は哀しい

どこまでもひとりシヤケ弁500円

君の心が掴み切れないままで 秋

秋日傘くるりくるりと老病死

中ジョッキ二杯 もうすぐ鳥になる

明日へとゆつくり回る観覧車

三田市 久保田千代

移りゆく時代に添うていく命

病む話死んだ話を聞く残暑

心許なき胸奥へ退院日

他人事だった病の中にいる

生きている証と思う歯科眼科

がんばろうなどと思わず動くこと

河内長野市 山岡 富美子

毎日がスロービデオになってきた

残照が美しいとは限らない

脳に活せてマウスで世界地図

憧れのシルクロードをスクロール

ロブ・ノールひとは儂いものに酔う

体力はないが気持は前のめり

箕面市 中山 春代

終戦日ルソンの父へ井戸の水

盆提灯棚田を渡る赤トンボ

蚊取線香三つ並べて草を引く

グレーヘアハイビスカスの赤を着る

拭きあげた廊下ひんやり京の寺

彼岸花母にだんだん似る背中

大阪市 大川 桃花

向日葵を見るたび背筋立て直す

浮世絵の猫百態に癒される

いい音やなあ路面電車へひとり言

物忘れもうへそくりは隠さない

血圧計り目葉差せばもうお昼

祖父の文今も時々読んでいる

鳥取市 岸本 宏章

趣味いくつこころ豊かに生きている

路線バス乗って存続訴える

喜寿まではかなり揃ったクラス会

うっかりと吐いた本音が風に乗る

自惚れも多少は持つて世を渡る

原発の電気で凌ぐ熱帯夜

米子市 吉田 陽子

待っていた名画展から秋立ちぬ

友が逝き四季に足りない笑い声

亡母さんが匂う和箆笥オアシスに

味わいはマーブル柄の金婚譜

心尽くして会わねば姉も老いて来た

コスモスで閉める花野のフルコース

羽曳野市 吉村 久仁雄

戦死者がくれた平和を噛みしめる

おぼろ豆腐ふわふわ楽に生きている

息吸って吐けば一日もう終わる

いつかきつともらうつもりに残り福

幸せな暮らし続くという油断

買った苦勞今も重荷になっている

大阪市 谷口 義

取り合えず朝顔の種は取っておく

鏡の前で笑うことはまずない

おなじみの出で立ちで買物に行く

四コマ目は支離滅裂になっている

生きるため死ぬため御飯を食べている

照強ほどの塩を撒いてみたし

弘前市 稲見則彦

お気に入りの鏡は売っておりません
金・銀・銅アナタの色に染めましょう

立ち位置は妻ボチ孫の下である

伝令に走る球児の背がきりり

廃校に礼法室という表示

働き方改革願う台所

西宮市 亀岡哲子

三歳から学ぶユニークオノマトペ
営業になると息子はよく喋る

冗談にピリリスパイス効いている

トラブルの種は尽きずに日々元氣

藤色の絵蠟燭なり三回忌

生れ出る佳句待つうちに虹消える

神戸市 能勢利子

夫が刈ると芝生にみえる庭の草
猛暑にもだんだん慣れてきた体

熱中症恐くて家事は手抜きです

暑くてもピシッと決めて行く句会

自分の部屋自分で掃除する白寿

三猿の真似は出来ない好奇心

西宮市 緒方美津子

食べては薬飲んで薬クラス会
報道陣命がけです砂かぶり

老臭も生きてる証憚らぬ

政今必要な荒療治

円満のポイントまん中にチワワ

娘さんですかにうふふ電話口

雲南市 菅田かつ子

こんなこと有ると覚悟はした筈(夫の死2句)
じゃまたねそれが別れになるうとは

軒下へ鳴きに来ました轡虫

生きてゆく氣力をくれるポールペン

此の先をどう歩こうか蝸牛

橋一つ渡るぐらいいは羽ばたける

富山市 島ひかる

凸凹を越えて半世紀の夫婦

平成を豊かに生きたペンネーム

家持も詠んだ立山見て飽きず

天命を孜々と歩んだ夫の背

この人の介護天命だと思ひ

延命治療一切なしと書き残す

東かがわ市 川崎ひかり

まだ八十路ルンバなんか任せない

何んたつて自由気儘な寡婦の椅子

ほうずきを鳴らせる子供もう居ない

私小説見てきた居間の古時計

ハイタッチする度仲間増えていく

明日という未知の時計のネジを巻く

横浜市 川島良子

朝霞市 前田洋子

どうにでもなることどうにもならぬこと
器よりデッカイ欲が盛ってある

百均の除草剤でも草は枯れ

向い風追い風笑うのはどっち

ひよっとしてひよっとするかも髪を切る

横浜市 菊地政勝

断捨離が薄れた過去を呼び戻す

迷惑を掛けぬ長生きなんかない

長生きの資金そろそろ底をつく

モットーを変えて気楽な道を行く

いさかいに過去持ち出され黙りこむ

さいたま市 星野育子

内閣改造さて何をしますか

真実は小さい声で語られる

褒める人居なくなり木に登れない

ドタキャンと遅刻は三度までにして

防犯か監視かカメラが林立

上尾市 中村伸子

訃報です紫陽花がもう咲きません

そのピンク似合っていると伝えたい

先ず部屋を片づけてから言う意見

呼んだとて来てはもらえぬ風呂ブザー

逆走と書いて見せたい自転車に

延長戦もう観てられぬ甲子園

甲子園大差の試合まだ続く

老猫は夢で走っている様子

昔の十年今一年で過ぎ

世の流れに乗るスピードが合っていない

千葉市 海老池洋

向日葵も折る姿になって秋

日本中菊一色の文化の日

嵯峨菊のしなやかすぎる尼の寺

菊花展うちは放任主義の菊

カラスより早寝早起きして余生

東京都 川本真理子

レジ袋さげてジュゴンの仔を想う

ぼんやりと聞くタピオカが流行る訳

先で待つ親と子のパズルのページ

アップリケうさぎの耳は折れたまま

あともどりできなくなった月を見る

東京都 まえで とよこ

老いの汗人工呼吸の訓練に

腕まくり幾山河をこえてきた

お元気です山また山の一軒家

花畑お墓とともに一軒家

眼の前に巨大倉庫が建ちはじめ

八王子市 川名洋子

虐待のニュースに心おれてくる
列島に日傘差したい猛暑の日
受験生祭りばやしに背を向ける
鳴ききって満足そうにセミが落ち
浴衣出す母の匂いのナフタリン

犬山市 金子美千代

アマゾンに握られているプライバシー
プールではスッピンみんなこんなもん
そこは大人気付かぬ振りでやりすこす
ソロバンで家計簿つけるボケ防止
浮かれたらあかん足元隙だらけ

犬山市 関本かつ子

節電も節水も無く猛暑越え
おばちゃんのお喋りは皆主役
夏耐えたポインセチアよありがとう
早朝のエンジン近所皆若い
物忘れ友も同じと知り安堵

愛知県 早川遡行

妻病んで男料理も三ヶ月
朝食の準備もできて妻を待つ
家事炊事妻の苦勞がよく分かり
台風の他にニュースはありません
無きや無いで何んとかなっていた昭和

鈴鹿市 小河柳女

地元の灯包んでくれてあたたかい
雨のしずくにゆったりと打たれてる
この味いいね虫喰いの葉を食べる
もがいた後に幸せの風が吹く
透明な靴音たてて秋が来る

可児市 板山まみ子

若者は必死香港の街角
老人は必死増税迫る国
子供も必死いじめに合わぬように
女も必死自立して生きるため
旅先のミスも土産の一品に

奈良市 阿部紀子

ミニ盆栽アンスリウムとサボテンと
サボテンが角二本出しスクスクと
アンスリウム赤い花ピラ日々嬉し
いつものカフェ品の良い女一人いて
料理して夫と食べた頃楽し

奈良市 宇賀史郎

法師蝉鳴き声やつと聞く九月
茄子に棘先祖返りか世の中も
丹精を込めた初生り神捧げ
封筒を投函何故か安堵感
次兄逝く五人兄弟吾一人

奈良市 大久保 眞 澄

買い込んだ鯖缶猫が跨いでる

鏡しみじみこれが老いるということか

優先席ルールではないモラルです

喫煙所でしたか公園のベンチ

露天風呂なぜかオヤジの声になる

奈良市 高橋 敬 子

大花火銀河背にして見得を切る

地球の行方満天の星見つめてる

どうしてる亡夫に話す星月夜

田舎暮し眺めてるだけならステキ

家事分担のルール夫から崩れだす

奈良市 辻内 げんえい

ルールさえ守りゃ安心言えぬ世に

銀行はATMだけのお付き合ひ

何事もシャープさ消えてヨッコラショ

君を守るがいつの間にやら留守守る

奈良市 山本 昌 代

赤ちゃんを抱っこほんのり若返る

逃げられぬバアバ居るかと孫の声

クーラーは水はと娘小うるさい

見栄っ張り母はまだまだ元気なり

軽くなるく飛び跳ね今日も日が暮れる

奈良市 米田 恭 昌

母乳たつぷり未来を担う天使の瞳

ガキ大将いていじめつ子いぬ昭和

いじめにも耐え心の芯が太くなる

刀折れ矢尽きた友の闘病記

全自動の母も老いたか修理中

生駒市 飛 永 ふりこ

ドンマイと小さな秋が背を押す

陽と水で葉脈さえも潑刺と

体力の減少弾くホットヨガ

哀しいね身に付いている縦社会

ブランドコにほんのり秋が昼寝する

香芝市 大内 朝 子

やっとこさ猛暑を越えました命

曼珠沙華情念燃やすありつたけ

小食が大食になる娘とランチ

健康診断もうちよつとだけ生きれそう

しゃぼん玉随分遠く来たもんだ

香芝市 山下 純 子

欲しいです座ぶとん五枚妻の座に

手こずった息子にすべて頼つてる

娘から脇が甘いと注意され

孫の名は古今和歌集からこの花^か

榎原市 居谷 真理子

悲しみの光まつて少女羽化
カッブルで象の孤独を見に行つた
パブリカの真つ正面にいるカボチャ
生きている時より近くなつた人
友だちと呼ぶちよつとだけ照れながら

桜井市 安土 理恵

おんながひとり釣瓶落しの田舎道
ガラス戸をあけると足もとに子猫
話すことあるならもつとそばへ来て
どうぞお先へわたくし亀とまいます
名前に斜線人は無情なこともする

奈良県 安福 和夫

唐臼を踏んだあの納屋どの辺り
郷土自慢吉備真備と囲碁ルーツ
餅十個ペロリ競つた吉備の里
災害がノスタルジーを呼ぶ皮肉
強い母他所でも同じ岡山弁

奈良県 谷川 憲

無人駅ひとり聞いている蝉しぐれ
アマゾンに広がる大地球危機機
頓堀でトラファン騒ぐ日が恋し
移り気な時代に消える流行語
大国のいつか来た道覇権主義

奈良県 中堀 優

フラットよりシャープ記号へ変えて生く
定年の記念の杯の酒の味
父ちゃんが一番嫌なところ攻め
白板へ書いた字すでに千鳥足
酒飲んでやつと対抗できる妻

奈良県 長谷川 崇明

久し振り和む夕餉の大家族
国自慢あちらこちらにおらが富士
人の史の舞台必ず待つ別れ
合掌に包む神への願いごと
引き際の美学を包むループタイ

奈良県 渡辺 富子

地図にない老いの原野へ踏み迷う
秋深し安楽椅子で文庫本
杖を付く夫の野心燃え残る
いら立ちへひよいとブレイキかける猫
解のない老いの広野へ立ちつくす

和歌山市 上田 紀子

鬼灯の中にヒントが隠れてる
勢いに乗つた約束身に重い
臆病な生き方しないラストラン
物差しを替えてまっすぐ向きあおう
愛足して足して魂光らせる

和歌山市 柏原夕胡

人混みに紛れて消えたわたし色

鈴虫の唄も途絶えて秋深し

春夏秋冬早すぎるお正月

シンプルになるはずでした終の家

カラオケに通いストレス軽くする

和歌山市 喜田准一

前線の位置も分からぬ雨と風

落ち込んで直ぐ立ち直る便利さよ

お互いにカネの話は拒まない

カーテンとすだれ一枚人を分け

筋論の通せる国と無理な国
和歌山市 坂部紀久子

一人居の事故は誰にも気付かれず

後悔を食べると苦い味がする

猛暑です電話もチャイムも鳴りません

毎日が限界と言いつつも暮れ

老人一人戦ってますこの猛暑

和歌山市 武本碧

普通が良い普通がいいと高望み

招いても招かなくても来る禍福

ポケットの底に忘れていた勇氣

ファの音を消すとドレミがきしみ出す

成り行きで大きくなった臍の傷

和歌山市 土屋起世子

無理するなやさしく言われ無理をする

言い訳はやめてご馳走でんご盛り

物忘れしても童謡覚えてる

幸せは疲れるものよ帰省客

補聴器をはずして人の群れにいる

和歌山市 福井菜摘

人間の器量が見える採めたあと

友情は真っ直ぐ胸に満ちてくる

肩パッドとれてらしさと優しさと

向い風そこそこあって湧くファイト

スクラムをしつかりと組む雑魚の意地
和歌山市 古久保和子

ヒマワリの種に目論見などはない

はがき一面たぶんばあばの顔だろう

年齢を四捨五入して怖くなる

秋深しビルの谷間のトタン屋根

蛇口から心残りの洩れる夜

和歌山市 堀富美子

友見舞い病の辛さじんと来る

趣味の日と通院日とのふたつ顔

歳重ね棘も怒りも和らいで

ジェラシーが老いを発奮させている

影だけが背筋延ばして老いてない

和歌山市 松原寿子

金やコネ何にもなくて趣味と生き
ひとさし指におちやめなトンボ来て止まる
譲れないこは強気でおし通す
検査終えほっとひといき風になる
かけがえのない絆です離さない

岩出市 藤原ほのか

ハーモニカ昭和の響きかもしだす
こだわりを捨てると楽に生きられる
何事もこだわることで我らしく
人混みに母の面影探してる
人混みに押し流されて浮かんでる

海門市 小谷小雪

盆前は殊に暑いと言った母
模範主婦夢の中でも忙しない
遠くからわが家の灯り見て安堵
長生きへ菌と菌の間から磨く
ポイントが普通の日でもお買い物

橋本市 石田隆彦

よく見ますムンクの叫びわが家にて
年金の枠で余生の近遊び
趣味ひとつひたすら読んだ入門書
村山や江夏が投げた強き虎
コンビニもたまに息抜きしなさいよ

京都市 清水英旺

ニッポンが気概を示す時ぞ今
五輪後の悪夢乱立するホテル
炎熱の街コロンの香りとすれ違う
電気代怖い熱中症もつと怖い
スッポンもウナギもサブリで事足りる

京都市 藤井文代

意地と見栄で身の程忘れはまる穴
健康番組医者行く前に治療できた
難聴も使いようだと武器にする
分からぬ事耳が遠くと演じとく
両手合わせ万に感謝喜寿の今

京都市 榎本宏子

ペンダント素敵ねいい迷子札
男同士話題不足に孫のこと
笑顔えがお夢中になると怖い顔
私の地図がだんだん小さくなる
虫のいい話待ってるキリギリス

長岡京市 山田葉子

もう来たんだね川でくつろぐ渡り鳥
はみ出すのがこわくて断れぬ誘い
かたつむりの歩みまだまだ続けそう
そうだったのか疑いの渦弧を描く
答のない問いがまだまだ胸に棲む

八幡市 今井 万紗子

不登校でも君の居場所はきつとある
五欲捨てたらきつと天国いけますか
残り火をチロチロ燃やし生きてみる
予定は未定今日ものんびり爪を切る
荒波を越えた母の手美しい

大阪市 磯 島 福貴子

老人会喜寿はまだまだ駆け出しと
すだち大根サンマ不漁で暇託つ
灯り消し窓に呼びこむ十五夜を
転倒予防片足立ちにスクワット
写真は嫌い見た目そのまま写るから

大阪市 岩 崎 玲 子

理想ですかわいいいババになりたいと
琴線に触れてくるよね童謡は
愛情はたつぶりしかし金は無い
思案する時ふる里向いて腕組んで
食事時ニユース選んでくれますか

大阪市 内 田 志津子

残された母の行末想う秋
爺ちゃんの家庭菜園匂ばかり
高々と挙げた理想に潰される
戦には行かせてならぬ旗を振る
だるまさん転んでも転んでもなお

大阪市 宇 都 満知子

台風一過雨に泣かされ泥に泣かされ
青森の秋をいただく早生りんご
柿の熟れ頃見ている私とカラス
晩学のピアノにわくわくのハート
いつかいつかと逆上り二重とび

大阪市 江島谷 勝 弘

もう忘れましました昔のことでした
八月十二日スズムシが鳴いた
うかうかとしていたらもう七十五
飲みすぎて十二時間も寝てました
朝が好き卵ごはんに納豆だ

大阪市 榎 本 日の出

顔よりも磨きこんでる足の裏
幸せが来ると呆けまで早くくる
孫四人三十代がゴロゴロと
向上心ポッケの中から出てこない
優しいが母の涙がムチに見える

大阪市 榎 本 舞 夢

令和なり嬉しい話やって来る
人生の節目の月と前を向く
皇室と同じ世代で恙無く
私達なりの余生を楽しんで
ささやかな平和壊れぬ様願う

大阪市 大 治 重 信

あほらしとつくづく思う誕生日

青春の慕ひきながら夕日みる

アメリカに賢いだけの犬となり

クーラーが支えとなつて夏過す

吾が家を支える息子四人居る

大阪市 奥 村 五 月

台風に約束事が皆駄目

正直な親父は何故か出世せず

幸せは金では買えぬ妻は言う

昨日までできてた事ができぬ朝

免許証を返して孫の助手席に

大阪市 小 野 雅 美

鏡よ鏡今日の私はどうですか

テレビ消し心の声を聴いてみる

着信の鳴らぬスマホを抱いて寝る

頬杖をついて弱音も愚痴も吐く

学生服の母から洩れた笑い声

大阪市 笠 嶋 恵 美

娘の振袖孫が気に入ると言う

よるこびがよるこびを生む振袖よ

振袖に老いのけじめをうながされ

新聞の川柳に名が久し振り

絵手紙に旧友の愛ほとばしる

大阪市 金 川 宣 子

生涯に縁のなかつた表彰状

ゴミ減らすスイカの皮を漬物に

二時間も並ぶタピオカ舌鼓

秘め事もきつちり刻むシユレッター

仲人の言葉に負けて妻となり

大阪市 川 端 一 歩

敬老日ご先祖さまへ墓参り

来年はダイヤ婚です夢の旅

殺人は映画小説だけでよい

外交に妙手はいらぬ話し合い

新政権改憲だけが声高で

大阪市 古 今 堂 蕉 子

似たりよつたりゆるい風の中に立つ

生き上手総てアバウトケセラセラ

なんてことピンチの裏にまたピンチ

大黒柱折れた 夏が終つた

憎い男の憎めぬアキレス腱

大阪市 近 藤 正

自立した大阪壊し得はない

一〇パーは弱者いじめるだけなのに

プーチンと話すときには腰がひけ

少女像そんなに嫌いなんですか

表現の不自展で地金出す

大阪市 坂 裕之

青空に向つて愚痴は言えませんが
手間かけて咲かせた花が誇らしげ
いつ何が有るか分からん世の中に
何でやる凄いなだと褒めてくる
お互いの支えがあつて喜寿祝う

大阪市 高杉 力

この店で出逢いこの店で別れ
花嫁の父この辺で泣けばいい
子育てを終えて女性は忙しい
嬉しくも悲しくもありシニア割
秘湯までもうコンビニはありません

大阪市 高杉 千歩

余生なお引き算ばかり九十三
思い出を追う山も海もあの人と
終の棲家老人ホーム有難し
六感も失せて九十三の秋
ベレー帽の昔に戻れない九十三

大阪市 田中 廣子

ドック入り知るのが怖い癌検査
裏表ない付合いで六十年
思い出にぼつんと胸に穴があく
早いもの友の一周忌辛いです
かがり火は心沈める良い儀式

大阪市 田中 ゆみ子

コンビニの明かりが生きる力くれ
高い値にうれしいですと言いました
病んでいるのか山彦が返らない
努力しても現状維持が難しい
楽しめぬ潔癖性と行く屋台

大阪市 津村 志華子

運勢欄今日はとってもワンダフル
八の日にこだわる変な癖がある
川の流れ月日の流れたゆみ無し
生き方を教えてくれた樹木希林
妹と亡母を語つて夜もすがら

大阪市 寺井 弘子

棚田打つきらきら光る鍬の自負
生活が怪しくなった消費税
言葉では慰められず手を握る
完成度国の誇りになる五輪
ドキドキする恋には懲りたはずなのに

大阪市 寺本 実

千年も経てば誰でも無縁墓
運勢はやつぱり渦を巻いていた
見ためではわからぬ人の裏表
ヨウカンの薄さに返事予感する
どんぶりを三杯食べても子はスリム

大阪市 中井 萌

好奇心いつも心に持ち歩く
ゆつくりと歩く青空見たいから
年頃の孫の様子は嫁に聞く
わたくしの中の私が手に負えぬ
御先祖に感謝ばかりのお茶お花

大阪市 原 田 すみ子

まあいいか人に自分に緩くなる
歯の治療受けつつ軟骨食べたい
治りたい一心 炎天も通う
メダルと言う事実 母国変えさせる
藤棚の涼しさ人を呼ぶベンチ

大阪市 平 賀 国 和

お早うと毎朝すずめ餌ねだる
過ぎし日を思い出させる赤トンボ
妹も僕も分からぬ叔母見舞う
世界中が平和でないと落ち着かず
香港とイランの行方気にかかる

大阪市 藤 田 武 人

緩かな勾配にする定年日
晩秋の体重計にある恐怖
補助輪を付けて米寿の習い事
へそくりの外にも秘密あるらしい
温暖化以上人間もつと変

大阪市 横 山 里 子

リベンジに心の闇が舌を出す
騙し絵の中へ左脳が行ったきり
あの嫉警察沙汰か今の世は
うなだれてスマホゲームの依存症
夏バテかゴーヤお前も実がならぬ

大阪市 若 本 安 代

さまざまに出合い私の宝物
世代の差越えてふれ合う趣味の友
月あかりふと耳澄ます秋の音
よく眠りリセットできた朝が好き
白い朝さあ何色に染めようか

堺市 奥 時 雄

人類の損失日本人が減る
ご近所で久しく見ない赤ん坊
幼な児が皆お宝に見えだした
何見ても旭日旗だと見えるらし
因縁もほどほどにしてお隣よ

堺市 柿 花 和 夫

下心がはみ出しているプレゼント
診断は加齢とのこと納得す
煎餅を前歯で噛んで母元氣
天と地の声を聞かない独裁者
怖いなあ日本人の祭り好き

堺市 加島 由一

ヘルパーがときどきもらすどっこいしょ

黙祷と献杯をしてクラス会

うらやましい人がだんだんいなくなる

幸運の女神採点甘くない

炭坑節でお開きにするクラス会

堺市 源田 八千代

明日香路に咲く彼岸花よく似合う

分別ゴミ違えず出して未だ行ける

エンディングノート書くタイムリミット

サンダルに赤いマニキュア嫁と孫

横綱へのハングリー精神欠ける

堺市 齋藤 さくら

古希過ぎて誇れるものが何も無い

困ったら真っ先頼る友が居り

買い溜めをする程要らぬ二人きり

コオロギが鳴き出したから秋だろう

乾杯をするにも主役まだ来ない

堺市 坂上 淳司

台風を狂暴化する温暖化

五十年に一度の雨も二度三度

診断は蜂窩織炎即入院

これでもかと膿絞り出す美女の医師

痛い施術毎に痛みが和らいで

堺市 澤井 敏治

ハロウィーン流行る時代のデカダンス

カンカンをエロチシズムにした風車

枯れ葉舞う自由求めるかのように

ダンスはメタファーそつと伝える恋ごころ

実りの秋案山子に感謝するスズメ

堺市 遠山 唯教

目標のモチベーションを高くする

終戦のあの日も蝉がいない

熱闘にはじける夏の甲子園

眷族が一体感をもつ墓参

ひぐらしと夏が終りの風の音

堺市 内藤 憲彦

孫たちへ駒からケットお土産に

やがて来る徘徊に向けスクワット

バイキング周りの欲と比べつつ

言ったでしよ妻がグサリと決めゼリフ

副作用治す薬がまた増える

堺市 矢倉 五月

電子音さえも嬉しい日々独居

店員さん何も問わずにLとL

皆と一緒に笑ったあの人見て安堵

図書館へ文化仕入れに孫のガイドで

知より情重んじていた亡母だった

池田市 太田省三

ケアハウス良家の子女の身のこなし
この辺にたしかタバコ屋おじの通夜
乙女らの励まし受ける八合目

世話好きの隣が指図する転居
痛いけどサヨナラ勝ちに沸く死球

入道雲折れる心に撒飛ばす

貝塚市 石田ひろ子

健診の丸で帰りに傘忘れ
迷ったら撫でるお守り持ち歩く
信じてる背を押す味方居ることを
時どきの外出脳のストレッチ

聞く耳と聞かない耳を使い分け
ちよっと小銭貸してと札を狙う夫
夢ばかり追ってる人に何故かラブ
見るべきは外より内の美しさ
緊張を優しく解いたママのハゲ

河内長野市 大島ともこ

河内長野市 大島ともこ

草かげにひっそり熟れていたカボチャ
クーラーの中粛粛と風炉点前
筋肉マンだった夫の細い腕
繰り言を言わぬ夫の胸の内
残暑厳しシャキッと梨の匂の味

リタイヤで息子に譲る羅針盤
無邪気な母はあれこれ忘れアハハッハ
かしましい妻のソプラノそっと聞く
青空を黄金が覆う並木路
蔓草が行く手を阻むきこの狩り

河内長野市 黒岩靖博

河内長野市 梶原弘光

楽しみも老いのリズムで追い掛ける
健脚の自信過剰を膝笑う
ナンプレと仲良く遊ぶ老い仲間
身の丈の余生ルンルン生きている
大丈夫呪文唱えた大丈夫

河内長野市 中島一彌

もどかしい言いたいことはすぐ出ない
ありがとうは素直になれば言えるんだ
ちっぽけなプライドを捨てありのまま
エコ実践早寝早起きする暮らし
花一輪ただそれだけで変わる部屋

河内長野市 藤塚克三

一つ覚え三つ忘れて悩む脳

惚けてない老いの世代の反抗期

酒飲んで湧いた遣る気はすぐ醒める

なぜだろう家にいるのに落ち着かぬ

悪びれず優先席で化粧する

河内長野市 村上直樹

内定の孫へ漫遊軍資金

一を知れば二も知りたがる進歩の芽

たつぷりの野菜百寿へ自己暗示

しつかりと生きて傘寿の青い空

白百合に一句を添えて妻の賀寿

河内長野市 森田旅人

愛されて茄子も胡瓜も艶を出す

アバウトに生きてなんだかんだと笑ってる

あたしじゃなきゃつとまらんよと独り言

今日を確かに生きたかと問う午前二時

野菜庫の隅にゴダイバのチョコレート

河内長野市 山室光弘

厳しき残暑小さな秋が見つかからぬ

堅くなる財布のヒモと思考力

縄のれん心の傷を洗う酒

子の行方尽きぬ心配親ごころ

何くそと頑張る姿伸び盛り

岸和田市 岩佐ダン吉

議論百発そして私はひとり

大地踏むこれ以外には道はない

正論がすらすらすらと出る酒だ

ひとつだけ善いことをした日が暮れる

秋の空仰ぐやれやれ生きている

岸和田市 雪本珠子

理由あってそれぞれ別の道を行く

夢でしか逢えない亡娘笑つてた

福祉とは幸福とある広辞苑

川柳に励まされつつ生きる今

膝の猫老いの繰り言聞かされる

四條畷市 吉岡修

付添いに子が来てくれる診察日

二本目の道を辿ってみる老後

アリバイを頼み頼まれしてた仲

証人は家に居ります猫ですが

頭ん中いつもそろばん置いてはる

吹田市 野下之男

台風がこんなに多い誰のせい

北国で四十度だよこの不思議

人の談話いちいち批判されるね

もうやめよ息子に聞くのカタカナ語

おとなりりんごあげたらミカン来た

高槻市 指宿 千枝子

キッチンで命の音が跳ねている
鳩が歩く私も歩くひよこひよここと
休みやすみしてゆつくりと生きている
雷神の怒り猛暑に炸裂し
日が暮れる夕焼けこやけ虫の声

高槻市 片山 かずお

ゆつたりを求め日帰り湯に浸かる
うっかりが増えて立派な後期です
青信号点滅したら次を待つ
まだ出番あるのか生かされています
暑くても九月は秋と法師蟬

高槻市 島田 千鶴子

若返る手段ないかと模索中
躓いただけなら見ない振りをする
年の功息き抜き手抜きうまくなる
野良猫の動かぬ場所は風の道
まあいいか今日はここまでまた明日

高槻市 初代 正彦

ステテコの夏バテ唾う百日紅
いつだってあたふたしない傍のひと
凹んでもくよくよししないスニーカー
運動会きつと行くヨと〇印
ほどほどにしましよ縫れてますヨ足

高槻市 杉本 義昭

災害に鳴く暇もなく秋の蟬
どん底の強さ自分に勝つ気力
失敗した昔話に座が溶ける
鍵付けた日から大人になる我が子
青春とはまさにジョッキの一气飲み

高槻市 富田 美義

言い勝って心に辛い風あたり
園児とて疑ってみる我が不幸
安全にと鍵を掛けたら疑われ
故郷は今も静けさ懐かしい
冷麦と杖を頼りにわが散歩

高槻市 富田 保子

平凡に暮らし賞罰無くて喜寿
ダイエツトやめて下さいお父上
愛読者いつの間やらコミックに
咳しない方がマスクで身を守り
友達と会うのはいつもカラオケデー

高槻市 原 洋志

よそ行きの会話で食べるレストラン
スマイルでたいていのことフリーパス
たそがれて自己採点が甘くなる
売り場から離れて財布確かめる
無印になって地域の輪に溶ける

高槻市 松岡 篤

まずメール開いて今日がスタートに
ペットロス踏ん切り付かず恋できず
高齢者居ると分かるテレビ音
三合を越えたら酒は無駄ですか
更衣室ヨロイカブトを脱ぐところ

豊中市 上出 修

晴れ晴れと断捨離終わる部屋を見る
終活をどう描こうか白い地図
冗談がセクハラとなり脂汗
電車から降りる時には別の顔
妻責めるすぐ口を割る僕がいる

豊中市 木藤こみつ改め
きとう こみつ

ノーマークのとても油断をしてる顔
欲があるうちはまだまだ青二才
通訳はいないが生きていける巴里
G20終わり安心するホテル
三カ月バリ無事になんとか乗り切った

豊中市 藤井 則彦

下り坂行くにもちよつと一休み
継続が力となって湧く自信
言い訳を武器に窮地を切り抜ける
飲まないと本音が出ないもどかしさ
年齢がばれて互いにお近づき

豊中市 松尾 美智代

毎夜九時私迎えに来る睡魔
暑さ少し和らいだ日に友と旅
賑やかに食べて話して夜が更ける
元気をもらえばあちゃんの旅また来年
ジムのおかげここ四年程転けてない

豊中市 水野 黒兔

妻の手の上でうろちよろもう傘寿
天の川を浴び木曾谷の露天風呂
坂また坂神戸はずっと歩く街
日だまりに猫に遊んでもらう秋
根気よくジグソーパズル脳を揉む

富田林市 片岡 智恵子

何事も「ただ今」なりただ今なり
米中貿易サミット注目
生は東の間旅も東の間陽が沈む
犬の散歩いつも私の目をみつめ
空の文字一切を生み一切を捨て

富田林市 中村 恵

精一杯今を生きてる常備薬
逆風に挑戦続けてる若木
毎日が祭りの母の割烹着
べんちゃらを素直に受ける耳を持つ
鳥はまだ時代遅れの風の中

富田林市 山野 寿之

寝屋川市 森

茜

炎天の坂を嬉しい便乗車

夫婦茶碗欠けて老いても夫婦箸

病院の待つを楽しむペンと紙

単線でコトンコットン鄙の里

乗り継ぎがスムーズ今日はいい日かも

寝屋川市 伊達 郁夫

ケータイが無口になった夜の鬱

もう気楽昨日も今日も負けました

日記帳小さな幸を書くページ

父の遺書白紙の謎がまだ解けぬ

免許返納少し淋しい顔になる

寝屋川市 富山 ルイ子

友が逝く高野山行く合祀祭

一つ年上何時も優しく助けられ

同居27年助けてもらおう

食事です呼ばれて座るありがとう

米寿の祝娘にしてもらう食事会

寝屋川市 平松 かすみ

寂しいな従姉妹がひとり減りました

川柳もお針も貴方のお手解き

九十七歳私のお手本だったのに

和裁一流人形も油絵も賞
法王のお導きにてローマまで

「ただいま」言うなり脱いでる一帳羅

はげ落ちた土蔵に添うてきた縁

妹はひとりの夕餉すませたか

わたくしも偲ばれるかな走馬灯

秋はもうここに木曾路のとろろ汁

羽曳野市 安芸田 泰子

台風が浚って行った蟬の声

空の青炎暑の中に秋が見え

深読みが過ぎて渡れぬ向う岸

言い訳をしては自分を可愛がる

肯定も否定もしない石地藏

羽曳野市 宇都宮 ちづる

良い日だぞ天に向った龍の雲

買い替えた家電と寿命競い合う

五両目に乗ろうと決めた事故映像

久々の笑顔の写真遺影にと

血税の二パーセントはどこへ行く

羽曳野市 徳山 みつこ

宅配も論吉もわが家通過する

初孫の初月給の論吉殿

銀杏舞う小径に悩み捨てました

なるようになると思上る星月夜
陽にあてる親にもらったこの命

羽曳野市 藤原大子

曇り雨晴れ間があつて頑張れる
長い長い道のり今日を歩いてく
ストレスがとれて困つたよく食べる
賽銭のチャリンの音が心地よい
幾度頭下げても命還らない

羽曳野市 中川ひろ介

突然の地震妻より犬庇う
豊作を祝い夕日に手を合わす
今年からセレブ料理に焼サンマ
風の言葉拾い集めて一行詩
物忘れ嘆きながらも生きてゆく

羽曳野市 三好専平

一人では生きられないが一人なり
気のつかぬうちに裸にされている
三十年の苦節がみのるボケの芸
しゃべるだけしゃべって人に嫌われる
地球探険飽きて宇宙を徘徊し

東大阪市 北村賢子

早起きへひねもす身体もて余す
ベランダにこころやすらぐ花の咲く
眼鏡かけるしみじみ老いたなと思う
こわれぬよう抱いた初孫二十七
高齢の元気な方に会う句会

東大阪市 佐々木満作

耳寄りの情報鵜呑みせず生かす
飲み薬時々過不足が起こる
ハズキルーベはつきり価値観が変わる
一字違いよくあるクジ運の悪さ
地味だけど人の前には立ちたがる

枚方市 丹後屋肇

汚染水処理を危惧する漁労長
宇宙戦アニメの夢想だけでいい
アメリカファースト地球を荒らす御題目
天変地異儲けを借金漬けにする
昭和一桁鋭く目A I ドローンロボ

枚方市 二宮山久

生きてきた証し余生に満たされる
深呼吸して明日へと一歩踏む
虫の声宇宙に響くハーモニー
たそがれに明日を刻むベアシユーズ
コンサート命弾ける若江夏

枚方市 藤村亜成

サプリメントに頼りたくなってきた元氣
小旅行車中は瞑想するひとり
烏合の衆だ一発かましてやればよい
ピラニアが潜む穏やかな水面
健康な家族の残り湯に浸かる

枚方市 山口 弘委智

美食より快便誇る老いの秋
再度読む本あまたあり秋夜長
天空に星あかり地に街明り
夕陽から生れたような赤とんぼ
颯雲心の髪を見る想い

藤井寺市 太田 扶美代

神様のポケットにわたくしの明日
長い夜だった風鈴の音色
トンボ舞うこの道が好き風が好き
ゴーヤが美味いいい歳になりました
ススキよりコスモス友達が多い

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

人生の踊り場あたりシャンと立つ
今日も聞く夕焼けこやけ五時の鐘
通じ合えた喜び握手してしまふ
誕生日わたし転生するつもり
捨てられぬ物に責められ逃げ出せぬ

藤井寺市 鈴木 いさお

丁寧にアイロンかける一張羅
コーヒーに絆され酒に癒される
短調の響きが哀愁を誘う
親父の厳しさはきつと愛だろう
喜寿生きて七十七年分の垢

藤井寺市 吉田 喜代子

電車事故その日は何故か一両目
クーラー頼り令和の年を生きたくて
ゴキブリも暑さに弱いか出てこない
上皇后に優し上皇共白髪
細いサンマ食欲わかぬ秋の風

松原市 森松 まつお

紀伊國屋のブックカバーがお気に入り
うっかりと冷えピタ貼ったまま出掛け
アニメ見て泣くかと妻の薄笑い
まだ手立であるのか妻のダイエツト
勝新が持てば無敵のしこみ杖

箕面市 大浦 初音

夕立に犬も一緒に雨やどり
諍いの種がつきない青い星
置き場所を決める整理の第一歩
文句言う前に6秒の沈黙
全没の立ち直りには二、三日

箕面市 酒井 紀華

インスタ映え野菜サラダが競いあふ
曲った胡瓜伸び伸び自己主張
眩しいなあ勝者敗者の甲子園
後悔は雫のようにポトリ落ち
恋やぶれ傘の雫は切りました

箕面市 出口 セツ子

疎まれず逝きたい長生きもしたい
年一度四万十川に逢いに行く
方向音痴だからできない独り旅
自由とは孤独なものと知る齡
人の輪の中で癒している孤独

箕面市 広島 巴子

亡母好きな桔梗懐かし里帰り
亡父母の返事聞きたくお経読む
防災で自己責任と言われても
第三次なんて戦はごめんだな
真夜中に目覚め半眼無になれず

八尾市 内海 幸生

医者要らぬコマ―シャルほど効くのなら
誤字交ぜてやんちゃんな老友ともの温い文
パソコンがごねているのに孫は留守
大文字燃えるテレビの横に亡妻
電気代気にしておれぬ暑かった

八尾市 寺川 はじむ

生返事駄目押し効かぬ孫と居る
企業戦士馴染んだ昭和離れない
踏み違いニュースが脅す免許証
磨り減った指紋紙面が捲れない
充電が持たぬ八月の酷暑

八尾市 宮崎 シマ子

小さい秋見つけたけれどまだ暑い
唯我独尊だれも認めてくれないが
親と子の仲をスマホが離さない
夫婦でも一尺程は距離を置く
うちの風鈴に隣はきつとお腹立ち

八尾市 村上 ミツ子

毎日飲むというより食べているクスリ
靴擦れ予防しておこうさらの靴
うそもチョッピリませて書くアンケート
言い勝って今夜は眠れそうにない
創作落語の原点川柳だと文枝

八尾市 山根 妙子

フルーツと見紛うような珍野菜
舶来の祭りかぼちゃが闊歩する
着信はウインナワルツパリの音
知らぬ間に雨のち晴れの小半日
懲りごりの炎暑荒れる秋月夜

大阪府 米澤 俣子

温泉街の明かりしみじみ九月号(塔誌)
主婦にも欲しい働きかた改革
ワタシ流の物差しがある衣食住
よく働けた今日一日を自画自賛
家計簿に妻の文化が詰めてある

神戸市 上田和宏

川柳はやんちゃな方が面白い
みくじ中吉夏風邪に勝ちました
子にボール蹴るぞと言って届かない
後期高齢今も小さなころさし
胸の中に恋人ひとり住んでいる

神戸市 奥澤 洋次郎

偉そうにしてはりますけどなただす
命より金無くなるを恐れてる
AIに無用にされるとき間近
日除け全部下ろすはスマホ使う人
山にいてかわいがられたカラスの子

神戸市 敏森 廣光

スポーツと食欲選ぶ僕の秋
同窓会席争いはまだ続く
美人医者素直に聞けるアドバイス
地球上欲張りどもが競ってる
サングラスはずすと秋の色だった

神戸市 富永 恭子

黄昏時優しい曲が欲しい耳
選択肢二つ抱えて時止まる
単調な暮らしに虫も添うてくれ
頼れるは夫一人と言いつく
秋明菊嬉しいことに株増える

神戸市 山口光久

筋書きのない毎日が面白い
お医者さんが否という程問い詰める
電子音の中の暮らしの味気なさ
物忘れ激しくなっていく恐さ
食事時だけは一緒の夫婦です

神戸市 山口美穂

残暑酷し遠慮気に虫鳴いている
謝罪会見本場に謝る顔じゃない
勝者敗者戦に正義などはない
歳だからと自分慰め今日も終え
大切な杖ですあの世へ逝くのもの

神戸市 山崎武彦

沈んだらあかんあかと立ち泳ぎ
ひっそりと心の襷に住む般若
玉ネギを剥けばむく程出る疑惑
ぼろぼろのレシビを練れば母の声
そこら辺で納めなはれと酒を注ぐ

明石市 梶谷和郎

悲喜こもごも涙に同じ味はない
じゅばく解くほんとの私見てほしい
怒ってはならぬ器を見られてる
交差点出会いが運のつきでした
語るには涙が足らぬ八月忌

芦屋市 竹山千賀子

激励の姿で庭に花が咲く

ぶれぬよう今日も歩幅を確かめる

登りだけ考えていた浅はかさ

ユニークな兎の発想はノーベル賞

人力車大和の風を絵に変える

尼崎市 加川靖鬼

腹を立てたらアカン命が軽うなる

ひれ酒の味を覚えた千鳥足

顔の皺生きた証しを刻みこむ

芯を少し外して打てという極意

喰べるから名前呼ばない養殖魚

尼崎市 永田紀恵

さりげなく追伸にあるさようなら

窮すれば母孫ネタに五七五

心奥は決して書かぬ日記帳

ひらがなで話せば解ける蟠り

コピーした様に毎日暮れて行く

尼崎市 藤井宏造

ITに古稀のテンポを嘖われる

静脈を探す看護師さんの指

前例がとつても好きな公務員

コトコトと煮詰めています君の愛

喜怒哀楽素直に出して生きてます

尼崎市 藤田雪菜

つまずいた段差私も指の傷

猛夏の日に元気をもらうさるすべり

今日までの賞味期限に攻められる

なすきうり皆んな太って大笑い

処方薬変えて体調良くなった

尼崎市 山田耕治

ナスは要らんか菜園で呼んでいる

定年でもう仕事には逃げ込めぬ

散髪に行くにも亡妻に言うていく

登校の列よハーメルンの笛よ

命日はあなたが好きと言った服

加西市 山端なつみ

猛暑には涼しいモールウォーキング

盆提灯父逝つた日も超酷暑

うんとこしょ帰省の子等の布団干す

台風が教える電気水の益

犬猫のおせち予約がある時代

川西市 山口不動

不粋なりノースリーブに腕カバー

私より五年も生きる妻案ず

クレーマー蟬時雨には負けている

子や孫も台風も来てみんな去に

国と国罵詈雑言のきなくささ

三田市 足立 つな子

母元氣大手を振って里帰り
本命の浴衣にほろり夏祭り
ガラガラのバスに居合せ話し込む
息子より便利屋さんに助けられ
父偲ぶ百日紅咲く終戦日

三田市 上田 ひとみ

またねなんて気軽に言ってしまった
無器用で頑固ますますいいお顔
しんどいと言うても誰も信じない
思い切り眠れた若さだったんだ
逃がっているように見えたら悲しいな

三田市 大西 重男

秋風がトンボを連れて家の中
指切りをしたあの約束が幻に
老後の世話子供に望み託せない
揉め事は一歩さがつて風見鶏
朝目覚め今日の予定が浮かばない

三田市 尾崎 一子

台風にてんやわんやの盆帰省
墓参りみんな大きくなりました
うれしさに悲しみ混じる南無阿弥陀
みんなに囲まれ甘えている自分
ふるさとの祭りばやしが風に乗る

三田市 丸村 義徳

ストレスは丸めてポイとごみ箱へ
原因はストレス加齢ごもつとも
プライドと見栄が邪魔する水溜まり
増税は社会保障といつもの手
税にタグつけて行方を調べたい

三田市 多田 雅尚

醬油派とソース派が居て今平和
取れ立ての秋刀魚食卓スルーする
花には水俺はビールで我慢する
公共の施設が僕のリゾート地
左手の薬指だけ先に見る

三田市 谷口 修平

大胆な意見を述べる無責任
汗かけば報いてくれる夏野菜
留守電の返事が来ずに胸騒ぎ
間を置いた返事本音が透けて見え
甘い水飲んだ男の不眠症

三田市 野口 真桜子

子が巣立ち母に女が香り出す
十七回忌思い出せない義母の声
母と嫁のあいだで僕は立ち泳ぎ
炎の瞳持ち始になる初日
悲しき四十路母にも女にもなれず

三田市 福田好文

パスポート夢見ただけで期限切れ
子孫より夏の休みを待つ二人
お早うと言えば返事がある安堵
退職した後も夢みる棒グラフ
町内も派閥があつて風を読む

三田市 堀 正和

いいことがありそう鯨雲が湧く
寅さんになるか山頭火目指すか
秋風にふらりと覗く美術館
家族向けイベント藍の生葉染め
藍染めへママはスカートパパはシャツ

三田市 松本 ゆかり

鮮烈なデビュー仲代達矢の眼
時無限戦艦眠る海底に
金星と月が向き合う熱帯夜
夕立に匂いがあつた川の土手
欠点はみんな母方そうですか

三田市 村田 博

マイバッグ持てば地球も生き延びる
妻よりも永い付き合い友が逝く
凸凹のカボチャが変えぬ主義主張
ビールさえあれば毎日暑氣払い
一度たりとも鳴つた事ない非常ベル

高砂市 松尾 柳右子

友達も十人十色助け合い
食欲の秋に油断がつきまとう
感謝する毎日つづく八十路坂
三回忌過ぎた夫と夢で逢う
童心に返るトンボとスキの穂

宝塚市 丸山 孔一

人住まぬ庭にひまわりアワダチ草
寺の庭砂利踏みつぶし駐車場
良い人を亡くしましたというお世辞
苺とは草葉の陰の亡母なのか
免許返納北海道の夏諦める

丹波篠山市 北澤 稠民

真つ直ぐに釘一本がまだ打てぬ
今が旬年重ねても今が旬
明日のことわからないから絵が画ける
国豊か私だけが貧しくて
ごめんねと言えば仲よくなれるのに

丹波篠山市 久保木 剛

ヘルパーの来る日だ掃除済ましとこ
日当は計算しない農収支
戦争のおろかさ語る遺品展
トンネルが出来て溪谷見えぬまま
お酒さえ吞まねば私紳士です

丹波篠山市 酒井健二

鈍感に生きて長寿を試みる

神仏はこの世の闇に目をつむる

通行人Aから少し覇気もらう

いま扉開くと十人ほどは死ぬ

雨予報カラリと晴れた旅とちゆう

丹波篠山市 長谷川善輔

最後には体力が勝つ甲子園

甲子園冷房冷菓で見るテレビ

なるようにならぬ世の中なるがまま

免許返納脇見いねむり助手席らくちん

誰見てるの叱る妻亡くちよつと淋しい

西宮市 秋元てる

今はもう趣味とも言える探し物

秋の風人の香を恋う母の背に

秋風よ話し相手が欲しいのに

盆終る单身赴任の父を連れ

エメラルドグリーン尿の最高色と言う博士

西宮市 西口いわゑ

サルスベリまた会えました生きてます

飲み込んだ秘密一つを天に干す

窓あけるもう聞こえない蟬の声

ロゼワイン思い出ばなし果しない

雲悠々わたしも悠々生きてる

西宮市 福島弘子

有難い傘寿の卓球いい汗だ

手振り身振り孫の笑いを思い出す

悔しさも作り笑いで座を保つ

船を漕ぐ気付けばテレビつけっぱなし

森ビルにアベノハルカス抜かれる日

西宮市 福田正彦

宇宙にも基地を造ると地球人

うっかりが目立って来たな危ないな

夜空には地球の憂い映らない

ありがとう聞いてやり甲斐沸沸と

蝉しぐれ聞きわすれたか夏が行く

西脇市 七反田順子

炎天下老人パワー球を打つ

カラフルな薬に操作されて生き

夏水仙めでて暑さを凌ぐおばあちゃん

川柳塔の表紙毎号楽しみに

クロスワードこっそり夫がやっていた

南あわじ市 萩原狸月

自己主張まるい地球に角が立つ

京アニの火事でアニメの地位を知り

世渡り上手表情も使い分け

被災地の瓦一枚義捐金

酔えばよいだけのお酒に品がない

広島市 岸 本 清

笑いヨガ始めてからの身の軽さ
喜寿なれど自分ファースト貫けず
アルバムを開く旧知に会いたくて
スマホ族下を見ないで前を見よ
総理だけ憲法改正急ぐのは

竹原市 岩 本 笑 子

雨を待つ心君を待つ心
大根を蒔くと天気変わるかしら
カラスカラス見張りは十分しましたか
百均の種です全部蒔いてます
優しさよ厳しさよ秋の気配する

三原市 鴨 田 昭 紀

それぞれの良さがそれぞれある景色
人間不信知らぬ人とは話さない
ふるりの畳を恋しがる踵
一呼吸おいてじっくり語を選ぶ
コンビニに生かされている独り者

宇部市 平 田 実 男

エンジンのかかりが遅くなる米寿
ひと呼吸おいて波風立てず生き
ペアルック着るとわだかまりが溶ける
ほとんどが自分ファースト永田町
倅せは現役時代より忙し

下松市 有 海 静 枝

国民性黙して並ぶ最後尾
西方へ消える緋色のしゃぼん玉
振じくれて伸びる花芽の汗みずく
苦味すら見せない赤い実のたわわ
頑張れば軋む身体を後摩る

防府市 坂 本 加 代

片道の切符を持って自由人
他人の身に入り込まない飄々と
突然ですがと真相突いて来る
レスポンス待てど空しく恋終わる
大小の犠牲の上にある平和

鳥取市 池 澤 大 鯨

棚に手が届かないので孫使う
出世コース自分ではずれ自適する
平静をよそおい低い声でいる
低空飛行とにかくクリアすればいい
谷底で滝を見上げて感心してる

鳥取市 奥 田 由 美

特売日でももつとお得な見切り品
ライザップが味方についたダイエツト
熱狂の余韻いつまで五輪の灯
匂いだけ嗅がせ売り込む匂の味
犬だって顔が上げれぬ寂しい日

鳥取市 加藤 茶人

元職場はて誰やらと素気なし
何とまあ不気味夜中のひとり言
満たされる平和は腹も満たされる
母パート子守りで終わる夏休み
古民家を買った誤算のすきま風

鳥取市 岸 本孝子

足腰が私のエリア狭くする
同居して多少のことは目をつぶる
すぐそこに駅があるから乗り遅れ
あの美女もめつきり老けたクラス会
ナイターも残り少なくなつて秋

鳥取市 倉 益一瑤

交差点右か左は神まかせ
半眼で見て居る人の裏表
点滴に青空写る無の時間
病窓で夫を想うあれやこれ
初川柳病院だった師を想う

鳥取市 田 賀八千代

畳んでたはずの女が動き出す
同情に甘えぬように磨く羽根
同情から生まれた愛が崩れ出す
嫌なこと塗り潰しては進む靴
さらさらと幸せ運ぶ種を撒く

鳥取市 田 中天翔

青々と露草萌える庭自慢
恩赦ですのびのび育て庭の草
嬉しそう庭のおろぎ鳴き止まぬ
汗だくで灰汁が抜けます草むしり
悪しからず一日花の帽子花

鳥取市 棚 田大

うっかりの聞こえよい時悪い時
たまにやあね勝手気ままに過ごしたい
自己中が俺の勝手さならみ出す
孫たちの勝手な動き見入っちゃう
豊かさ聞いただけでも引き締まる

鳥取市 谷 口回春子

うっかりと吐いた本音に落とし穴
煽られて煽り返して地獄道
アベマリア聴いて頷く亡母の愛
我が家では夫唱婦随に誤字がある
プライドの研磨でやつと人になる

鳥取市 永 原昌鼓

身勝手に詫げる相手もない独り
うっかりが日常になる恐ろしさ
小太りでサイズ合わない試着室
歳のせい涙袋が閉まらない
銭払う役で食事に誘われる

鳥取市 夏目一粹

人生の答え出ぬ間に首になる
心配をかけない嘘を考える
生きていた証は死んでから解る
新聞を切りとる癖が役立たず
疑問符を考え過ぎて日が暮れた

鳥取市 平尾菜美

熱中症田畑に誰も出ていない
百パーセント気力晩学無理ですよ
いづれ逝く私下見の寺まいり
想定外惚ける準備はぬかりなく
裏方を立てる役者のうれし泣き

鳥取市 副井ゆたか

千歳空港ウニとイクラに幸もらう
北の郷追いかけ猛暑やって来た
阿寒湖でマリモの気持ち悪い遣る
知床に森繁久弥今も生き
道東でアイヌの過去と今を知る

鳥取市 前田楓花

減塩に慣れて素材の味がする
ナンブレで脳も気持ちも若返る
健康でないと会えない趣味の友
失敗から学んで知ったほろ苦さ
戦争を知っているのに核を持つ

鳥取市 山下凱柳

たらい回しされて病名老化です
二千万あるぞ余生は安泰だ
京アニの惨劇現場見て啞然
人生の息抜き求め五七五
寝物語来世もきつと一緒だね

鳥取市 吉田孔美子

デートにも大蛇伝説利用した
血圧注意好きでない父に似た
血圧など決心の外粹だった
庇いも指導もせず保身の教師
呼びかけに足の親指が動いた

鳥取市 吉田弘子

引きこもりこんなものかこの暑さ
ひとり芝居いいえ仏と話し中
私と生きた器はそのまんま
鳴き声で目覚めた雀どこ行っ
た
外食はお婆ファースト輪になつて

鳥取市 両川無限

都会にはとてもなじめぬ国訛り
馬鹿だなあつぶやくように叱る母
全財産ポチに譲ると母が言う
海荒れてドボルザークの曲になる
取り上げた酒を供える墓参り

倉吉市 猪川 由美子

日米首脳仲良しでよく会談す
拉致問題いつも後手後手されている
ウィークポイントすぐ顔に出てしまう人
上皇后の高齢手術案じ上げ
メンテナンス小まめにせぬとツケが来る

倉吉市 岡崎 美知江

考えを一寸変えれば風も吹く
輪の中のどっちを向けばいいかしら
座禅組み善人顔になっている
追い抜かれあおり歩行がしたくなる
百均で使うお金は惜しくない

倉吉市 田中 紀美恵

野良着似合う母の姿は日本一
厳かに拝む姿に亡母笑みを
手術して生きるチャンスを二度もらう
空だけはいつも変らぬ現在地
もやもやがいつも喉元行ききする

倉吉市 山中 康子

災害を敵のように見るテレビ
訓練が役立つ時がきつとくる
胃ガンじゃないその一言を待っていた
冷蔵庫ごっそり仕入れ機嫌よい
一番の宝はうちのひ孫たち

米子市 池田 美穂

御先祖に相談のない墓じまい
猪に守ってもらう山の墓
景気いい隣はサンマ焼いている
台風よ横断許可は貰ったか
運動会よその子ずっと撮っていた

米子市 伊塚 美枝子

デパートの地下から順に歩く避暑
日帰りの温泉ビール女子の旅
ぜいたくな貸し切り気分昼の風呂
女湯の静けさ破る客二人
妻の座にでんと座って五十年

米子市 後藤 宏之

太鼓判捺したつもりが的はずれ
得か損考えるのはもうよそう
艶っぽいうわさはなしに耳立てる
三角の心おフロでまるくする
太鼓持ち一度はやってみたかった

米子市 後藤 美恵子

高い棚縮む背筋のストレッチ
入れ歯には不利なパン喰い競争だ
鉛筆とお喋りしてる独り居り
遺された柱に心立て直す
アルバムの中のトップに若い亡夫いる

米子市 竹村 紀の治

ワンテンポ遅れて笑う僕のギャグ
負けているほうを応援甲子園
蝉の声もう戦争はなりません
退屈も孤独も酒の当てにする
缶詰の青み魚のローテーション

米子市 中原 章子

前触れと思いたくない物忘れ
値上げ後のふところ寒くなるばかり
猛暑日の節電頭素通りす
元氣よいひまわり畠笑顔で
子や孫が囲む米寿の膳につく

米子市 成田 雨奇

晩酌の言い訳をする川柳で
決然と医者言う酒は飲めません
キャンセルの電話あちこち病床で
誤嚥性肺炎という字が書けた
この世からふわりと浮いて極楽へ

米子市 野川 宣子

花嫁の笑顔弾けるはがき来る
筋書きのないドラマ二人で演じ切る
地方から歴史を変える風よ吹け
どの会も同じ顔ぶれ役回り
横丁の馴染みの客も代替り

鳥取県 門村 幸子

朝だけは元氣フツフツ湧いてくる
健康度お腹空くからまだセーフ
静と動二人違って仲が良い
するめ焼く匂いなつかしウォーキング
めげぬよう腐らぬように一人旅

鳥取県 斉尾 くにこ

逆向きのハンガーきみも意地っ張り
ランダムに並べましたと目鼻口
カ・カ・カと履けなくなつたハイヒール
守られてこち良くて不自由で
パソコンも筆記用具の仲間入り

鳥取県 竹信 照彦

秋野菜種は蒔いたが芽よ出るな
台風は大山さんが押し返す
老碌をしたら浮かんた秋の雲
浮き雲や爽やかな秋ボクの空
缶ビール飲んだら冷めた暑氣中り

鳥取県 山下 節子

土産話いっしょに行ったように聞く
家族皆認めるエース母強し
風をよむことも覚えて赴任する
制服がその気にさせる仕事ぶり
記念樹を根こそぎ倒し台風が去る

松江市 石橋芳山

出雲市 岸 桂子

ポインとはうなじの滑り方みたい
白い布汚れるだけを待っている

難題を抱えたままに秋が来る
朝刊を読む時わたくし素顔です

宣戦布告右手に持ったハエタタキ

クエッション残したままで妥協する
義理一つ返した今日の軽い靴

ビブラート効かせて波浪注意報

日めくりをまとめて剥す日の早さ

食べ飽きたグルメにタクワンを齧る

雲南市 松本 昌

松江市 松本 知恵子

リベンジの秋にしたいな風立ちぬ

人間の弱さしみじみガン告知
冷静になれぬ我が身にガン告知

自転車スイスイの友に負けそうな

ガン告知遠慮はしない若い医者
ガン告知だまして生きる術はなし

春夏秋冬森が奏でる歌を聞く

人間の大きさを知るガン告知

私より辛い飼猫の夏バテ

人間の大きさを知るガン告知

いろいろな杖で残りは生きようか

島根県 伊藤 寿美

松江市 松本文子

たつぷりと頂きましたベンと夢

ケアハウスの窓辺で読んだリルケの詩
聖子逝き紐解いてみる棚の古書

窓を開ければあの世が見えるあの人も

八日目の蟬を聞いてる座禅堂

独りもよし同居もよしと靴揃え

ニニロツソ聴いた聴いた浜辺の離岸流

ペットは冷房私は団扇夏過ごす

告知された命と生きた日は宝

10%が固くする財布

岡山市 大石 洋子

出雲市 伊藤 玲峰

刻んだり摺り下したり食べ易し

なめられてカラスにずっと睨まれる
かけ放題無料の電話こわすぎる

お嫁さんの優しさ楽し生かされて

草木は真っ直ぐ立ってほしい
古稀になる脱皮するのにいいチャンス

淋しさに亡夫の机と里話

読むつもりの本の切り抜き箱いっぱい

悔しさもパワーにこの世楽しもう

生かされて楽しいこの世長居する

岡山市 工藤 千代子

諦めてしまえば明日が動きだす
屋上の風ですつきりする涙
乳液をたっぷり今日に蓋をする
虫でさえ伊予弁になる里帰り
不思議だなあ同じ男と五十年

岡山市 永見 心咲

群生のコスモス風の意気地なし
さみしいと言つては譜面裏返す
わたくしの隣は神の指定席
大胆に散ります粉々に未練
転んだら素直になれた膝小僧

岡山市 前田 恵美子

我が歳ももはや五十と鯖読めぬ
指輪よりしゃもじの似合う手が動く
選んだ道楽しみながら進みたい
選んだ手ゴール着くまで離さない
街じゃなく町でよかつたサンマ焼く

笠岡市 藤井 智史

年中無休です嫁を募集中
マイナス百九十四度失恋
固まった縁談話溶ける夏
二十四時間縁談を受け付ける
順調な筈だ婚活終えた後

岡山市 大杉 敏夫

婆様の手塩で旨い御御御付け
老農へ鹿猪がチャチ入れる
盆踊り赤い蹴出しに惚れました
生きているただ一本の樹の下で
身に合つたネジが昨今見当らぬ

岡山市 田中 恵

一輪の花が涼しい夏座敷
脳回路赤の点滅ふえてくる
天職と思えばやる気湧いて来る
ワンパターンの笑顔が集う喫茶店
ふるさとの昭和を語る茄子の馬

岡山市 藤澤 照代

星振る夜銀河鉄道満席に
戦争の悲惨さしかと聞く正座
年金の軽さで重い台所
十五夜をもてなす団子芋すすき
来年の夏帽子買う生きたくて

岡山県 山縣 のぶ子

添削の赤字なる程なとうなる
風鈴が日毎に秋の涼運ぶ
来客に好きなカップを選ばせる
旅帰りの壁の帽子がよく喋る
気に入りの帽子足取り軽くする

松山市 栗田忠士

所在無さについ深爪をしてしまふ

無いものは無いとはつきり言っておく

回顧録残りページもあと少し

Tシャツがもつぱら僕のユニフォーム

しくじりも笑いに変える楽道家

松山市 宮尾みのり

詐欺電の声は美人と思わせる

留守電にすれば何にも喋らない

その時になれば他人は卒の外

CMはスルー録画で見るドラマ

片付け下手右を左へ置いただけ

松山市 柳田かおる

イライラは自分ファーストではないか

この暑い最中に停電のニュース

地下の茶房でホットお抹茶を一杯

淡淡と今日が流れていく焦り

水平線は疲れた今日を抱きしめる

西予市 黒田茂代

十月まで記念切手は我慢する

風鈴からコオロギ音の世界も秋

カタカナで鳴くコオロギもウグイスも

あけびの実思い出色に熟れてくる

濡れた心干すにほどよい秋日和

西予市 西田美恵子

生き方それぞれ水蜜桃も渋柿も

萩満開誰か遊びに来ませんか

今が旬七十三の美人です

食べれなくなるから今のうち食べる

夢は起きて見るもの寝ては見れぬもの

高知市 小澤幸泉

花の日の恵み届ける老いの家

つるし柿ゆっくりひとつまたひとつ

鯛雲いまだ戻らぬ義兄を待つ

敬老の日ニュース孤老の死を伝え

生きている私まだまだ生かされる

土佐清水市 辻内次根

外界と途絶えて五日わが庵

仰向けに寝ると痛みが気持良い

冷房を止めてしとしと雨の音

忍び寄る秋の気配を知る障子

キャッシュレス財布の中は今日静か

熊本市 杉野羅天

おてもやんサンバに染まる朱に染まる

コーヒーの水位を下げる夏の喉

PMの汚れにも虹はかかりし

赤とんぼ舞う梅雨明けの栗の実よ

少女三人つつじの白と菌の微笑

熊本県 岩切康子

拘りは令和の令にいつまでも
学友も早起きらしい5時メール
鯛が冬の支度を急がせる
投函し心身弛み生ビール
子供相撲弟たちは強かった

北九州市 小松紀子

一つ二つ肩の荷おろすエンディング
ぼちぼちと生前整理やっている
きつと出来る八十までボランテニア
けんめいに生きたセミです埋葬す
まだ若いパワー全開七十八

唐津市 坂本蜂朗

停年後亭主専用台所
外面を磨く男に後がない
子や孫は遠くで元氣老い二人
リードする妻に従い生きている
愛憎の波が逆巻くまだ若い

唐津市 山口高明

奪衣婆の渡し賃さえまだ貯めず
干瓢を作る夫婦の息阿吽
ムムムムと沈黙黙考プロの棋士
主婦だって胸に秘めてる活火山
倒れてはいぬか長風呂のぞく妻

札幌市 小沢淳

目を皿にしても見逃がす校正部
妻の愚痴連綿体でやって来る
出来ちゃった婚に恥じらない若さ
AIを頼り恐れている社会
いのち幾許こころ残りはなかったか

札幌市 三浦強一

病院の梯子で長寿しています
食前食後五臓六腑は葉漬け
ヘンシーン政治屋さんの保身術
ロボット兵器これじゃ人類全滅だ
終活がまだ出来ません死ぬません

塩竈市 木田比呂朗

あーあーと今年も霜月の暦
検診値年相応をよろこべず
語彙不足思わぬ時に顔を出す
結論の重さに惑う紙コップ
原発稼働させて隣国批判

弘前市 今愁女

災害で日本の四季が壊滅す
未来永劫地球は青い言われたし
今年も豊作畑の林檎色づいて
健常者だけの食事会なり敬老会
菊供養終え菊膾手ばしこく

弘前市 高橋 洋子

あれそれで心通じる茶飲み友
こぼれ種いつか芽を吹く底力
耳鳴りを暫し忘れる蟬しぐれ
免許返納日替りランチに似る迷い
勿体ない歩きスマホの紅葉狩り

男鹿市 伊藤 のぶよし

熱中症も耐えてヤットの秋を聴く
青春の芯座右の銘に確と住む
語り継ぐ昔柿の木残るだけ
長生きをためらいがちにさせる国
惚けぬうち開けてみたいな玉手箱

(前月分) 奈良市 阿部 紀子

令和初両親の墓お参りに
母急ぎ希望通りの墓作り
十年後父満足し逝きました
待つてね私も横に立てるから
風流な鱧中心の京料理

(前月分) 熊本県 岩切 康子

早朝から恋が始まる蟬しぐれ
境内の石段で脚試す
まだ元氣割引カード更新す
句集出す句は生れずに後がない
望まない係が付いて趣味多忙

温故知新

小出智子川柳集『露の臺』から

身のうちのランプが少し揺れている
わたしの花に何時でも水をやりすぎる
雲走る一期一会は大切な
春は他人の花がきれいに見えてくる
両方の指を合わせて知恵とする
秋風や身のすみずみを繕いぬ
言い残すことを毎日言うている
失敗でふくらんでゆく雪だるま
暑かった夏を見送る峠茶屋
盗みたいものがいっぱいある他人
尽くみそうひとりの湖をもつひとに
川上の人を信じるほかはない
ふる里が同じであると言うだけで
人には情けお地藏さまによだれかけ
うっかりと食べた餌なら食いとおせ
胸のバッジと討ち死にするまでだ
温かい炬燵の中の無神論

川柳塔の

川柳讃歌

(176)

上方芸能評論家 木津川 計

川柳燦爛わが人生の道しるべ

三浦 強 一

番傘の重鎮だった岩井三窓は「人の世の寂しきものにみちしるべ」と詠んだ。拙著「人生としての川柳」で私はこう評した。「この句、橋高薫風さんの、けだし名吟「人の世や嗚呼に始まる広辞苑」と並んで人生句の白眉とする」と。人の世の険しい道をためらわず、まっすぐ往く人は少なからう。だから「みちしるべ」に頼るのが三窓には「寂し」かったが、強一さん、輝く川柳はやはり「人生の道しるべ」なのです。その光を浴びる幸せです。

うかうかと生きた浦島花子です

津村 志華子

浦島太郎は三年を竜宮城で楽しく「うかうかと生きた」。ふと年老いた母親を思い出し、帰郷すると三百年の歳月が過ぎていることを知って驚いた。俄かに乙姫が恋しく「開けてはいけない」と言われた玉手箱を開けると

一筋の煙が立ちのぼり、太郎はみるみるよほよほの老人になってしまった。玉手箱には三百年の歳月が封じ込められていたのだ。志華子さん、太郎は三百年をうかうかではなく、幸せに生きたのです。貴女の人生と同じです。

なんぼ生きてても死にたいと思わない

大久保 眞 澄

三百年の歳月を封じ込めた玉手箱の意味するものは上の句のような不老長寿願望に他ならなかった。万葉集の時代、千三百年も昔から人びとは丈夫で長生きしたかったのだ。そのためには歳月を封じ込めたら叶うのだった。もう一つの方法のあることを川柳塔の同人・安藤寿美子さんがかつてこう詠んだ。「歳月を待たせておいて飲んでいる」。眞澄さん、不老長寿のためには歳月を待たせても叶えられるのです。どちらかの方法でどうか長生きを。

灯籠流しをきれいだけ言おうか

星 野 育 子

「精霊にもふるさどがあり、いそいそとした旅があり、なつかしい憩が必要なことを知っているの、人々は彼等をむかへ、わづかの栄光と音楽をあたへ、たまゆらの火花を燃し、地にみゆる典雅な幸をわけ合うたのです。(中略)さようなら、さようなら」。丸山豊の「精霊船」だ。灯籠流しは「きれいだけ」

は言えない。精霊を又ふるさとへ帰す別れの習俗なのだから。しかし育子さん、地の典雅な幸をわけ合うたことを欣びとしましょう。

待つ人のいない故郷の盆踊り

森 田 旅 人

啄木は悲しかった。「石をもて追わるることくふるさとをいでし悲しみ消ゆることなし」それでも啄木はふるさとを恋慕慕った。「かにかくに浜民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川」「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」、そして絶唱「ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな」。そんなふるさとに待つ人はいず、遂に帰らぬまま貧弱の内にて27歳で没した。肺病、いまでいう肺結核だった。旅人さん、啄木への哀悼です。

ゆるすまじ歌い今年も原爆忌

清 水 英 旺

「原爆忌声朗朗と響かせて奈良岡朋子」「黒い雨」読む(田中令三)。今夏も吉永小百合、渡辺美佐子他何人も女優が「原爆を許すまじ」の思いを読んだ。美空ひばりも広島島の平和音楽祭に二度出演、二度とも「一本の鉛筆」(松山善三作詞)を歌った。「一本の鉛筆があれば/私はあなたへの愛を書く/一本の鉛筆があれば/戦争はいやだと私は書く/一本の鉛筆があれば/八月六日の朝と書く」

自選集

小島蘭幸

九十五の扉の中にある聖火
古いアルバムを見ている 逢いたい
生き様を語れば松江城揺れた
フエスタは終わった祝杯は妻と
わたくしの節目節目にある奇跡

三宅保州

愛国心どうあれ税は納めてる
タイムカード押すとのつぺら棒の顔
急がないけれど新幹線に乗る
正面玄関イコール非常口
奥様によりしくと言うライバルよ

福士慕情

盆火ゆらゆら ちちが来たははが来た
カラオケが主流になった秋まつり
津軽残照チンチロ虫が鳴きだした
豊作のキノコ山には熊がいる
日溜りで羽根を下ろした鬼ヤンマ

宮西弥生

風鈴の雫したたる一行詩
奔放な暑さに背向いていく猛暑
世を甘く見すぎて風鈴響かない
炎天と仲良くなった夏祭
重い荷の一部は里から来た野菜

村上玄也

三度目は聞きかえせない遠い耳
グルメルポやたら美味いと褒めたくる
グルメルポ「不味い」を聞いたことがない
アポ無しで突如足腰痛みだす
気を許すとお国言葉がついてでる

森山盛桜

速過ぎる日々アフレコが間に合わぬ
逃げ水の如く捕まえられぬ影
リュウグウノツカイは口を開かない
口コミで聞いて出掛けて行く程度
新語など遣わなくても生きられる

八木千代

眺めせしに Ⅱ
それは極くほんの僅かな火種から
同居なら さざ波くらいあたりまえ
陣取りごっこなどしたくない 自制する
永らえて眺めたいいろいろな戦
終りのない戦 わたくしと私と

残り火を燃やし続けて悔いはなし
いつからか隅っこになる指定席
不条理の世を生かされている肩の凝り
ペン手放せぬこの道にもっと奥
我が家のまつり娘一家が帰省する

山本 希久子

板尾 岳人

不器用で干支で答える十二月
父のこと聞けば嫌がる鉄カブト
几帳面ないのち食後の皿洗い
リベラルな命だ白寿まで歩く
除夜の鐘聞きながら呑む森伊蔵

川上 大輪

お医者さんが笑ってるから痛くない
お茶漬けに決めて悩みを一つ消す
顔色が変わる嵐になる予感
錆ついた釘が喋りたがっている
黙秘権一部始終を知っている

北野 哲男

休止符の多い楽譜を綴る日々
少しだけ若返りしたクラス会
大安の幟につられ宝くじ
零余子採り顔にかかった蜘蛛の網
耳鳴りも満月の夜は風情あり

ハートからハートに虹を架けましよう
冷徹な視線に凍りつくハート
崖っぷちの風に覚悟をするハート
棲みついて鬼がハートを出てゆかぬ
お祭りがすんでハートはがらんどう

木本 朱夏

斉藤 劼

輪を離れ輪の中がよく見えてくる
自己主張決して曲げぬ唐辛子
埴輪の瞳何やらものを言いたげだ
再会の場は哲学の道と決め
約束を果たしてくれた種袋

新家 完司

晩年の坂はぬるぬる苔だらけ
自尊心削るポイントカード制
ゴキブリの親玉チャムチーと鳴く
脳梗塞も脳溢血もおことわり
アマニ油を舐めて百歳まで歩く

高瀬 霜石

断捨離の果ての見事な殺風景
洗濯をしに行きましよう美術館
目を閉じる前に言っとくことがある
浮世とや百とハツの丸木橋
12月恩師の長い影法師

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

雑踏へまぎれるときの好きなる人

おみくじにやがてとあつてよろず吉

かんぜより下手の一本まぎれなし

七十と三十の恋指相撲

孫ふたり初湯の桶のよい響

明けましておめでとう無言電話にも

ほんとうに死んでしまった死んだふり

サッチャーとアキノの違いほど違い

思慮深き一本それは折れた葦

白頭巾白涎掛け雪仏

大相撲昔のことは言わぬこと

辻川慶子さん還暦

還暦にはたちの青春がまだ残り

世は暗し腸饅えた鯉のぼり

義妹の死 三句

槍穂高白馬も葬送れ神妙に

紅冴えて花嫁化粧にはあらず

別れして猫の頭を撫でるのみ

走馬灯花も犬ほど走るなり

追うことは逃げることなり走馬灯

高野山にて 三句

般若湯師の槍さびが聞こえそう

法悦にあらざるはなし仕舞風呂

宿坊の夜明け寝相も人格だ

秋田・青森の旅 四句

北限の鈴虫を聞くひとり旅

寒風山男鹿の芒は背が低し

太宰真似て頬杖をつく斜陽館

昼の月十三の砂山海晦し

水煙抄

川上大輪選

三田市 中山 昭美

文化財クギも打てないマイホーム
一言で周り凍らすマイペース

書くことが無いのも良しとする日記

うっかりと踏んだ蟻にもある手足

スマートフォン持たぬが今日も生きている

おっちゃん猫撫声でベット呼ぶ

黒石市 千葉 風樹

つのかくし乳酸菌を発酵中

何度も何度も笑いお爺さんになった

改元にティラノサウルス生きかえる

カーネーション母に泣かれたことがある

懺悔部屋ぐるり天使の絵が包む

尊厳を袋綴りする紙おむつ

河内長野市 穂口 正子

六十代すぎで老人一括り

この出会えきたらスルーしたかった

懐っこいワンコの様な友がいる

脚とじて詰めて私も座りたい

子や孫で町生き返る盆休み

カラフルな神の落書き虹が出た

貝塚市 吉道 あかね

私の傷を教えてからの仲

今はもう忘れ上手になりました

駄菓子屋で拾う私の幼き日

あの頃は木の実拾っていた遊び

途中下車思い出だけが待っている

落し蓋じっくり秋を煮込んでる

大阪市 樋口 真

好きなこと色々あるがみな半端

秋の花巡り楽しい一万歩

案の定正論吐いて叩かれる

求人難それでも歳が壁という

要領はよいが誠意に欠けている

コマーシャル上手に自慢ばかりする

松山市 郷田 みや

花束を抱いた右手がぎこちない

ややこしい事は言わないバラ一本

△は付けたくないがアンケート

監視カメラ疾しいことはありません

鉛筆かボールペンかで迷ってる

リハーサルしてから留守電を入れる

大阪市 柴本 ばつは

発破かけてくれる母ちゃんもう居ない

冥土の旅キヤツシユレスなお母ちゃん

頑固という表情消えたデスマスク

残り火がまだ燃えそうなお母ちゃん

いつでもええ亡母のローンのおかげです

文句無し聞える見える食べられる

三田市 稲角 優子

浮き沈みこえて見ました丸い月

母の部屋いつも明日がみて通る

友の文なき故郷をつなぐ糸

萩のみちしばし心を遊ばせる

愛おしむ鼓動を刻む子の遺品

子を思う終着駅のない祈り

門真市 坂本 星雨

川柳にすると涙も虹になる

ビー玉越しに少年の陽が沈む

明日へと夕日を友として歩む

頑張れと全細胞に言い聞かす

頑張った今日のいのちへありがとう

終章を金糸銀糸で織りあげる

黒石市 北山 まみどり

暑の文字がやわらいでいく葉の揺らぎ

誘われたわけではないが乗ってみる

行き先を尋ねて機嫌損ねたか

お任せをしても不安は残るもの

本当はのんびりここにいたいだけ

濡れるのも逃げるのもまた迷い道

山口市 中前 幸子

邪心抱く胸パイブルに裁かれる

都会の森を彷徨っている赤い靴

重い海鳴り友の訃報を告げに来る

酸欠の海へ喘いでいる記憶

太陽に弾ける虹のシャボン玉

亡母が押ししてる夕焼けの乳母車

寝屋川市 岡本 勲

年金でうまくカジとる妻の腕

仕返しはぬるいビールにぬるい風呂

さからわずわかったふりで従わず

目ざす道ちがうが二人馬が合う

見直しはたたぬが寄ってくるあの世

あと少し泳ぎ切れるか傘寿坂

横浜市 巖 田 かず枝

子等の無事朝夕祈る私です
大風にしがみついている袖子けなげ
アフリカも子ども食堂あつたらな
午前四時虫は寝ないで鳴いている
気づいたらすぐにやらなきや忘れそう

横浜市 長 島 亜希子

後期の中じゃ一番若い夢を持つと
うっかりミス暑さのせいでできた夏
頼られて学ぶ機会を与えられ
良い季節遊び疲れた要注意
にわか雨急くことはない雨宿り

栃木県 廣 瀬 良 磨

風鈴が夏から秋の音になる
拭き取るか床にたまつた夏の汗
幸せな君のためなら嘘をつく
還暦に近づいている丸い月
真実を隠しています月の裏

名古屋市 富 田 末 男

さっぱりとした人だから場が和む
諦めはしない希望を持ったから
未練など持たない前を向くために
まず外へ誘ってくれるスニーカー
もう少し時間ください光るから

江南市 脇 田 雅 美

ワイパーの届かぬ場所に鳥の糞
側溝の蓋の狭間で咲くスマイレ
肩切って歩いた街も閑古鳥
あれこれと思いはあるが進もうよ
大都会一步入ればスラム街

奈良市 加 藤 江 里 子

秋の夜バズルの欠片持て余す
本の帯に惹かれて買った文庫本
待ち合わせ行基像へとまつしぐら
青年の後ろ姿と稲穂波
煩いを少し忘れて月を観る

奈良県 室 田 行 久

年とともに心配増えるがすぐ忘れ
断捨離とコレクションとの板挟み
声も出ぬ咀嚼に励むバイキング
大繁盛過労死しそう閻魔さん
悪いこと恥ずかしいこと癖になる

和歌山市 北 原 昭 枝

合ってくる歩幅にふたり黄昏る
丸くなる背なが知ってる生きた日々
切り捨てにされそうになる高齢者
寄り添うた小袖茶漬の味がある
さわやかな秋空ゆるり柿をむく

和歌山市 倉橋悦子

おもてなしトイレにうちわ置いてある
慕仕舞い静かに供養したいだけ
全快を信じて待った赤い靴
満月と揺れてひとりの露天風呂
行く末を見つめて老いと握手する

和歌山市 定松定枝

皆元気墓の話に盛り上がる
特売の卵二倍の交通費
胃袋に開放的な寛大さ
痕跡を残さぬようにつまみ食い
子に残す一行だけの遺言状

和歌山市 佐藤まき

地団駄を踏んでも時は戻らない
急がねば仕分けに時間掛かります
然は然りながら応援したいテレビ観る
無事過ぎて備蓄のパンも替えどきに
備えての後は神仏祈るのみ

和歌山市 鍋嶋澄子

玄関で睨むシーサー守り神
ぶんだらを踊る妹すまし顔
カート押し右往左往の大型店
波の音旅の思い出うち寄せて
紫陽花を雨が手伝う七変化

和歌山市 西川千鶴

NG連発カメラ目線のエキストラ
倦怠期笑い苺でも食わせるか
後五キロ痩せたら行けるクラス会
アラームも今朝はご機嫌いと悪し
ダヴィデ像に数滴垂らす惚れ菓

和歌山市 福島一雄

食べる糧減らすも秤無愛想
皿一杯山盛りにするバイキング
一汗も二汗もかく散歩道
ピーマンや茄子をかすめる秋の風
あの世での友達求め趣味増やす

岩出市 村中悦男

幸せと夕餉の後の古い二人
ほっといてまた一言が多すぎて
足腰が焦る心の邪魔をする
経験が邪魔して迷う選択肢
一言を転がしている喉の奥

和歌山県 三枝眞智子

ぬるま湯につかって独り枯れてゆく
残された絵の具でハート画いてみる
ドレミファン朝の一声ランラン
花見れば乙女心が顔を出す
忙しくても朝ドラだけは見て動く

大阪市 石田孝純

まだ返納しませんが恋の免許証
力抜き風に任せる四コマ目
夏バテの心に塩をひとつかみ
だからって明日も雨とは限らない
思いつきり笑って元氣チャージする

大阪市 中村民子

笑ってる母は百歳越えました
あやとりを母に教わり子におしえ
あれこれと悩みは持たぬ頭陀袋
気が滅入る心開けと万歩計
息抜きにローカル線に乗ってみる

大阪市 降幡弘美

買いだめをするためのカネ持つてない
声変わりして兄弟の区別つき
イケメンに撮れよとゴリラ目で合図
解答の書き方に出る子の個性
雨雲にふりまわされる観戦日

大阪市 森廣子

ブランコで暫く泣いて帰る家
背を伸ばし蟬の遺言聞く大樹
自由奪われ水族館に住むイルカ
歯の裏を舌で探って抜けぬ骨
口あんぐりと壺の自由さ放漫さ

堺市 羽田野洋介

便利さに慣れてずばらになってきた
ど素人言ってるうちに追い越され
トンネルを抜けると季節変ったた
見残した夢を訪ねて朝寝する
昔かたぎ四角四面に行儀よく

池田市 倉本一弥

苦勞した母のおにぎり塩が濃い
悩みの種含んでプイと飛ばしたい
トントントン櫃のまな板調子とる
独り笑うつまづく段差一センチ
「君の名は」観て出て妻に歩こうか

泉大津市 助川和美

ねぎらいの言葉の代りビール注ぐ
捨てる本葉のページ読み返す
自販機のごロンと落ちるウーロン茶
子を叱る声がつつぬけ夏休み
指先をピンクに染めて喜寿の妻

吹田市 岩口のぞみ

秋刀魚まで高級魚とは、うまいけど
必要だった今夏のクーラー電気代
運動会園児の元氣こだまする
夏痩せをせずに迎える食の秋
父が居た特等席でテレビ見る

豊中市 荒木郁子

永遠の眠り誘った突然死

幼子の分からずはしゃぐ黒い服

斎場の気分紛れる空の青

レターバック細やかな愛娘に送る

冥土のみやげパラグライダーで飛ぶ

豊中市 齋藤 奈津子

この人のB面知れば惚れ直す

終活に会っておきたい人がいる

三曲目だんだん調子乗ってくる

耳鳴りも忘れて過ごす蝉しぐれ

ラーメンが出来たところに長電話

枚方市 谷 英也

予期すれどこんなハード老介護

八十路過ぎまだまだ先よ黄泉の国

台風後澄んだ青空気持ち晴れ

古時計刻む音色に父の声

刻む音辛せつくる朝餉膳

八尾市 前田 紀雄

昔淑女今手に負えぬ山の神

もてなしも一線越えて尾鰭付く

徒花にならない秋茄子の律義

香港が三行半を中国に

二千万無いが葬式代は有る

大阪府 奥野 健一郎

慰めてやればやるほど啜り泣き

整形後お盛んになるお付合い

病気みな明るく治すコマーシャル

貧乏がなんでも器用にしてくれる

出来ぬ事また決めていく反省会

神戸市 大頭 としお

栄光と挫折の涙知る枕

書き損じポストの中で呻いている

ありがとう言えずに終る日の懺悔

ボロ出ますそれから先は言わないで

ガンバルぞ拳突き上げ立眩み

神戸市 玄 番 美恵子

逆流に堪えて産卵母強し

友逝きて祭囃子が遠くなる

スタート点立てば決意の血も騒ぐ

呑気そう見えてせつかちよく転ぶ

命日に母の好物そばを打つ

神戸市 田本 古鈴

あの人がない煙草が目に沁みる

幸せにならないうちに月欠ける

後悔がいつも夜明けを遅くする

雅楽聞くこの世の垢がないごとく

善い事もたまにあるから生きられる

神戸市 松倉正美

不断着で来いと言われて若作り
ふるえる字味があるとはべんちゃらか
万病に効く湯は呆けも効きますか
会社では物言えたのに家じゃ無理
孫の名を呼び間違えて叱られる

神戸市 山根弘華

さまざまな噂流してブーム去る
負けん気がプライド捨てて吠えている
未来地図私の愛を書きそえる
没句でも一文字そえてかえり咲く
役割でもめてる中をそっと抜け

尼崎市 清水久美子

どうにでもなれと賭けたら大当たり
効く効かぬより気休めに飲むサブリ
増税を横目に睨み買ひ漁る
クーラーをけちり夏バテ水太り
逆縁の辛さを思う長き夜

伊丹市 延寿庵野鶴

曼珠沙華燃えて一途に天を衝く
にんげんの匂いと語るにぎり飯
まだ学ぶ事が多くて辞書を繰る
人生の苦楽を語る笑い皺
保護色を纏い都会を闊歩する

三田市 辻開子

携帯をスマホにかえて脳に活
大げんか一晚眠ればごめんいえ
十余年続く介護もマンネリに
酷暑去る暑さは今も猛暑日で
ウォーキング靴は新調準備でき

三田市 森玲子

願い込め切手を旅へ送り出す
耳鳴りをBGMにして眠る
気をつけてます塩分控え腹八分
小柄です集合写真背伸びする
急ぐ道前のパトカー気にかかる

丹波篠山市 澤良子

病んで知る二人の絆常しえに
なぐり書き機嫌表わす置手紙
脇見すりゃいっばいっばい見えてくる
円満な幸せ家庭は妻まかせ
ピンコロが理想と願ひ慕まいる

丹波篠山市 横溝安子

古女房上座にデンと座ってる
リフォームで代々継いでゆく古着
虫干しの古着の中に母の顔
母さんの古着の匂いなつかしい
取り出して広げてたたむ古着です

西宮市 高橋 千賀子

台風があほうさらった阿波踊

誘われるうちが華まだ彩がある

ふわふわと地に足着かず根なし草

昔の灯ついた夜店で食べ歩き

秋雨に竹馬の友に便りかく

竹原市 土井 輝 恵

おしんは亡母亡姉にはなつを重ね観る

酒が出ぬデイのマイクは持ちません

彼岸花心に一つ毒を持つ

カードでは対応出来ぬのし袋

ゴキブリを追いかけ今日のりハビりに

広島市 田 桑 恵 子

迷い蚊をピシヤリその皿は誰のもの

コーヒートをホットに変えて秋迎え

朝一番洗面化粧活入れる

友からの電話に煮物止めに行く

とりどりのおせちのチラシまだ九月

府中市 岸 田 武

蚊帳を吊る昔話を孫にする

スニーカーまだまだ足が前に出る

友の訃へ一日はーとして過す

信念もときどき呆けていけません

孫が来て仏壇の鐘叩きます

三原市 笹 重 耕 三

眼裏に住む少年の秘密基地

ラムネシユワ昭和の声がする夏日

孫の顔見ると乾杯したくなる

微分積分必要のない余生

昭和の声残して廃校がポツン

三次市 伊 藤 寿 子

あの世から電話きそうな鱭雲

恋の句をさらりと詠んでいたあなた

どこも悪くない元気げんきを信じてた

金槌から浮き輪を取ったのは神か

遠花火ふるさとへもう帰れたの

鳥取市 山 野 す み れ

難しい話はいつも寝てしまう

一列に上手に並ぶサヤの豆

過去一つ語らぬままの縫いぐるみ

白鳥は余裕の顔で水をかく

化粧して畑へ行つて草を刈る

倉吉市 大 羽 雄 大

転ばないエール交して散歩道

本音だなちよっと出ていた口辺り

へそくりの場所はだいたいあの辺り

背丸く膝の曲った影法師

独り居はこんなもんかと妻旅行

倉吉市 宮田風露

鳥取県 飯野菖子

消費税あげるより先議員減せ

相席になってお蕎麦が味わえぬ

熟読のつもり熟睡してしまふ

虫達の生演奏が始まるよ

虫の声オーケストラの舞台なみ

境港市 藤原久直

都合など気にせず生きる歳となる

夢を追い欲張り過ぎてシャボン玉

スズメバチ追って追われてコブ二つ

転んでも只では起きぬ老いの意地

転び方教えてくれるスキー場

米子市 川本美津子

終活を始めて顔が老けて来た

猛暑日は亡母に供えるアイステイー

張りすぎた見栄が邪魔して友は去る

広がる輪孫がとりもつお付きあい

うづ気分冬眠したい穴掘って

米子市 戸田真理子

夏休みワイファイ付けて孫を待つ

胃カメラで覗いてみたい腹の虫

脱輪し無茶な歩みを今気付く

古傷は折って畳んでしまひ込む

豊かな世ゴミらしくないゴミの山

嫁に来て大きな腹で田植する

アンケートチェックをすれば認知症

減ってゆく体力預金日々寂し

土と生きネクタイ様に縁がない

浮き沈み生きた人生米寿です

益田市 篠原紋次郎

雨が降り雪も降ります八十路坂

逆立ちで最後を飾るマヨネーズ

そうですよ君と流した汗の土

欲という敵がおります八十路坂

蝉時雨レイワレイワと聞こえます

安来市 原德利

偏屈な人には解るピカソの絵

すべすべが好きで毎朝髭を剃る

毎日の運動シャドウボクシング

待ち針を打たれた今日はお留守番

固有の領土ひよっこりひよつたん島

瀬戸内市 宮宅比佐恵

聞き上手うなずくだけの思いやり

顔色を伺うだけの愛もある

どの色をたそうか私の絵が未完

戸じまりを二度も三度も老いるとは

きらめいた思い出たどる七回忌

徳島県 小畑 定弘

斜め読みした人生の食い違い
但し書いっぱい持った喜寿である
老人に跳べとのか水たまり
手帖からはみ出す程のスケジュール
散らかした方が居心地いいのです

今治市 永井 松柏

出しゃばりをアグレッシブと褒めてやる
淑女変身詰め放題の得意わざ
胸襟を開く葉が効きすぎる
居酒屋の隅で天下を取っている
人脈と無縁に生きる固い椅子

大洲市 花岡 順子

寂しいと父の背中に書いてある
背中から足から老化忍び寄る
ヒーローには成れぬピエロの役どころ
規格外だけど大事な息子です
柔らかい嘘ついておく今日の幸

高知市 三谷 松太郎

秋が来る巢をはる蜘蛛も気合い入り
ムーミンも先程そこを曲がったよ
以下同文この頃ちよいと手抜き気味
夭逝も天寿も込みの切符です
口笛も忘れていたぞ老いてから

沖縄県 宮 すみれ

手拍子に涙腺ゆるむ鳥歌を
およばれに新曲一つぶらさげて
おにぎりのにぎりかげんにコツがある
公園の萎びるイスについ見入る
身勝手に出した言葉を省みる

宮崎県 黒木 栄子

山程の内緒請け負うシユレッダー
全没に今日はおしまい次がある
酸欠の町に住む子へ母の味
食卓へ匂の命を盛り付ける
長雨に一服出来ぬランドリー

佐賀県 真鳥 久美子

合図かもしれない煽り立てる風
神様と同じところで蹴躓く
正直な日記だ錆色の海だ
不器用な形でやってくるチャンス
煽やかに同心円として女

仙台市 月波 与生

読点も句点も思い出し笑い
寂しくて大きな穴を持ち帰る
眠る前の儀式小骨は抜いておく
リサイクルシヨップにあった母子手帳
ひとり部屋答え合わせをしてしまう

横浜市 加藤 佳子

温泉に引かれ入会シニアジム
ピンコロリ信じて励む週2日
音楽に乗ってエアロで別世界
これ以上丸くはさせぬ背中です

神奈川県 小田 幸子

宇宙には人が造った星も飛ぶ
赤い月異常気象を警告す
赤い月夏の夜風も胸さわぎ
犬と並び神社に参るセミシぐれ

富士見市 中島 通則

電話鳴る今へ急げばテレビから
鏡より写真の顔は老けている
胃カメラが体の中を探ってる
超音波に非破壊検査して貰う

東京都 高岡 弥生

もう一度生まれ変わって母になる
子の笑顔溢れ出してる愛情が
やってきた日曜午後の憂鬱が
朝起きて寝るまで立つは台所

名古屋市 山本 三樹夫

上に立ち男の度量試される
弱虫を克服させた禅の道
断捨離を妻はしないとゴミの山
断捨離も通帳だけはできません

豊橋市 小松 くみ子

アジサイの根元にカタツムリのカラ
断捨離の物を集めて部屋うまる
取りあえず謝罪しておくおじぎ草
バカになり一生過すのもありか

豊橋市 西郷 紀美代

ふるさとは山を仰いでいた暮らし
問診の10段階で知る痛み
渾身の役者魂観れた劇
孫がいるただそれだけで座が和む

石川県 堀本 のりひろ

日記帳未練一杯シミだらけ
難題にスイスイスイと燕さん
サナギから突然羽化の孫二十
ご近所に謝りばかり母の顔

静岡市 渡辺 芳子

バス一台弘法の湯に行く老いの幸
歳忘れ無邪気になれる老いの幸
ボケさえも許してもらう老いの幸
一日一日友達大事な高齢者

奈良市 尾畑 なを江

住んでから解る近所の人となり
鳴きやんだ蝉に替わってカラスの子
律儀にも二回のオヤツ太らせる
お土産のまんじゅう二つで昼となる

生駒市 児玉規雄

免許返上無事故で行けるあの世まで

通帳の残から逆算する余命

試乗車にお目にかかれぬ霊柩車

重たいな友の病状聞く受話器

和歌山市 まつもと もとこ

紫の絵の具を足して老いていく

ハイヒールはいて背中も若返る

マスカラの青がはしゃいだ夏の海

二杯目の酒がほぐしてくれた殻

京都府 北野クニオ

熟年のマンネリ打破の船の旅

古里へ方言聞きに一人旅

幸不幸それは自分の思い様

今日もまた脳の引出し出が遅い

大阪市 中村峰子

川柳はつらい日々への応援歌

だんだんと得手と不得手が見えてきた

シアワセは午後の転た寝夢の旅

妄想を楽しむことにしています

大阪市 前川善之

甲子園夏の暑さを忘れさず

不登校笑顔にさせる親の知恵

優勝旗手にするために汗がある

秋の風月もすすきも酒を呼ぶ

大阪市 松田 聰

歴史家は今の時代をどう見るか

戦争で出てくる子役太り過ぎ

クラス会孫と病気で盛り上がる

飼い主に何故か似てくる犬と猫

大阪市 宮本 千恵子

こぼれ種から朝顔咲いて可愛いなあ

百均の器不思議と丈夫です

結愛と心愛ちゃんもう大丈夫星になり

働きアリに休暇があると餓死します

堺市 楠井輝子

老いて今感性違い悩み多々

俺先に逝くどうぞと妻のにべもなく

飲み過ぎた言うてどんだけまた飲むの

愛読書柳誌ひとつき楽しまん

堺市 古川光雄

旅記念持って帰ってごみの山

白髪を隠す帽子がまた増えた

時々悲劇になりそな物忘れ

毎食後葉飲んだか妻叫ぶ

池田市 上山堅坊

ひたすらに奥へ奥へと歩む趣味

侍日本腹を切らないトップたち

家電の声に応えなくなる独り者

アリガトウとゴメンばかりが増えてゆく

奥河内大師も見たか虹の橋

河内長野市 渡邊 修

うずく腰加齢で済ます掛かり付け
かたくなに秘密の年が干支でばれ
置き場所を変えて一日物さがし

覚えても忘れる方が多くなり

高槻市 三谷 白黒

愚痴つてもましな方だと言われませ
悩むなよ死ねば治るよその病
キヤッシュレス恐くて使う予定なし

豊中市 貝塚 正子

帳尻が日日の終りに合えばよし
むしゃくしゃを百均でする憂さ晴らし
私の方を向いて欲しいと手のふるえ
背のびして半分大人中学生

寝屋川市 川本 信子

オットトト身体の螺旋を締め直す
独りには慣れても気になる隣の灯
組板の音に重ねる母の味
宝石を素通りできる歳になる

寝屋川市 坂本 ミヨノ

五七五出来た安心読んでだめ
薬よりテレビ睡魔でいねぶりを
貯金帳祖母かくしても爺見てる
病んで知る夫婦の愛の美しい

新茶摘む和の味わいを指先に

羽曳野市 磯本 洋一

古代より令和に生きる古墳群
秋刀魚焼く煙の薄い令和秋
年金が預金通帳軽くする

八尾市 田邊 浩三

人の名を忘れるぐらいポケじゃない
笑うのはガンゴルフにもいいそう
食えんの料理番組ばかり見る
思い出す香港韓国全学連

八尾市 山川 寧

接骨院老いの楽しみ膝電気
プラネタリウムチリの空を想い出す
グランドゴルフホールインワンで名を上げる
気ままな天気洗濯物も忙しい

大阪府 高木 道子

世界遺産御陵の緑へズームイン
亡夫の墓建つて夫が遠くなる
健やかに翁と媪の散歩道
令和の夏にふんぎりつけた蟬の殻

大阪府 中内 孚彦

相性はびったりやった離婚劇
大学にひとつの文化コピもあり
なぜ消えた妻の座にぽっかりと穴
人知れずこっそりしてた離婚劇

神戸市 青山 ひろし

吹えまくり割り勘置いて奴は消え
世渡りに小ほけのふりも時に見せ

肩組まれ歌うよりなし応援歌
老いのぐち四親等は聞いてくれ

神戸市 石川 克美

垣間みる川柳世界の果てしなさ
句の波に押し流されて呑み込まれ
句の海でアツアツとしています
人生を語り合いたい川柳で

神戸市 輿水 弘

柔らかい棘に気付いて目を凝らす
気を遣い善い人ぶるの止めました
ボケ具合競って笑い元気です
薄味を奨める妻は辛口派

神戸市 近藤 勝正

8月のあいさつ一語で足りました
真昼どきゴーストタウンか声もない
8月は蟬も畑も疲れきる
爺さんも日傘傾け朝散歩

神戸市 斎藤 隆浩

ややこしいことは語らぬ縄のれん
乾盃のスピーチ長く泡が消え
半額に誘われ七時デバ地下へ
賞味期限過ぎてても元氣うちの爺

尼崎市 寺嶋 恵美子

カジノより地震台風対策だ
秋の夜長佳句を指して指を折る
ためらわず一步踏み出し深呼吸
エンディングノート準備万端まだ書かず

伊丹市 岡村 風琴

ネバーギブアップ必死に捜す明日の夢
紅葉へ家族と溶けるツーリング
本当のことは言えないこぼれ種
笑うだけ笑い明日の風を待つ

伊丹市 平井 富夫

イケメンの医師に婆ちゃん熱を出す
朝採りよ僕の川柳新鮮と
他人事と女子会いつも大笑い
アメリカと戦争したのお爺ちゃん

三田市 生田 えい子

惚けたかな不思議なくらい鍵さがす
脳細胞過去のイメージついのまま
妻は留守馴れない家事に感謝する
うぶ毛までくつきり写るこのテレビ

三田市 幸田 厚子

老姉妹なれぬスマホで安否のみ
うち仏教願い足らずは十字切る
鼻めがね刺し子丸型しごく母
パート出る母のにぎりは崩れ気味

三田市 住吉 美和子

老人の旅に欠かせぬ常備薬
我が顔に誰が落書き染みと皺
虫の音に風鈴小さく合いの手を
集會にブーンと一匹蚊も参加

三田市 中山 寅男

東西のヤンチャ大人に葉なし
忍び泣きゼロ答案を胸に抱き
八十路にはポニーテールが青春よ
国予算ATM並み押せば出る

三田市 東内 美智子

いい人は気が弱すぎて頼られぬ
寡婦となりやはりあなたは強かった
日曜休診家に居ながら躓いて
よかつたな我が子の笑顔忘れぬ

宝塚市 太田 としお

新聞が不安不安と叫んでる
少子化が自己責任を忘れさす
長生きが残酷だとは知らなんだ
昔は良かったそんな気がする昨日今日

宝塚市 岸田 万彩

日韓が工夫こらして嫌がらせ
半分は名前が読めぬ球児たち
被葬者も知らずに祭る宮内庁
その話もつと聞きたい酒抜きで

丹波篠山市 藤井 美智子

運転の前に必ず手を合わす
踏み切れぬ免許返納暮らし向き
免許証持たぬ暮らしの道捜す
野菜採る蚊にも朝食やりながら

三木市 山口 ヨシエ

ふつくらと新米満ちて来る至福
ただ一途歩き続ける迷い道
シナリオを崩す勇気のある日暮れ
波遙か悲喜こもごもの渦の巻く

広島市 松尾 信彦

痛いのかうるさい人が大人しい
ここまでと止めた苦言が子を伸ばす
弁えた父の轍の作業服
入門書矢印だけで知らんぶり

尾道市 小畑 宣之

親に似て普通の子供で何不足
真っ赤な嘘それもこの世の潤滑油
省エネが過ぎて次々熱中症
長生きをするのも辛い喜寿米寿

山口市 青木 隆子

穏やかな日々恋の終わりの予感する
いつの日も予感外れる恋の道
見る度に海に心臓掴まれる
恋人の如くに海を追う車窓

鳥取市 上山一平

公民館荒んだ心置いてくる
ラッパ吹き頭ごなしの応援歌
魔の夏を過した虫の細い声
肌あれの夏の名残りを化粧する

鳥取市 大前安子

幸せを数えるための十指かも
マンネリとスランブ嫌う好奇心
躓いた数だけ欲の枝が増え
怖くない八転びしても起き上がる

倉吉市 伊藤嘉明

店に立つ優子を囲むお客の和
待ちわびる貴奈のハートに詩ひびく
あたたかい理沙の真心が福まねく
若さゆえ司会も歌もみどり節

倉吉市 堀かずこ

今がある見えぬところで支えられ
悩み事きらめく星に打ちあける
くやしさを心にかくし笑み浮かべ
すれ違ふ旧知の人を知らん顔

倉吉市 若松由紀子

道草や回り道して行く老後
ポランティア流した汗は心地よい
お静かに未練心が目を覚ます
古里の星はやさしくよく光る

境港市 中井虎尾

俺と妻わすれものするポケレース
物わすれ腹立った事忘れない
善人の顔した悪が居て困る
タマネギと言われた人が法相に(韓国)

米子市 生田和之

ドライブに子の許可貰う齡となる
来賓の名札を付けたことがない
二千万貯めそこなつてなおも生き
ラップした飯をチンして済ます昼

米子市 黒田紀美江

音読がうまくなったよ今日もマル
あてくじが三角だから引いてみる
勝手です早寝でいびき聞かされる
小指はね時々痛い思ひする

米子市 妹能令位子

予定表川柳の日が光り出す
自叙伝に書く川柳に出会ったと
川柳がかくれた私あぶり出す
ことさらに若さ気取ってカタカナ語

鳥取県 下田茂登子

生きたとは猛暑の中の縫いぐるみ
戦後には使い捨てなど見えなんだ
庭の草老婆の手には重すぎる
行き過ぎて少額の金底をつく

鳥取県 西谷悦子

空の青何日続くだろうかな
窓開けて秋風の味確かめる
二時三時目覚めたらもう眠られぬ
息子との意見の相違黙つとく

鳥取県 橋本 整

ふる里に老いを励ます山がある
ウォーキングほどよい場所に外科医院
晩学もやればやるほど面白い
パンコンにお早うですと声をかけ

松江市 相見柳歩

ダラダラに見えてもこれがベストです
騙される方が悪いと笑うのか
婚活のやがてはこんなはずじゃない
磨かねば仏も神も手を貸さぬ

松江市 山根邦代

いい目覚め三食食べて恙無し
懸命もいい加減でも生きる道
人生の甘い辛いが血や肉に
人の事言わない人で安堵感

出雲市 黒目ひでお

終活がちらつく中を盆供養
達観でき苦悩の日々が懐かしい
これからは出会い求めてチャレンジを
喜寿の坂サプリを飲んで若返る

雲南市 永見安子

ガヤガヤとにぎわっただけ盆終る
令和から猛暑見舞のハガキ来る
雑草も休暇をとってほしいもの
動く度朝から汗に下着替え

笠岡市 小野美那子

ひまなのね水かけ論を扇いでる
頬染まるほどの囁きあれも嘘
人肌になると出たいと言う徳利
隠しても流石に妻の千里眼

津山市 高橋由紀女

くつついた瘡蓋剥がしてから乱
詠むことも書くこともせぬ不眠症
寝ころんで安心探す抱き枕
烏瓜の花を見てから眠られぬ

美作市 岡本余光

老楽に恋という字の蜃気楼
体幹の緩みを知った足の裏
趣味ならば努力割り増し敢えてする
貯金箱好む情報だけ入れる

今治市 渡邊伊津志

人生の積んだ重さの深い皺
散る掬花の鳴咽が風に乗る
裏切りの兆し相槌弱くなる
この域に生きた証しの石の苔

湯気の中美人に見えてポーズとる
出戻りで息凝らしてる枕元
ラテン聴きテンション上げて不安消す
時間かけ釣った魚はあばれ者

沖縄県 あら さくら

沖縄県 禱 モモト

サポテンは熱中症で花咲いた
年重ね苦労買わない人生を
台風に至福タイムは映画館
三歳の心に染みる肩たたき

福岡県 本田 さくら

雨また雨行かねばならぬ迷う足
体調は悪いが口は達者です
わが人生黒塗りしたい過去いくつ
はじめ暗ページをめくりパッと明

唐津市 岩崎 實

転倒へあらゆるところ気を配り
氷水また掻いてるとがめられ
震度5テレビ笑いの中にあり
よく撮れた盆の写真をほめてやり

札幌市 斉藤 宏子

人肌のぬくみを求め雑踏へ
ロケットに声をかけても知らん顔
長生きがつかくなるよな世の流れ
深々と老いのため息闇の中

五所川原市 むらの ひとり
買う方が安いとボヤキ種を蒔く
農作業8割方は草むしり
熊や猿猪鹿鳥も野菜好き
農業の暮らし檻の中にある

弘前市 高森 一呑

左遷地の津軽富士こそ応援歌
身の丈に合った昭和が懐かしい
真つすぐに僕は生きてる津軽富士
鈴虫が秋の音色を深くする

(前月分) 仙台市 月波 与生

濃いめのハイボール夢は醒めていた
蛇口捻るたび嫌いな夏が出る
鯛焼きの八個目からの烏曇
月からも木星からも助け舟

第13回 岡山県川柳大会

とき 11月2日(土)
ところ 津山市総合福祉会館 4階大ホール
津山市山北520
(Tel 0868-23-5130)
開場 10時 投句締切 11時30分
◎当日投句 各題2句 特別席題1句
「たっぷり」 高木 勇三 選
「杖」 小澤誌津子 選
「真ん中」 西村みなみ 選
「今」 野島 全 選
「粗末」 新家 完司 選
特別席題(当日発表) 長谷川紫光 選
参加費 2,000円
主催 岡山県川柳協会

英語 de Senryu ⑨⑤

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

サルトルを伏せて 女に 溶け込みぬ

putting aside

*Jean-Paul Sartre's book
to merge into her*

死んだそうなど簡単に片づける

his death

*was announced
simply*

put aside 脇へ置く *Jean-Paul Sartre* サルトル(実存主義を提唱したフランスの文学者・哲学者)
merge into 溶け込ませる *death* 死 *be announced* 知らされる *simply* 簡単に

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句③⑤

イタリア女流詩人・アーティスト

今回はリディア・キアレリ(Lidia Chiarelli)さんの詩(短詩)を紹介します。彼女は2007年にイタリア、トリノで設立された芸術文化運動 *Immagine & Poesia* の設立メンバーの一人です。イラスト画家、多国語翻訳の受賞詩人として知られています。作品は20言語以上に翻訳され、詩誌やオンラインで発表されています。ニューヨークで出版された彼女のデビュー詩集 *Immagine & Poesia-The Movement in Progress* (2013) と、死を呈して地中海を渡る難民の姿を描く *Anti War and Peace Anthology* (2018) からのハイク数句を日本語に直訳してみました。

Rainy evening / little drops on the window panes / necklace of diamonds.

雨の夜 窓をたたく雨だれ まるでダイヤモンドの首飾り

First primroses: brush strokes / slowly fixed on canvas / by unknown artists.

一刷毛の初桜草 名もなき芸術家によってゆっくりとキャンパスに定着

Black flags envelope / an empty land of terror / echoes of death.

黒い旗の付いた封筒 空ろなテロの大地 死がこだまする

Ceaseless cries of grief / rise high from the seething sea / the night drapes the sky.

逆巻く海から立ち上る絶え間なき悲憤の叫び 夜が空を覆う



ゴキブリ

その姿を見ただけで「ゾツとする！」という人もいるほど嫌われているゴキブリ。名前からして不気味ですが、その語源は「御器囃り（ごきかぶり）」とのこと。すなわち、食べ物だけではなく、盛っている器まで囃るところから来ているようです。そのフリガナを誤って「ゴキブリ」としたのが広まって、明治時代にはすっかり定着したとのこと。

- ゴキブリに動じぬ妻になりました 工藤千代子
- ゴキブリを叩くスリッパ新調す 鎌田 京子
- ゴキブリに挑むわたしの顔いかに 田中 章子
- ゴキブリを追う妻の目は爬虫類 福士 慕情
- ゴキブリを追う潤いのないわたし 倉益 一瑤
- 仏壇へ林檎ゴキブリたちへ罵 堂上 泰女
- ゴキブリから見れば人間殺虫魔 乙倉 武史
- ゴキブリの逆襲にあい飛びあがる 中平 亜美
- 新妻の頃には「キヤ〜」と逃げていた奥さまも、中年を過ぎると度胸も据わって、ゴキブリ専用のスリッパを用意するほど。そして、敵に対する目つきもまるで爬虫類。ゴキブリから見たら悪魔そのものですが、彼等だって必死。追い詰められたら飛んで逃げようするのですが、潤いのない殺虫魔は「逆襲！」と思って、同じように飛び上がります。
- ゴキブリとていつにき勝負する 足立千恵子
- ゴキブリも実は人間大嫌い 三浦 強一
- ゴキブリが痛くないよう踏み潰す 板谷 達雄

- ゴキブリを潰した靴で墓まいり 伊藤 益男
- 怖がりもゴキブリだけは叩けませす 笠嶋 惠美
- ゴキブリを叩き潰して掌を合わす 丹後屋 肇
- 戦い勝ったゴキブリが顔見せぬ 野口 節子
- 晩秋のゴキブリ私の完勝だ 川崎ひかり
- 一寸の虫にも五分の魂です。「徹底的に勝負する」などという覚悟は必ずゴキブリにも伝わります。そして、ゴキブリも「人間なんて大嫌い！」と怒っていることでしょう。
- 良心が痛まぬように「痛くないよう踏み潰す」と言い訳してみたり、その靴でお墓参りをしたり、叩き潰してから合掌したり、人間というものは自分勝手な生き物です。
- ゴキブリもやっぱ若いのは元氣 丹川 修
- ゴキブリよ出るなら亭主居るときに 宇都満知子
- ゴキブリだな妻が私を呼んでいる 中筋 弘充
- ゴキブリの一家晚餐深夜二時 石田 隆彦
- ごきぶりは内気らしい仲間だな 七反田順子
- ゴキブリも蠅も真面目に生きている 榎本日の出
- ゴキブリも蜂も我が家の同居人 福西 茶子
- おつとつこいゴキブリだつて同居人 古久保和子
- 人間たちからは歓迎されず、「何の役にも立っていない」と思われる虫ですが、大切な生態系の一端を担っています。森林に棲息するゴキブリはさまざまな生き物のエサになったり自らは動物の死骸や朽木を食べて土に還っています。
- 宇宙規模から考えますとヒト科もゴキブリも存在価値は同じですが、地球にとってはヒト科の方が迷惑でしょう。そのように思えば同居人として認め合うべきかもしれません。

誹風柳多留一二篇研究 77

その文月の七日の夜いやらしさ 傍三二
あついののに玄宗こひりついて居る 天三智2
清 贊。

657 ほれたやつ飯時分には帰る也

細井 情を通じた奴はなんののかんのと云って
女の所へ来て殆どべつたりだ。モのにしたの
は後家か(?)。

ほれたやつ間かなすきかなおとつれる

一 26

行くわりかんまわり来る出来たやつ 九二

出来たやつとくくへのいてちやんと居る

一〇 13

伊吹 贊。状況はさまざま。

小栗 贊。飯時以外はくつついでいる。

清 贊。色気もさることながら、食い気も忘
れていないと解していました。

658 馬になる役者は男二疋なり

伊吹 一人前の男を男一匹というが、芝居の
舞台で馬の役をする役者は、前足と後足の二
人要るので男二匹である。

男二疋で馬になるおしひ事 安七信4

654 金持のこわいでござくどかれる

細井 警女は盲目の悲しさで、金持ちらしい
しゃべり方で接近して来る男には引つかかっ
てしまうことがある。

おれもよい男とこぜをくどく也 四三三

清 そんなことはあり得ないのだが……。
作った句。

655 なぜ貢目ものといつたとはしたにち

細井 川柳では御殿女中は皆でつぶり肥え
太っている(貢目者)という約束になつてい
たようで、女を見たらひやかしたり、からかっ
たりする口の悪い車引きたちが誇り高き御殿

女中に「デブ」などと声を掛けたので、御
殿女中の端女にしっかりとつちめられてし
まった。

車引女を見るといきみ出し 初二七

なんと、やつたと車とかまへる

おやかたにはかまを着せる車引 三五五

清 天五梅2

656 七月の八日玄宗つづうする

細井 玄宗皇帝と楊貴妃は七月七日の夜、「天
に在らば比翼の鳥となり、地に在らば連理の
枝と為らん」と熱烈に契つたので房事過多と
なり、玄宗皇帝は翌日、さぞかし頭痛に悩ま
されただろう。

山田 賛。男一匹ならぬ男二匹というのが句のヤマ。
清 賛。

659 まちん下タさいと鼻ッたらし来る

伊吹 マチンは、フジウツギ科の常緑喬木。殺鼠剤や興奮剤などを製するが、本句の場合は大に嘔まれたときの治療薬である。マチンがほしいと、薬種屋へ子どもがやって来る。まちんをくださいとすねを巻て来る。

ちんばひきながらまちんを買に来る
一五三

清 賛。子供が犬と遊んでいて嘔まれた？
一二一

660 女客てい主こびつきしかられる

伊吹 訪問してきた女客に亭主がこびりついて、女房から叱られている。女好きの亭主や嫉妬深い女房が、考えられる。

山田 賛。女きやくてい主出はつて叱れる
八九
女客てい主ちそうに他出する
八三

清 賛。

661 六文で布子着て行ふてへやつ

伊吹 板の間稼ぎ。湯屋で湯銭六文を払って、他人の綿入れを盗んで着て帰る、厚かましい奴。
みんなぬしづくとはんてんあまるなり

山田 賛。雨譚註「湯屋どろぼう」。
一六六
清 賛。

662 乳母の子にして尾を出さぬきつい事

伊吹 榊原高尾。姫路の城主榊原政岑が、吉原三浦屋の遊女高尾を身請けした。そのため幕府からお咎めがあったが、高尾が政岑の乳母の子であり、不憫に思い苦界から救い出した、と留守居役の尾崎富右衛門が弁明した逸話から。高尾と尾崎の尾で、尾を出さぬと利かせている。

乳兄弟ならもつともで事がすみ
一五二
清 賛。

663 いまして置力ぬとさくらみき斗

伊吹 花盗人。「桜の枝折るべからず」の立て札がないと、桜の枝が折られて幹だけに

なつてしまふというのである。

折べからずが見へぬかと下戸叱り
二三〇
清 賛。

664 松風の半月ッ吹いて人だかり

伊吹 謡曲「弱法師」の「江月照らし松風吹き」の援用。鍋島藩の松飾。普通は七日までだが、日比谷にあった鍋島家の門松は、正月十四日まで飾られ、松飾の上の藁鼓の飾り物が名物であった。それを見ようと見物人が集まる。

かわをかけるとなりそうな松かさり
一四四

小栗 賛。「松風」「半月」と菓子尽くし、ではあるまいな。

清 賛。持つてまわった句が続きますネ。

665 産所から二タ足三足じやすい也

伊吹 産婦の邪推。亭主の話し声が聞こえるので、浮気相手とではないかと、産婦は産所から二足三足出て耳を澄ませる。

さんぶのじやすい大ふりなせきばらい
一六二

清 賛。

川柳雑誌社・川柳塔社創立95周年記念

第25回 川柳塔まつり

《同人総会・議事》

と き 2019年9月28日(土) 午前10時~11時

と ころ ホテルアウイーナ大阪 4階 金剛の間

2018年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

2019年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 2019年9月28日(土) 午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテルアウイーナ大阪 4階 金剛の間

開会のことば 川柳塔社 理事長 新家完司

挨拶 川柳塔社 主幹 小島蘭幸

祝辞 (一社)全日本川柳協会 事務局長 本田智彦

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「路郎という山」 川柳塔社 榎原道夫氏

兼題 「支える」 川柳塔社 川上大輪選

「ハート」 川柳塔社 木本朱夏選

「いきなり」 川柳塔社 新家完司選

「街・町」 川柳宮城野社 雫石隆子選

「待つ」 番傘川柳本社 田中新一選

事前投句 「酒」 川柳塔社 小島蘭幸選

閉会のことば 川柳塔社 副主幹 川上大輪

《懇親宴》

と ころ ホテルアウイーナ大阪 3階 葛城の間

*藤井寺市文化功労賞表彰 太田扶美代
出版・句集の刊行

*平井美智子 句集

『一匹の美学 一途に鬼を追う』

*徳山みつこ 句集

『ときめきの種にも水を忘れない』

*小河 柳女 句集

『昨日より一ミリ深い井戸を掘る』

*城北川柳会合同句集

『わんど』第十集

*小島 蘭幸 句集

『樹齡千年もう美しくなるばかり』

* (故) 両川 洋々 句集

『目叙伝のつづきは柩の中で書く』

*吉村久仁雄 句集

『命のめぐみ』

*豊中もくせい川柳会合同句集

『もくせいIV』

*藤井 智史 句集

『ポジティブ～I O V e @ M a t o h
M a k i n g』

*そうりゆう会20周年記念号

『そうりゆう会句集 その十』

*井丸 昌紀 句集

『飲みなはれあんだの金で好きなだけ』

物故者(9名)

松村 里江 平成30年8月25日没 93歳

田中 みね 平成30年9月5日没 80歳

竹口 清信 平成30年9月30日没 85歳

鶴田 遠野 平成30年10月21日没 71歳

松山 芳生 平成30年11月3日没 80歳

津守 なぎさ 平成31年1月15日没 89歳

升成 好 平成31年3月18日没 83歳

島田 誠一 平成31年4月10日没 75歳

酒井 真由 令和元年5月28日没 83歳

新任役員(再任・留任は含まず)

常任理事 平井美智子 松岡 篤

参 与 久保田千代 片山かずお

理 事 上田 和宏 梅澤 盛夫

奥澤洋次郎 小野 雅美

山東日出男 平賀 国和

藤井 智史 山下 純子

新同人(平成30年10月・令和元年9月)

大石 洋子(岡山市) 中島 一彌(河内長野市)

中堀 優(奈良県) 藤澤 照代(岡山県)

田賀八千代(鳥取市) 門村 幸子(鳥取県)

池田 美穂(米子市) 伊塚美枝子(米子市)

梅瀬みちを(松江市) 田中紀美恵(倉吉市)

松本ゆかり(三田市) 山端なつみ(加西市)

太田 省三(池田市) 敏森 廣光(神戸市)

岡崎美知江(倉吉市) 野川 宣子(米子市)

九村 義徳(三田市) 副井ゆたか(鳥取市)

大西 重男(三田市) 久保木 剛(丹波篠山市)

近兼 敦子(尼崎市) 長谷川善輔(丹波篠山市)

大杉 敏夫(美作市) きとうこみつ(豊中市)

横山 里子(大阪市) 川島 良子(横浜市)

同人総会出席者(順不同・90名)

藤村亜成 前田楓花 小島蘭幸 斉尾くにこ

前たもつ 水野黒兎 伊達郁夫 山口弘美智

西出楓楽 藤井智史 松岡 篤 松尾美智代

川端一步 山田耕治 村上玄也 山本希久子

山崎武彦 村田 博 新家完司 太田扶美代

内藤憲彦 矢倉五月 牧野芳光 中川ひろ介

山野寿之 中村 恵 木本朱夏 原田すみ子

川上大輪 藤井宏造 藤田武人 宇都満知子

栃尾奏子 石橋芳山 平賀国和 山岡富美子

田中廣子 福田正彦 近兼敦子 森松まつお

福士慕情 柿花和夫 池田純子 吉村久仁雄

長浜美籠 澤井敏治 横山里子 岩佐ダン吉

鴨田昭紀 北野哲男 山根妙子 鈴木いさお

村上直樹 石田隆彦 松原寿子 鴨谷瑠美子

初代正彦 安福和夫 中堀 優 平井美智子

丹下凱夫 小澤幸泉 宇賀四郎 飛永ふりこ

敏森廣光 上田和宏 大内朝子 田中ゆみ子

大浦初音 小野雅美 酒井紀華 古今堂薫子

山口光久 岩切康子 坂 裕之 石田ひろ子

吉岡 修 山田葉子 加川靖鬼 長谷川崇明

佐々木満作 大久保真澄 平松かすみ

山東日出男 内田志津子 居谷真理子

上田ひとみ 富山ルイ子 片山かずお

江島谷勝弘

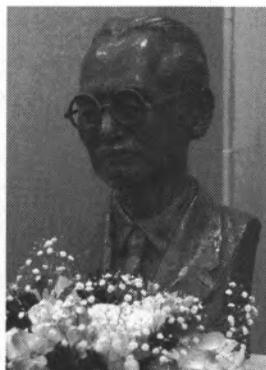
記念表彰・記念句会

川柳雑誌社・川柳塔社創立九五周年記念第二五回川柳塔まつりは九月二八日、ホテル・アウイーナ大阪で開催された。

まずまずの天候にも恵まれ、同人・誌友、他柳社からの川柳愛好家を含めて全国各地から三二三名参加の盛会となった。

参加者にはオニザキのごまセットや封筒が記念品として手渡された。会場正面の金屏風右脇の麻生路郎師の胸像が、あたたかい目差して盛会の喜びをかみしめているように見える。

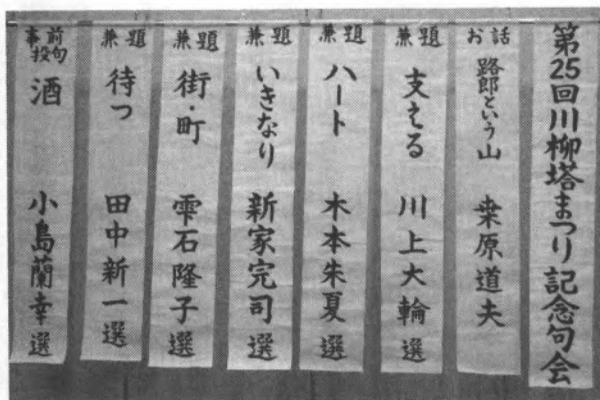
司会進行は鈴木いさお・居谷真理子。開会の辞は新家完司理事長。続いて小島蘭幸主幹の挨拶。その後、全日本川柳協会事務局長本田智彦氏から心温まるご祝辞



をいただいた。(詳細は73頁参照)

祝電披露のあと六賞の表彰式が行われ、各受賞者に主幹から表彰状と記念の楯が贈られた。続いて本年度新同人二六名の内、出席者の十四名が紹介され、代表して松江市の梅瀬





みちおさんが「仲間のお陰」という気持ち
を大切にしながら川柳ライフに励みたい」
と力強く抱負を述べた。
おはなしは栗原道夫理事の「路郎とい
う山」。麻生路郎師の生きざまをたつぷり
一時間、丁寧に紹介された。(詳細は74頁
参照)
おはなしの後、蘭幸主幹を囲んで表彰



受賞者(敬称略)後列右から、藤井寿代・丹下凱夫・武本碧・伊達郁夫。前列右から、両川無限・平井美智子・柳田かおる・主幹・郷田みや・藤澤照代・川島良子

者および新同人の記念撮影が行われた。
暫時の休憩のあと、いよいよ川柳大会
に入る。まずは、最初の川上大輪選「支
える」の初声は枚方市から参加の山口弘
委智さんの呼名。各題天位には記念品が
贈呈され、川上大輪副主幹の閉会の挨拶



新同人の方々(蘭幸主幹を囲んで)

をもって滞りなく記念大会が終了した。
(初代正彦)
月間賞は太田扶美代さん(藤井寺市)
司会(いさお・真理子) 脇取(智史・奏子)
懸垂幕墨書(耕治) 清記(かずお・勝弘・
憲彦・正彦) 撮影(松岡恭子)

祝 辞

一般社団法人全日本川柳協会 事務局長 **本 田 智 彦**



日川協の本田です。

朝晩すっかり秋の気配になりましたね。本日、川柳塔社創立九五周年、並びに第二五回川柳塔まつり、この記念すべき日に祝辞を申し上げることは私として光栄と致すところです。三二三名のご出席おめでとうございます。

川柳界も敗戦という転換期に六大家と言われる人を輩出、そのひとりとして塔から麻生路郎氏が出現、番傘の岸本水府と、ふあうすとの椋元紋太郎氏とともにその組織

を動かし指導してきたことは皆さんもご承知の通りです。

川柳塔は路郎のあと、西尾栗氏、橋高薫風氏から河内天笑氏そして現在の小島蘭幸氏へとバトンタッチされ、小島氏はさらに全日本川柳協会の理事長として全国を駆け回り多忙な日を過しておられます。

川柳塔社は何となく親しみやすい集団で、毎月の句会には他柳社からも参加され賑わっています。

申すまでもなく今や川柳界は高齢化が進み、そして川柳そのものも現代社会の多様化に連れられてそのような形で進んでいるような気もします。定型ひとつにしても破調の波に浸食されていてそれをどこまで許容するかは今後の問題です。そして若い人達に川柳のよさを伝え指導して行くのも重要です。日川柳としても役員の交代とともに、このことをしっかりと踏まえて川柳の



普及につとめたいと思っています。よろしくご協力のほどお願い申し上げます。
本日の大会スタッフの皆様ご苦労さまです。簡単ではありますが祝辞にかえさせていただきます。ありがとうございます。

おはなし

路郎という山

桑原道夫

麻生路郎が川柳の社会化を目指して「川柳雑誌」を発刊したのは、大正13年2月でした。路郎は川柳の社会化を目指して、それまでの川柳界では考えられなかったことを次々に実行します。

当時の川柳誌は一般の雑誌とは違う小型のものも多く、不定期刊のものもあったのですが、「川柳雑誌」は、社会に認めてもらうために、当時の一般雑誌の菊判の大きさと月刊で刊行しました。「川柳雑誌」というネーミングも、川柳を知らない人が見てもすぐに川柳の雑誌であることがわかることを考えてのものでした。経営を考えると無料では配布しませんでした。売れる雑誌を目指して内容も充実させました。初心



桑原道夫氏

者指導、古句研究の発表、作家論、合評、評論など多彩な記事を掲載しました。写真を多用し、川柳漫画を掲載するなど、「川柳雑誌」は、川柳を作る人に向けてだけでなく、川柳を作らない一般の人が読んでも楽しめる雑誌作り

を心がけました。そして、昭和11年3月号から有保証新聞紙法による刊行に踏み切り、時事報道の自由を得ます。これは、「川柳雑誌」が趣味の仲間内の雑誌ではなくて、公に認められた雑誌になったということです。

そのような「川柳雑誌」は、優秀な作家を多く生み出しました。「川柳雑誌」時代に活躍した人の一部を紹介します。句集「私達」（昭32）からの引用です。

花道は相合傘の幅に出来

高橋かほる

金魚屋に舞妓たもとを教へられ

長崎 柳秀

腹巻きが弛んだような年になり

岩崎 柳路

茶碗の丸さたのしみに満つ

福田山雨楼

うじむしが仲間を蹴つてせりあがり

米本貴志子

降りる客いとんのんと続くなり

須崎 豆秋

路郎がその才能に期待して、将来は編集を任せたいと思っていたのですが、若くして亡くなった伊東愚陀という人がいます。明治42年生まれで、関西学院英文科在学中の昭和7年12月27日に23歳で亡くなりました。親友であった住田乱耽は1年後の昭和8年9月27日に、二人の句集「潮騒」を刊行します。愚陀の作品です。

河童同志愛の言葉は泡になり

コケテツシユな女硝子に息をかけ

肩ふれあふて初鮎のごと

BUILDINGが面喰つちやつた彼女のキス

共同便所に性慾的な陽が這ひ込んだ

猫が怒へ来て女の顔してた

「川柳雑誌」は昭和7年に創刊100号を迎えます。その記念として空前絶後の催しを5月4日、朝日会館で行いました。

朝日会館は昭和元年に完成した大阪市を代表する文化施設です。路郎は朝日会館ができた当初から、ここで川柳の催しをしたと考えて周囲にも言っていたのですが、誰も本気にしませんでした。当然です。朝日会館は今のフェスティバルホールと同じような施設です。路郎はそのような一流の文化施設で川柳の催しをすることによって、川柳を社会に認めてもらうことができる考えたのです。朝日会館は2階席まであり1600名収容でしたが、1000名余りの観衆を集めたのです。観衆を集めるためにパンフレット数千枚、ポスター千枚を用意し、宣伝しました。午後7時15分の開演。開会の辞は、宝塚少女歌劇団の前身「宝塚唱歌隊」の初代振付師として知られ、当時は朝日会館が出していた「アサヒコードモノカイコードモノ本」の編集をしていた、路郎とは20年来の親交があった高尾亮雄。挨拶は、川柳雑誌社道頓堀支部の幹事で、当時「無産新聞」を発行し、大阪市会議員であった庄萬よし。続いて川上三太郎「女性は躍る」、岸本水府「川柳にあらはれた家庭」、麻生路郎「人間苦の芸術」の講演3本。続いて、東京から招いた4代目杵屋彌七による長唄「新曲浦島」。10分の休憩後、山根舞踊研究所の「こども舞踊」。中心の踊り手は当時11歳で、昭和15年には衣笠貞之助監督「蛇姫様」で長谷川一夫と共演し人気スターとなった山根寿子。最後に、川柳座の演劇「恋の罨あの眼だらうか眼だらうか」。作・演出は、初代水谷八重子公演にも特別参加したことのある俳優・古川利隆。終演

は午後10時10分。現在でいうと約3000円の入場料を取り、約1万円余りの黒字でした。

「川柳の夕」を催した4年後、路郎は「川柳雑誌」昭和11年8月号に「川柳職業人宣言」を発表します。川柳を職業としたのは路郎だけではありません。なぜ、路郎は殊更宣言をしたのでしょうか。路郎は次のような趣旨のことを言っています。自分がプロであることの宣伝ビラを撒いたのだ、と。それによって少しでも仕事が増えるようにと、川柳界だけでなく社会にもアピールしたのです。

戦後に話を移します。昭和31年6月に、路郎は理事長となつて、詩人の小野十三郎、歌人の平田春一、俳人の田村木国を常任理事に迎えて関西短詩文学連盟を結成します。昭和33年から、一般の人に短詩文学に親しんでもらおうと、毎年、大阪美術倶楽部で短詩文学作品展を開催します。そして、昭和37年11月には、前年開館した大阪市立中央図書館に短詩文学文庫を設置したのです。

路郎は、明治37年16歳で川柳を始め、60年の長きに亘つて第一線の川柳作家でした。多くの名句を残していますが、その中から私にとつての路郎作品ベスト5を最後に挙げておきます。(句の下に「川柳雑誌」での発表年月を記す)

君見たまへ波稜草が伸びてゐる

大13・2

二階を降りてどこへ行く身ぞ

大15・4

文学を軽んじ馬で裾野行く

昭6・8

老人におもぢやなしバラの前に立つ

昭37・7

雲の峯という手もありさらばさらばです

昭40・7

懇親宴



創立95周年記念 第25回 川柳塔まつり

参加者の感想

全員リーダー

内田 志津子（同人・大阪）

今年は八時三〇分の集合から参加させていただきました。役員のお一人お一人が着々と会場を創り上げてゆく様子を目の当たりにし、塔まつりは全員リーダーの自覚だと実感してその団結力に塔の歴史の深さを知りました。また六賞受賞の皆様おめでとうございます。

賞に縁のない私ですが励みにも目標にもせねばと実感致しました。そんな中少し気になったのが同人総会で、来場者にもっと参加を促せなかったかと反省しつつ会場を後に致しました。

心地よい披露

大浦 福子（大阪）

一度は参加してみたいと思っていた塔まつり今回初めて参加致しました。始めは広い会場と全国から参加された多数の柳人の方々に緊張しましたが、会が始ま

り今まで名前しか存じあげぬ先生方、先輩方、また多くの柳人方と同じ時を過ごせる事に感動！

披露の選者の方々の声は心地良く、句は言うまでも無く、魅力的かつ個性溢れる披露に聞き惚れていました。また全ポツ覚悟の私の句も二句入り、嬉しい思いで会場を後にしました。

ほろ苦い感想

奥澤 洋次郎（同人・兵庫）

「路郎という山」のおはなしを興味深く聞き、入選句の披露。一題、二題と入選ならず、新家庭理事長の披露が済んで、今日は全没かも知れないの予感。終わってみればその通りの全没。常の事とはいえ、句は月並に過ぎるのかと、ほろ苦い。遠くから来られ全没の方もおられるのかなあ。来年に取り返すつもり。

ともあれ年一度のまつり。万全の準備で楽しませて頂いた方々に大感謝です。

まつりの活気

鈴木かこ（大阪）

自宅から近く、関西の色濃い川柳人が集う川柳本社句会の面白さにこの一年ほどお邪魔させて頂いています。

川柳塔まつりの当日は三百人を超える参加者とその華やかな顔ぶれに圧倒。「大会」ではなく「まつり」と呼ぶのにふさわしい活気に満ち溢れていました。

上質な講話や、激戦から選び抜かれた素晴らしい句に触れて多くの学びを頂きました。心より感謝です。

見学しました

（美研アート）

杉山阿希子（大阪）

これまで句会というものに参加したことのない私が、この度、見学という形ではありましたが、95周年川柳塔まつりに参加できたことを光栄に思います。まず、華やかな会場に95周年の偉大さを感じました。そして、お声がけ下さった方々から句会の温かさを感じました。更に、披露では誌面で読むのとは違う独特の雰囲気

気と緊張感、面白さを体感することができました。非常に有意義な時間でした。

新同人としての参加

梅瀬みちを（同人）

私は今回の「川柳塔まつり」でたくさんの方々の前で新同人としての紹介を受けました。皆様のあたたかい雰囲気と歓迎の気持ちを感じ、これで「川柳は止められないぞ」と思いを新たにしたいです。

愛読書の新家完司理事長の『川柳の理論と実践』中でも川柳を続けていく上で、一緒に切磋琢磨していく仲間が存在が一番大切だと書いておられます。

私もこれから川柳塔同人として先輩諸兄のご指導ご鞭撻を受けながら、生涯の川柳ライフを楽しんで行こうと思っております。よろしく願います。

若干の毒味を

中道佳昭（大阪）

塔まつりが大盛況に終わったことに祝意

を表します。さて近年は川柳が盛んですが、新聞や雑誌には時事と称して片寄った意見の表明やボヤキ、自虐等、誠に聞き苦しい句も見受けられ、やや距離を置いていました。しかし今回披露された句は若干のペーソスと快いユーモアに溢れた良句が多いと感じました。なお爺臭さを薄め若さと若干の毒味をブレンドすれば、より面白くなると思いました。

一体感

森田旅人（同人・大阪）

歌が嫌いである。音楽番組がついているとプチッとサイレントにする。なのに川柳塔まつりの懇親会で番傘の森中恵美子氏とその肩を抱いて歌われる新家完司理事長の貝殻節、その周りを笑顔、笑顔の輪。その輪の端っこで私も歌い踊っていた。この一体感なんだろう。木津川計氏の「大阪の川柳を番傘と川柳塔で展示させている」との言葉、まさにその歓喜の渦の中で至福のひとつ。ありがたい。

川柳大会入選句

支える

川上大輪選



支えてる意地とプライド空回り
 いつからか親子逆転した支柱
 年金がわたしの明日を支えてる
 損をする民が支える宝くじ
 いてくれるだけで支えになっ
 遣り繰りで支える妻の太っ腹
 信じてた梯子夫に外される
 コンビニの支えがあつて一人者
 無い袖は振れぬが話なら聞ける
 預金なし妻が支えるサスペンス
 支えてる人は寡黙に生きている
 喪主の席遺影に支えられながら
 全力で君を丸ごと受けとめる
 五十年支えたつもりでしたけど
 ライバルの支えで背筋伸びている

山口弘委智
 石田 隆彦
 中村 恵
 中川ひろ介
 吉岡 修
 大杉 敏夫
 奥田 宗光
 穂山 常男
 山田 恭正
 伊達 郁夫
 斉尾くにこ
 居谷真理子
 上田ひとみ
 内田志津子
 石田ひろ子

私を支えるペンと紙と酒
 つぎはぎの夫婦支える木綿糸
 生きてゆく色とりどりの糖衣錠
 つっかえ棒になつてやろうとプロポーズ
 薬飲み酒飲み支え合っている
 私はちゃんと納税しています
 支えてるつもりが足を踏んでいた
 支えにもなるが邪魔にもなる夫
 シーソーの支点にいつも母がいた
 生きていて呉れたらそれで百点だ
 ボクを支えるポロポロの自尊心
 サバ缶が支えてくれる骨密度
 千鳥足支える方も千鳥足
 裏方が舞台の陰で見えています
 誰よりも支えてくれるのは論吉
 大阪を支えるおばちゃんの遣る気
 プラス思考DNAという味方
 頬杖をはずすと見える明日の色
 弱虫の明日を支える今日の酒
 杖一本二本と歳をとつていく
 逝つて知る大黒柱妻だった
 川柳塔の誌友になつて下さいな
 支えあいののしり合つて五十年
 九条を支えに伸びて来た日本
 大黒柱に今はつっかえ棒がいる

新家 完司
 藤井 寿代
 藤井 宏造
 松原 寿子
 竹村紀の治
 栃尾 奏子
 齋藤さくら
 工藤千代子
 両川 無限
 矢倉 五月
 田中ゆみ子
 垣見はるみ
 片岡 加代
 山田 耕治
 山口 光久
 米澤 椒子
 五味 尚子
 竹山千賀子
 真鍋心平太
 牧野 芳光
 西出 楓楽
 江島谷勝弘
 小澤 幸泉
 橋田 綾子
 大久保眞澄

伝統の祭り支える時間給

20本八十路支える歯はいのち

シーソーの支点ずらした赤蜻蛉

日に三度薬を飲んで生かされる

君がいるただそれだけで生きられる

虫喰いの柱でもまだ立ってます

白寿でも主婦です母は台所

病室に子供の葉書子供の絵

ちよぼちよぼが寄って互いに支え合う

支えたと誓った亭主医者通い

貴方には私が付いていなければ

佳

シャンとしろと七味が僕を支える

夜な夜なに酒税支えた自負がある

ピラミッドのかたちになってから無敵

あの時は支えるつもりだったのよ

あほかいな言って言われて支え合う

人

道連れが居て強がりはまだ言える

地

あと少し貸してください君の肩

天

補助輪を外し世界が広がる

軸

日本を支え続ける紙おむつ

澤山よう子

澤井 敏治

郷田 みや

田中 新一

富永 恭子

長高 俊雄

坂上 淳司

米田利恵子

小林すみえ

藤塚 克三

中井 萌

鴨谷瑠美子

村田 博

小島 蘭幸

丸山 孔一

上田 和宏

太田扶美代

島田 明美

森田 旅人

ハート

木本朱夏選



アオハルと読む時ハートピンク色

子ども食堂小さなハートでんこもり

地球の心臓止めるは神か人間か

心からの黙祷あまりしていかない

十六歳の少女グレタの心意気

返信はハートマークが一ケだけ

ツーカーの仲か音叉となるハート

ウフフのフ位のハートです今日は

本体は年だがハート活火山

貧乏はへっちゃらハートぼっかほっか

青空にハート少しゆがんでいのです

人生はいろいろハート断面図

点滅のハート御注意なさいませ

花びらがハートに変わる万華鏡

さげすまれ俺のハートに火が点いた

ハートブレイク遠い昭和の安ホテル

ありがとうを蒔いたらハート咲きました

川口 恵子

久保田清美

垣見はるみ

藤井 宏造

坂上 淳司

弘津秋の子

穂谷 和郎

矢倉 五月

中川 一男

田中 天翔

阪本 高士

赤松ますみ

小谷 小雪

くんじろう

都 武志

村岡 義博

鈴木 かこ

愛掴むハートフラッシュユストレート
 ハートきりきり母の泪はやはり武器
 わたくしのハートはいつも放し飼
 タンポポは踏まない無印のハート
 でつかいでつかいハートだ古里だ
 酒飲むと三倍でかくなるハート
 石榴ばつくりもう隠せないハート
 百寄れば百の心の闇がある
 雨の日のハート赤毛のアンを読む
 愛してるいいから私踏んで行け
 出掛けてみるか心の荷物軽くして
 夏に弾け秋にしんみりするハート
 SOS秋ですキューピッドは多忙
 日にち薬三日で効いた恋でした
 丸いとき四角いときもある心
 切り口がハートでネギも恋してる
 出自どうあれハート型蒙古斑
 青春の名残り縫い目のあるハート
 納期近づくハートの歪み直さねば
 そうやねえハートも一度虫干しに
 純烈が熟女のハート驚掴み
 ドキドキしようまはムタ毛を剃っている
 ハートのキング髭を剃った私です
 ケチャップのハート真っ直ぐ帰宅する

藤井 智史
 伊藤のぶよし
 川上 大輪
 郷田 みや
 徳山 泰子
 両川 無限
 芳賀 博子
 須田たかき
 吉道あかね
 大浦 福子
 今井万紗子
 立蔵 信子
 真島美智子
 山本 進
 土田 欣之
 島田 明美
 三宅 保州
 貝塚 正子
 橋本あつ子
 小林すみえ
 西出 楓楽
 川田由紀子
 山端なつみ
 藤田 武人

オムレッツはハート君を頼りにしています
 取り外してハートの破れ縫っている
 落花また地球に愛をハートフル
 古ぼけてはいるがハートはまだ熱い
 右手左手ハートマークにするふたり
 萎んで膨らんで黄昏れるハート
 性善説宿すハートが風起こす
 ハートにはバラのイレズミしているよ
 ハートブレイク風も地を這う秋が舞う
 ぬるま湯で戻そう乾涸びたハート
 佳
 君の心は豊かなるかと海の青
 ペンと紙のまつりへ焰立つハート
 さよならのハート革ジャン引つ掛けて
 失恋のハートに焼酎が沁みる
 多色刷り自由を謳歌するハート
 人
 ハートのかたちは崩れやすくて愛すべし
 地
 ハートブレイクガムテープでも貼っとくサ
 天
 僕のハートの余白で鈴虫が鳴いた
 軸
 赤い月の夜をハートは眠れない

西澤 知子
 吉村久仁雄
 水野 黒兎
 太田扶美代
 小島 蘭幸
 宇都満知子
 田中 新一
 加島 由一
 村上 直樹
 大内せつ子
 平井美智子
 たむらあきこ
 矢沢 和女
 新家 完司
 山岡富美子
 森中恵美子
 居谷真理子
 鴨谷瑠美子

いきなり

新家完司選



椿はポトリわたくしはポックリで
 今日送り今日食えという鑑鈍なる
 いきなりの税務署だけは堪忍や
 石鹸の泡も付けずに剃らないで
 祝福の拍手いきなりは尚いい
 神さまにいきなり呼ばれ逝かはず
 ポックリはいいが事故死は遠慮する
 乾杯のあと二次会に誘われる
 拳骨も辞令も予告なしに来る
 いきなりのマイク浪花のノリ出来ず
 ツイトがいきなり首と言ってくる
 赤信号いきなり鹿が渡る奈良
 なりゆきで妻は年中妊婦服
 ドア開ける便座の蓋が上がつてる
 昨日まで確か動いた洗濯機
 まけといていきなり値切る大阪弁
 さあ定年いきなり遊べ言われても

鈴木 かこ
 杉野 羅天
 小西 明
 福井 民雄
 斉尾くにこ
 寺川 弘一
 糀谷 和郎
 森中恵美子
 小島 蘭幸
 原田すみ子
 加藤 佳子
 藤岡 りこ
 川本 信子
 堀 正和
 上田 紀子
 古今堂蕉子
 太田扶美代

リストラを言い渡された誕生日
 いきなりのキスで赤ちゃんが出来た
 運動会借物となり走る羽目
 初球から狙ってくるときいている
 初対面のおばちゃんの長い長い愚痴
 出会い頭に見たくなかった大欠伸
 タカラヅカのスターになると言う息子
 演説を野次ると周り囲まれる
 休肝日いきなりカレー食べている
 真夜中のこむら返りという刺客
 出会うなり飲みに行こうとせわしない
 スナックの扉開けたら八代亜紀
 いきなりの客には冷で吞ましく
 挨拶もなしに焼酎飲めと言う
 昼寝中あがりまっせと姑が
 座るなり百引く七と言われても
 ずるいわね振り向きざまのキスなんて
 初対面挨拶もなくトシを聞く
 不意に来た兄に一万円を貸す
 好きでほしいいきなりそして過去形で
 腹立てた妻はいきなりパーマ屋へ
 爺ちゃんはいつ死ぬのかと孫が開く
 白バイの卑怯いきなりのサイレン
 連休中ちよつといじつて目が二重

神田 良子
 川端 一步
 出端なつみ
 芳賀 博子
 徳山 泰子
 中川 一男
 次井 義泰
 坂上 淳司
 松浦 英夫
 木本 朱夏
 樋口 眞
 藤井 宏造
 宮崎シマ子
 丹下 凱夫
 横山 里子
 柳田かおる
 大内せつ子
 大久保眞澄
 平井美智子
 宇都満知子
 柿花 和夫
 福田 好文
 萩原 狸月
 小野 雅美

ついと立ちブイとふかれてパパ家出
うしろからいきなりやってきた傘寿
雨上がり次男いきなり背が伸びる
グレイヘア突然モテ期降って来る
帽子から鳩が飛びだすプロポーズ
ただいまと息子の横に妊婦さん
唐突にさずかり婚と言われても
海鮮井いきなり海老がしゃべりだす
ピンコロリ駄目よ三日は看取らせて
風過ぎて金木犀の香の海に

佳

風鈴が身ぶるいをした秋の風
いきなりもあるう遺影を決めておく
行く宛のない信号が青になる
雷と恋には予告編がない
昨日まで人間今日は仏様

人

咄嗟にはかばいきれない目の動き

地

チャンネルを変えると乱れ飛ぶ呪文

天

ずかずかと来て唇を奪う秋

軸

猛暑日のページを捲ると彼岸花

久世 高鷲

山本希久子

くんじろう

川田由紀子

中山 春代

西本 草紗

荻野 浩子

西澤 知子

大浦 福子

小川 佳恵

池田 純子

山田 耕治

笹倉 良一

山岡富美子

居谷真理子

松本あや子

須田たかゆき

嶋澤喜八郎

街・町

雫石隆子選



路地裏も表通りも雨は降る
コンビニが町でおふくろごっこする
町内会孤独死なんて寄せつけぬ
取り説のいらぬ街であつたかい
中国人の声が大きい繁華街
おばちゃんの町人情のてんこもり
この街を出た日のページ破れない
わが町よ中学校のアルバムよ
震災の街にラグビー餅する
わが町にラスベガスなど要りません
大阪の街トラ柄がよく笑う
田を捨てて都会へひとり又ひとり
キャッシュレス老いに不便な街になる
大阪といえはふわトロたこ焼きを
下町のロケット夢は無限定
分け隔てなく星が降る過疎の町
灯台のように赤提灯の点る街

永見 心咲

橋田 綾子

藤島たかこ

武本 碧

内藤 憲彦

土田 欣之

安土 理恵

山田 耕治

前田 紀雄

正信寺尚邦

吉道あかね

永田 紀恵

西 美和子

浅野 夏季

佐々木満作

竹村紀の治

藤村 亜成

古里と同じ匂いの町が好き
 夕日が街を光が町をファンタジー
 住み慣れたわたしの町はまだ昭和
 終の町やさしい人に囲まれる
 良い町だいまだ訛りのとれぬ町
 海鳴りの町に本籍だけがある
 街中に溢れ始めてきた狂気
 町の片隅にポツンと井戸がある
 熊だつて街に出るのは命懸け
 海鳴りはもう聞こえない北の町
 じんじんと生まれた町の笛太鼓
 灯の消えた街に反いて祈ります
 住めば都スローライフの似合う町
 よつばらいばかりが目立つ夜の街
 町中を丸洗いして虹が出る
 街のカフェにひとりの影を置きにゆく
 原発一基町の名をいくつ消す
 煙突のある町でした通学路
 どの街へ行っても出合う中国語
 40年住んでる町は年金者
 君がいるだけで私の町になる
 シャッター街整骨院が手を上げる
 人住まぬ汚染の町に花が咲く
 コンビニも京都の街の色になる

柿花 和夫
 山口弘委智
 初代 正彦
 (故)前 たもつ
 牧野 芳光
 伊藤のぶよし
 石橋 芳山
 江島谷勝弘
 松岡 篤
 須田たかゆき
 仁多見千絵
 平松かずみ
 北川ヤギエ
 天根 夢草
 三宅 保州
 たむらあきこ
 川上 大輪
 山根 妙子
 山岡富美子
 阪井美世子
 平尾 正人
 楠井 輝子
 西田喜代志
 羽奈 和子

商売の合間 町会議員です
 窓あけて笑顔をくれる街が好き
 夕焼けの向こうに母の町がある
 潮騒に悲しみこもる町に住む
 消印にふれる あの街も九月
 ビル街の四角い空も秋になる
 小説の町面影を追うている
 寂れた町にインスタ映えの猫二匹
 千年の風と行き合う塔の町
 ゴミ一つ拾うも僕の町おこし
 住
 高齢者ばかりになった「ニュータウン」
 ガウデイの魂宿る町の鬱
 終点はこの町でした放浪記
 逃亡者が逃げ込むような街に住む
 いつか出るつもり町の町で老いほれる
 人
 この町の姥捨山は5階建て
 地
 わが町の夕陽お家で死にたいな
 天
 海鳴りの届く町です本籍地
 軸
 のつべらばう往く渋谷スクランブル

西澤 知子
 平松 直樹
 中山 春代
 菅野佳都子
 芳賀 博子
 植野美津江
 阪本 高士
 藤塚 克三
 笹 百合子
 次井 義泰
 金子美千代
 森田 旅人
 真鍋心平太
 藤井 宏造
 新家 完司
 垣見はるみ
 川田由紀子
 森中恵美子

待 つ

田中新一選



人類の滅びるを待つ青い星
 待ったなしと環境少女グレタさん
 温暖化もう待てないと少女の眼
 スーパーボランティア助け待ってる美咲ちゃん
 進次郎の腕まくり待つ汚染水
 ほとぼりが冷めるまで入院します
 通電を待つ被災地に彼岸花
 百分の二縮めるまでの長い時
 必ずを信じ臓器を待つベッド
 新薬を待つ笑顔で耐えている
 街角のたこ焼きを待つ風呂帰り
 三分が待つてられない食べ盛り
 釣れるまで見物人も暇らしい
 閉店前うろうろと待つ五割引
 いろいろな人を眺めてバスを待つ
 愛犬も待ちくたびれる午前様
 ただいまの声に尻尾をふってくる

嶋澤喜八郎
 内藤 憲彦
 廣田 和織
 大浦 初音
 米田利恵子
 小林すみえ
 山根 妙子
 山口弘委智
 嶋田 昭紀
 坂本 星雨
 田中 天翔
 奥田 宗光
 嶋 慎一
 宇賀 史郎
 新家 完司
 飛永ふりこ
 菱木 誠

待つ余裕無くし敗れた天下取り
 返済を待つて身にもなつてくれ
 奇数月より偶数月を待つてます
 ごめんなさいをじつと待つてるおかあさん
 待つているかしらと亡父を拝む母
 母の日にわくわく待てど暮れていく
 真実は一つひたすら時を待つ
 待つ人の笑顔思つて買うケーキ
 梨送り蟹の来るのを待つている
 謎かけて相手の出方待つ余裕
 いい返事待つと圧力かけられる
 いつまでもお待ちしますという威嚇
 増えました彼岸で僕を待つ友が
 待つ人がいて黄泉の国へも夢が湧く
 帰り待つキッチン胃袋を掴む
 待ち人が来てコーヒーが香り立つ
 待つことを知らぬ時計のマイペース
 待つ人がいるだけでいい過疎の里
 虫歯反乱こんなに長い夜明け待つ
 大人びて小悪魔ぶつて待つ鼓動
 花活けて帰らぬ人を待つている
 亡き妻は待ちくたびれているだろう
 帰つても待つているのはひとり飯
 帰るはずない人を待つ独りめし

石田 隆彦
 藤塚 克三
 前田 紀雄
 能勢 利子
 福士 慕情
 藤岡 りこ
 大島美智代
 羽奈 和子
 両川 無限
 本田 智彦
 大堀 正明
 山岡富美子
 柿花 和夫
 橋田 綾子
 中井 佳子
 加島 由一
 藤田 武人
 伊藤のぶよし
 柴本ばつは
 松原 寿子
 酒井 紀華
 山田 耕治
 都 武志
 岩田 明子

愚かさを全てさらして待つている
愛は無音 青信号を待つている

妻のオベ 済むのを石の如く待つ

オロオロと祈るしかなし長いオベ

秒針の重さに耐えて待つている

かくれんぼ見つかることを待つている

あしたこそあさってこそと卵抱く

燃え尽きてなお残像が待つている

路郎水府に見せる一句がまだ出来ぬ

待つことのしあわせ知った箸二膳

住

くりかえし隙を作って彼を待つ

自然解凍待つてみようかわたしたち

死を待つているあたたかい輪の中で

人間の尖りが消えるまで研く

長い目でいつも見えていた母でした

人

笑えるまであなた待つててくれますか

地

丁寧に生きよう亡妻に逢えるまで

天

待つことを覚え呼吸が楽になる

軸

待つてても迎えにきてはくれぬ亡妻

阪本 高士

矢沢 和女

樋口 眞

金子美千代

石橋 芳山

寺川 弘一

穂山 常勇

鴨谷瑠美子

西出 楓楽

山崎 武彦

寺本 実

安土 理恵

森中恵美子

笹倉 良一

津田 照子

小野 雅美

栃尾 奏子

原田すみ子

酒

小島 蘭 幸 選



利酒で貰った賞が自慢です

飲めたなら可愛い嘘もついたのでに

遠い日の亡母の温もり玉子酒

下戸の子と果せぬ夢よ孫と飲む

いい酒だ無口な夫を歌手にする

四季を飲む梅だ桜だ紅葉だと

酒呑むと何でも上げてしまふ癖

男の美学と豪快に呑んでいる

ゆっくりと私を解くロゼワイン

酌をしてまわる本命まで遠い

この僕を捏ねて丸めてくれた酒

ソルティドッグおとこ寡黙に酔うている

しつとりと泣かせてくれる酒がいい

晩酌一合いつもきれいな亡父の酒

もう秋だなあとしみじみ猪口ふたつ

酒染み渡り生きてる生きている

雨三日飲むほかはない飯場小屋

平松かすみ

穂口 正子

三塚まゆみ

中井 萌

伊藤 玲峰

伊藤のおよし

西出 楓楽

阪本 高士

松尾美智代

永見 心咲

柴本ばつは

美馬りゆうこ

安土 理恵

大浦 初音

片岡 加代

坂本 星雨

正信寺尚邦

肝臓に酒が好きだと言わせたい
 地獄見た者だけ飲める美酒の味
 人肌の酒があの日を連れてくる
 又飲もう不治の病の友見舞う
 阿呆やなあ酒に溺れていかはった
 酒とろり亡夫と昔話など
 淋しくて愉しくて酒は僕から離れない
 過去はもう還らぬ泡盛をこくり
 津軽弁ひらがなになって酔っている
 一本提げて呑みすぎ叱る友がくる
 悲しみの拳を開くコップ酒
 ハッピーアワー夕陽とグラス合わせてる
 路郎に捧ぐ記念日の酒旨し
 母屋では焼酎 離れは頼祭
 俺お前飲めば二十歳の雲の峰
 計の道をふらりふらりと酔いながら
 太陽の下では飲まぬ月と飲む
 電気ブラン太宰が其処に居るような
 涙まで故郷の地酒の味になる
 激論の快感酒は潤滑油
 ときどきはお酒を飲んで灰汁を抜く
 まあいいか酒の肴になる軽さ
 世渡りが下手な男のにごり酒
 禁酒して快癒祈ってくれた父

西澤 司郎
 笹倉 良一
 松本 柁子
 宇賀 史郎
 中岡 妙
 金子美千代
 藤村 亜成
 矢沢 和女
 高森 一呑
 山崎 武彦
 木嶋 盛隆
 川田由起子
 油谷 克己
 前田 楓花
 村上 直樹
 阪本きりり
 瀬川 幸子
 田中ゆみ子
 桑原すゝ代
 前田 紀雄
 田賀八千代
 小林すみえ
 酒井 紀華
 三宅 保州

芋焼酎すぐに垣根を取り払う
 微酔いの女性と駅までを歩く
 鈴虫も呼ぼう今宵の月見酒
 酒呑むといつも正義の人となる
 雪国のロマン雪割りウイスキー
 居酒屋で広げる未来設計図
 人生を語らう酒という伴侶
 焼酎の湯割りが無いと生きられぬ
 オンザロックどこかで生きていて欲しい
 呑んで騒いで生前葬も悪くない
 佳
 たまゆらのいのちほろりと酔う月夜
 酒の無い天国よりも有る地獄
 呑みに行こうと紙ヒョーキがとんでくる
 バッカスは神で親友でお友達
 日の丸の似合うお酒とにぎり飯
 人
 免許返納してから酒のうまいこと
 地
 発泡酒いまもブルース・リーは神
 天
 酒好きが集まるたましいの辺(はら)
 軸
 父は酒豪で青鬼の異名もつ

山岡富美子
 山田 耕治
 澤井 敏治
 酒井 健二
 土田 欣之
 斉尾くにこ
 木本 朱夏
 新家 完司
 平井美智子
 両川 無限
 渡辺 富子
 日野 愿
 山本希久子
 居谷真理子
 森中恵美子
 北川ヤギエ
 芳賀 博子
 太田扶美代

川柳大会参加者

総数 341名
(順不同・敬称略)

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 【青森】 高森一呑 福土慕情 | 大堀正明 小川佳恵 荻野浩子 江島谷勝弘 |
| 【宮城】 浅野夏希 雫石隆子 菅野佳都子 | 奥村五月 小野雅美 貝塚正子 大島美智代 |
| 須田たかゆき 仁多見千絵 橋本あつ子 | 柿花和夫 加島由一 片岡加代 太田扶美代 |
| 三塚まゆみ | 金川宣子 賀部 博 川口恵子 垣見はるみ |
| 【秋田】 伊藤のぶよし | 川端一步 川端六点 川本信子 片山かずお |
| 【神奈川】 加藤佳子 川島良子 | 神田良子 木津川計 楠井輝子 鴨谷瑠美子 |
| 【石川】 新保芳明 | 久世高鷺 黒岩靖博 乗原道夫 川田由紀子 |
| 【福井】 西谷公造 | 小西 明 酒井紀華 坂上淳司 岸井ふさゑ |
| 【愛知】 金子美千代 | 坂 裕之 坂本星雨 阪本秀子 北川ヤギエ |
| 【滋賀】 村井敦子 | 澤井敏治 沢田和子 柴田桂子 木見谷孝代 |
| 【京都】 市井美春 津田照子 今井万紗子 | 島尾正男 島田明美 初代正彦 久保田清美 |
| 福井民雄 前中知栄 山田葉子 | 新海信二 瀬川幸子 関よしみ 栗原すゝよ |
| 【大阪】 穂山常男 油谷克己 赤松ますみ | 杉本光代 杉本義昭 助川和美 くんじろう |
| 阿部俊八 天根夢草 池田純子 石田ひろ子 | 鈴木かこ 立石郁子 伊達郁夫 古今堂蕉子 |
| 井澤壽峰 石田孝純 井丸昌紀 指宿千枝子 | 立蔵信子 田中新一 田中廣子 齋藤さくら |
| 入江春菜 岩田明子 上嶋幸雀 岩佐タン吉 | 谷口東風 丹後屋肇 次井義泰 阪井美世子 |
| 上出 修 上山堅坊 榎本舞夢 内田志津子 | 辻 肇 土田欣之 寺井弘子 佐々木満作 |
| 大浦初音 大浦福子 大治重信 宇都満知子 | 寺川弘一 寺本 実 徳山泰子 柴本ばっは |
| | 美馬りゅうこ |
| | 栃尾奏子 内藤憲彦 中井佳子 嶋澤喜八郎 |
| | 中井 萌 中岡 妙 中川一男 正信寺尚邦 |
| | 中島一彌 長高俊雄 中道佳昭 鈴木いさお |
| | 中村 恵 中山春代 西川更紗 田中ゆみ子 |
| | 西澤司郎 西出楓楽 能勢良子 徳山みつこ |
| | 能登和子 原 洋志 樋口 眞 富山ルイ子 |
| | 日野 愿 平賀国和 廣田和織 中川ひろ介 |
| | 藤井則彦 藤井康信 藤田武人 西田喜代志 |
| | 藤塚克三 藤村亜成 藤原大子 原田すみ子 |
| | 穂口正子 本田智彦 前たもつ 平井美智子 |
| | 前田紀雄 松浦英夫 松岡 篤 平松かずみ |
| | 水野黒兎 南タカ子 都 武志 弘津秋の子 |
| | 村上玄也 村上直樹 森井克子 藤島たかこ |
| | 森田旅人 森 廣子 矢倉五月 松尾美智代 |
| | 山根妙子 山野寿之 山本 進 松本あや子 |
| | 雪本珠子 横山里子 吉岡 修 真鍋心平太 |
| | 米澤俣子 宮崎シマ子 森中恵美子 |
| | 森松まつお 山岡富美子 山口弘委智 |
| | 山本希久子 吉道あかね 吉村久仁雄 |
| | 宇都宮ちづる きとうこみつ 銭谷まさひろ |

〔兵 庫〕

青木公輔 上田和宏 上田ひとみ
 梅澤盛夫 奥田宗光 長川哲夫 上野多恵子
 加川靖鬼 北野哲男 桃谷和郎 太田としお
 小山紀乃 斎藤隆浩 酒井健二 緒方美津子
 相元世津 多田雅尚 谷口修平 奥澤洋次郎
 近兼敦子 敏森廣光 富永恭子 玄番美恵子
 長島敏子 永田紀恵 長浜美龍 米田利恵子
 西美和子 能勢利子 芳賀博子 清水久美子
 萩原理月 羽奈和子 平松直樹 竹山千賀子
 藤井宏造 福田好文 福田正彦 野口真桜子
 藤田雪菜 藤岡りこ 堀 正和 東内美智子
 松崎 明 丸山孔一 村岡義博 前川ちづ子
 村田 博 山崎武彦 矢沢和女 みざわはな
 山口光久 山田厚江 山田耕治 山口ヨシエ
 山端なつみ

南 芳枝 毛利元子 山下純子 飛永ふりこ
 山田順啓 山田恭正 山本昌代 中山恵美子
 米田恭昌 渡辺富子 長谷川崇明
 〔和歌山〕 石田隆彦 上田紀子 藤原ほのか
 川上大輪 喜田准一 木本朱夏 古久保和子
 小谷小雪 武本 碧 松原寿子 山本日出男
 三宅保州 たむらあきこ
 〔鳥 取〕 倉益一瑤 新家完司 斉尾くにこ
 田中天翔 平尾正人 前田楓花 田賀八千代
 牧野芳光 河川無限 竹村紀の治
 副井ゆたか
 〔島 根〕 石橋芳山 伊藤玲峰 梅瀬みちを
 藤井寿代
 〔岡 山〕 大石洋子 大杉敏夫 工藤千代子
 折鶴 翔 丹下凱夫 永見心咲 国塩志保里
 藤井智史 藤澤照代
 〔広 島〕 小島蘭幸 鴨田昭紀
 〔徳 島〕 橋本征介
 〔愛 媛〕 郷田みや 永井松柏 大内せつ子
 浜本光子 柳田かおる
 〔高 知〕 小澤幸泉 橋田綾子 橋田秀穂
 〔佐 賀〕 真島 涼 真島 芽 真島美智子
 〔熊 本〕 岩切康子 杉野羅天 鷺頭英司

ご芳志御礼 (敬称略・順不同)

田中新一・小島蘭幸・新家完司・森中恵美子
 天根夢草・本田智彦・川上大輪・鳴谷瑠美子
 隼石隆子・西出楓楽・前たもつ・平井美智子
 村上玄也・福土慕情・内藤憲彦・山本希久子
 柿花和夫・寺井弘子・川端一步・古今堂蕉子
 水野黒兎・山口光久・相元世津・前川千津子
 武本 碧・松原寿子・岩切康子・富山ルイ子
 藤井宏造・栃尾奏子・藤田武人・居谷真理子
 木本朱夏・石田隆彦・坂 裕之・片山かずお
 山崎武彦・藤村亜成・大久保眞澄
 山岡富美子・宇都満知子・内田志津子
 江島谷勝弘・吉村久仁雄・鈴木いさお
 番傘川柳本社・番傘わかさ川柳会
 竹原川柳会・川柳宮城野吟社
 きやらばく川柳会・京都塔の会
 川柳塔みちのく・コーキ封筒(株)
 美研アート

★以上の皆さまにご芳志拝受致しました。
 有り難うございました。

愛染帖

新家 完司 選

(投句263名)

もぐもぐと予習してから電話口
會吉市 大羽 雄大

(評) 少し込み入った話なのだろう。しどろもどろでは恥ずかしく相手にも失礼。何事も「予習」が大切。真面目人間の面目躍如。

寝屋川市 川本 信子
アンティーク過疎の空き家にとある

(評) 古ぼけた置物や玩具なども、目利きが鑑定すると「お宝」かもしれない。が、空き家であっても勝手には入れず、ザンネン!

大阪市 高杉 力
布切れも国旗になると勇まし

(評) 布切れも国旗になると国家のシンボル。紙切れも印刷すると万札になる。布や紙に大きな意味を持たせるとは、人間って面白い。

藤井寺市 太田扶美代
言い訳をするとき少し口ごもる

(評) 言い訳をするに後ろめたさを感じるの善人の証。悪いヤツは蛙の面にシヨンペン。嘘も言い訳もスラスラである。

大阪市 石田 孝純

呑み込んだ愚痴が起こした胃痙攣

(評) 腐ったものを食べたように、胃が拒否反応を起こしてしまつたのだ。誰もいないところで「バカヤロー」と吐き出してやろう。

藤井寺市 鈴木いさお
ハワイへ行つても欠かさず正露丸

(評) 子供のころからずっとお世話になつて、すっかり体に馴染んでる常備薬なのだろう。ハワイと正露丸の取り合わせが愉快。

大阪市 古今堂蕉子
外股で歩くと歩きやすいのよ

(評) 人それぞれ歩き方に特徴があり、後ろから見ただけでも誰それと分かる。いままら「外股」を直せと言つてもそれは無理。

河内長野市 村上 直樹
シンギュラリティまさかもしやと湧く疑念

(評) 人工知能が人類を支配する「技術的特異点」は2045年位とのこと。恐るべき時代の状況を確認したいが、ちよつと無理か?

大阪市 笠嶋 恵美
盆に來た息子夫婦も老けてきた

(評) しばらく会わなかつた息子夫婦。よくよく眺めると、なんだか年寄りくさくなつている。自分が老けるのも仕方がないか…。

川西市 山口 不動
ヨチヨチと平均寿命越えてゆく

(評) 日本人男性の平均寿命は81歳。それ

以下で旅立つのは少し癪。ヨチヨチでもいいから、何とか人並みまでは歩いて行きたい。

八幡市 今井万紗子
この猛暑私も間引きされそう

安来市 原 徳利
糞暑い言葉下品になる暑さ

八王子市 川名 洋子
水水と脅迫されて水を飲む

三田市 村田 博
ステテコでお散歩すればクールビズ

鳥取市 前田 楓花
フレイフレイ 蟬の死骸を運ぶ蟻

大阪市 江島谷勝弘
暑いから裸でお経上げてます

鳥取市 田中 天翔
猛暑です犬に散歩を拒否される

堺市 加島 由一
手火花と君の浴衣の曲線美

大阪市 田中ゆみ子
蟻螂が敵ではないと言っている

鳥取市 山下 節子
昼寝するここは我が家の風の道

岡山県 山縣のぶ子
扇風機足で押すのは夫ゆすり

宝塚市 岸田 万彩
ひと夏に食べたソウメン五万本

鳥取県 竹信 照彦
猛暑でも秋を忘れぬ秋西

東京都 川本真理子
標準語に近づくA Iのなまり

米子市 竹村紀の治
掃除して洗濯もして耳掃除

海南市 小谷 小雪
子供らよたまには褒めてくれますか

奈良市 米田 恭昌
下座にも上下があつて気疲れ

横浜市 加藤 佳子
実年齢ごまかしかぬジム通い

黒石市 千葉 風樹
黙祷の地から津波が動かない
ざわめきを鎮める花の種を撒く

鳥取市 倉益 一瑠
地震ではないよ私が揺れている
病窓の花火昔をつれてくる

大阪市 柴本ばつは
あまり良く聴こえる耳もシンドイね
どうにでもなれと鮮のあの横目

神戸市 敏森 廣光
虐待のニュースが僕を切り刻む
口許に何か付くこと多くなり

佐賀県 真島久美子
鯨尺持つて途方に暮れている
バカと書く窓が私の胸にある

米子市 池田 美穂
献上の候補になつた梨を食う
点々と手の平のシミ既往歴

熊本市 杉野 羅天
焼肉屋高級店は静かなり

三原市 鴨田 昭紀
赤坂の寿司が旨いというカラス

大阪市 津守 柳伸
カルシウム充分とつてよく眠る

倉吉市 岡崎美知江
内科皮膚科お薬手帳よく動く

河内長野市 渡邊 修
インプラント車一台口の中

米子市 吉田 陽子
ミシン踏むどんどん自分取り戻す
生きているお札に鍋をピッカピカ

神戸市 大頭としお
誕生日嫌な自分をゴミ箱へ
カサカサと笑う枯れ葉でありたいが

和歌山市 土屋起世子
秋ですね果実も爺も甘くなる
横着な買物籠にカッパ麵

河内長野市 黒岩 靖博
乱気流ベルトサインにうろたえる
バイキング離合集散蟻の列

鳥取県 門村 幸子
目から本離し「カナカナ」聞いている
一日が濃いありがたい病み上がり

和歌山市 古久保和子
ケータイの機能はメールまでよし
木登りが上手だったと通夜の席

河内長野市 大島ともこ
とほけても顔に大きな嘘マーク

弘前市 高瀬 霜石
衣食住足りては不覚にもメタバ

樺原市 居谷真理子
仏像がわんさかワンダーランド奈良

高槻市 片山かずお
長続きさせたいことは無理しない

横浜市 川島 良子
信号は青・青・青で今日の運

福井県 伊藤 良一
移住だと思つて期待する彼岸

豊中市 松尾美智代
食べる飲む喋る口だけ達者です

堺市 村上 玄也
救急車の迎えなければ行かぬ医者

河内長野市 森田 旅人
面倒な人ださびしい人なんだ

門真市 坂本 星雨
喉の渇きに目覚め尿意にまた目覚め

貝塚市 吉道あかね
揺れながらまだまだと言つねこじやらし

岡山市 丹下 凱夫
足腰が弱り悪知恵出なくなる

奈良市 大久保真澄
ひよろひよろとじいちゃんチャリが車道行く

松江市 石橋 芳山
あれこれと腐り始める眠れぬ夜

河内長野市 山岡富美子
ハイテクを鼻で笑った台風禍

東大阪市 北村 賢子
台風被害涙ながらに見るテレビ

仙台市 月波 与生
積読の本売り義援金にする

笠岡市 小野美那子
見つからん捨てるほどある句の種が

西子市 黒田 茂代
人間がテーマ漫画も川柳も

三田市 北野 哲男
句会には喜の字傘の字米の歳

大阪市 榎本 舞夢
憧れの人と出会える塔まつり

寝屋川市 富山ルイ子
塔まつり楽しく作句友と逢う

松江市 相見 柳歩
ハーモニィひとりひとりが宝物

三田市 上田ひとみ
友だちがひとりふたりと減っていく

丹波篠山市 酒井 健二
正論は三分聞けばすぐ飽きる

鳥取県 斉尾くにこ
一つ二つ楽しみのある予定表

橋本市 石田 隆彦
詐欺団も役者揃えて演技する

岡山市 大石 洋子
「あーそーは」独り言ならこれにかきる

弘前市 福士 慕情
津軽塗りバカがつくほど重ね塗る

大阪市 宇都満知子
キスをする形で啜る麺の口

高槻市 初代 正彦
小腹空く頃にピーピー焼き芋屋

大阪市 平井美智子
コンビニのおでん独りの味がする

堺市 澤井 敏治
良き目覚め水一杯のデトックス

香芝市 大内 朝子
ふる里と同じ音色のちろる虫

神戸市 奥澤洋次郎
娘の手に母が使っていた鍊

神戸市 山口 光久
念入りに髭を剃ってる待ち合わせ

大阪市 谷口 義
ちゃんと生きていますと言いにくい

枚方市 丹後屋 肇
オリンピック手土産にして逝くつもり

下松市 有海 静枝
地球危機知らせる早い彼岸花

土佐清水市 辻内 次根
悪口を言って口内炎になる

豊中市 きとうこみつ
巴里3ヶ月住んでたことを言いふらす

三原市 笹重 耕三
返納か更新するか岐路に立つ

唐津市 仁部 四郎
表情のない大臣と蟻の列

岡山県 藤澤 照代
大嘘も真実も吐き古稀になる

鳥取市 上山 一平
マイカーを自転車にかえ雨合羽

京都市 榎本 宏子
誕生日のぜいたく店一番の桃を買う

寝屋川市 伊達 郁夫
暗証番号忘れ一歩も動けない

豊橋市 小松くみ子
もう止めた無口は性に合いません

三田市 谷口 修平
七十年経っても飛ばす石つぶて

大阪市 田中 廣子
株で損懲りずにこれは勉強賃

笠岡市 藤井 智史
千切っては生える私の欲望

瀬戸内市 宮宅比佐恵
これからが勝負米寿の滑走路

宝塚市 大田としお
能力の無さを補う笑い顔

和歌山市 松原 寿子
手料理に人生の味包み込む

鳥取市 岸本 宏章
北のキム南のムンもまだ子供

岡山市 永見 心咲
飛んで来た鹿がフロントガラス割る

裏通り昭和を灯す繩のれん
尾崎市 永田 紀恵

ナツメロの合唱蘇る昭和
東大阪市 佐々木満作

車座がとつても似合う茶碗酒
弘前市 稲見 則彦

水分補給こまめにビール飲んでる
札幌市 三浦 強一

笑つてるお湯割りは梅
五所川原市 むらのひとり
大五郎

「試飲できます」僕を名指して呼んでいる
羽曳野市 吉村久仁雄
西宮市 緒方美津子

酒の量医師も鵜呑みにしてない
羽曳野市 中川ひろ介

鈍感力で周りを立てるいいお酒
鳥取市 田賀八千代

素のままで語れぬ酒と手を繋ぐ
松原市 森松まつお

二次会の顔ぶれを見て腰据える
神戸市 能勢 利子

グラスワインで立てなくなつて下戸と知る
高槻市 松岡 篤

禁酒日に都合よろしく誘われて
豊中市 藤井 則彦

猫にまで疑われたす午前様
堺市 内藤 憲彦

コソ泥に間違えられた朝帰り

甘い異地雷埋めてる北新地
豊中市 上出 修

百薬と偽り今日も般若湯
鳥取市 谷口回春子

カラオケもお酒も苦手なんです
松山市 郷田 みや

友の棺に別れの酒を滴らす
大阪市 森 廣子

家計費のトップを走るサブリ代
池田市 太田 省三
和歌山市 まつもととこ

人間が造る種無しブドウの実
豊中市 水野 黒兎

時として潤滑油めく軽い嘘
米子市 妹能令位子

自分色薄く近所とおつきあい
大阪市 藤田 武人

雨男着くと雷ノーゲーム
豊中市 齋藤奈津子

再会が恋に発展する予感
高槻市 富田 保子

親切に心がゆれて老いの恋
大阪市 平賀 国和

道を説く人も惑わす柔い肌
山口市 青木 隆子

追うことも追われることも下手な恋
沖繩県 あらさくら

恋心どの位かと熱測る

寝そびれてまた短波聞く病室で
三田市 久保田千代

恐ろしいことに卒寿が見えて来た
大阪市 樋口 眞

二世帯の旅は孫守り財布もり
大阪市 内田志津子

お薬も文字も危うくなつてきた
京都市 都倉 求芽

歌謡教室ここにもあった上中下
鳥取市 岸本 孝子

日和見で自分の位置を見失う
西宮市 福田 正彦

そのうちにゴメン謝るのを忘れ
大洲市 花岡 順子

精神と別にだんだん曲がる腰
宇部市 平田 実男

音立ててざるそば啜り鬱を抜く
貝塚市 石田ひろ子

叩かれて叩かれたつてまだモグラ
奈良県 中堀 優

息子より娘二人が欲しかった
三田市 東内美智子

万歳のかたちでナンジャモンジャ咲く
今治市 永井 松柏

定年後あるようでない俺の価値
寝屋川市 岡本 勲

意地通すのも疲れ一切なりゆきに
富田林市 片岡智恵子

共選欄

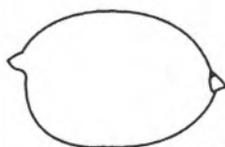
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句名)



K. K.

「降る」 水野 黒兔 選

心に降る雨が咲かせてくれた花
 帰りたい帰したくない雨が降り
 光降る朝日に老いの幸祈る
 童謡の雨は優しく降っていた
 真心に触れて光が降り注ぐ
 ひとしきり降ってみやげに虹残す
 本降りの前触れ妻が物言わぬ
 原爆忘降る反戦歌花が咲き
 戦絶えぬ青い地球に星が降る
 ミサイルが降る漁火の日本海
 焼夷弾の雨に降られた幼い日
 蟬時雨降って終えたる負け戦
 降りかかる火の粉潜った修羅のみち
 星が降る辺野古の海に不治の傷

門真市 坂本 星雨
 横浜市 川島 良子
 鳥取県 橋本 整
 芦屋市 竹山千賀子
 枚方市 山口弘委智
 横浜市 菊地 政勝
 三原市 鴨田 昭紀
 米子市 中原 章子
 鳥取県 門村 幸子
 箕面市 中山 春代
 堺市 坂上 淳司
 岡山県 大杉 敏夫
 三木市 山口ヨシエ
 広島市 岸本 清

「降る」 鴨谷 瑠美子 選

忘却の始まり雨が降り止まぬ
 どしゃ降りも私も融通がきかぬ
 降る雨にいつもどこかで避難指示
 俄雨少しずつ混むブックオフ
 ワイパーも効かない程のハイウエイ
 一点を狙い撃つかのよう豪雨
 遠い日の君と星降る山に居る
 長いこと降るほどの星見ていない
 わたくしの郷では毎夜星が降る
 星が降る天文台がある故郷
 にわか雨駅の置き傘ありがたや
 降り出すと元氣出てきた雨男
 雨降った風が吹いたで酔いが覚め
 にわか雨一番近い飲める店

佐賀県 真島久美子
 海南市 小谷 小雪
 米子市 妹能令位子
 島根県 伊藤 寿美
 枚方市 丹後屋 肇
 堺市 村上 玄也
 羽曳野市 徳山みつこ
 高槻市 片山かずお
 三原市 鴨田 昭紀
 羽曳野市 中川ひろ介
 西宮市 緒方美津子
 豊中市 藤井 則彦
 丹波篠山市 酒井 健二
 米子市 竹村紀の治

黄砂降る核のゴミではないように	四条驛市	吉岡	修
核の灰降って地球は千鳥足	益田市	篠原紋次郎	
脱力の風船が降る甲子園	宝塚市	岸田	万彩
星降る夜童話の里の窓明かり	大阪府	米澤	俣子
しとど降る雨の流した今日の鬱	香芝市	大内	朝子
本降りの予感日韓せめぎ合い	札幌市	小沢	淳
仲裁に入って火の粉降りかかる	豊中市	齋藤奈津子	
降る雨も秋の訪れ漂わす	河内長野市	黒岩	靖博
降り方の調節さかぬ自然界	丹波篠山市	藤井美智子	
自分史の所どころに雨が降る	和歌山市	上田	紀子
九月の雨が降り方を忘れてる	大阪市	宇都満知子	
星が降る天文台がある故郷	羽曳野市	中川ひろ介	
蝉時雨やんで今宵の虫時雨	橿原市	居谷真理子	
降る雨を待つてはみたり恨んだり	鳥取市	大前	安子
君の街やさしい雨であるように	三田市	上田ひとみ	
降る星を手で掬い取るファンタジー	名古屋市	山本三樹夫	
事故現場手向けの花に雨しとど	尼崎市	藤井	宏造
豪雪の予感地球の唸り声	河内長野市	村上	直樹
言い過ぎてむなしさだけが降る夜空	岡山県	田中	恵
幸運は舞い降りるはずドレス縫う	河内長野市	森田	旅人
土砂降りも青空もあり金婚譜	高槻市	松岡	篤
星降る夜王子求めて夢の国	箕面市	広島	巴子

日向雨きつとキツネのお嫁入り	岡山県	田中	恵
降りそいで降らず運動会びより	池田市	奥園	敏昭
退院の背へ残暑の陽降りそそぐ	三田市	久保田千代	
財産は無いが星降る里に住む	貝塚市	石田ひろ子	
プリンスに入閣までも降って湧く	横浜市	加藤	佳子
夕立の匂いが先にやって来る	橿原市	居谷真理子	
夕立へお返しをする虹の橋	大洲市	花岡	順子
野や山は恵みの雨に深呼吸吸	河内長野市	藤塚	克三
いい雨と褒めりや豪雨を連れてきた	三田市	九村	義徳
地球への恨みのように降る豪雨	高槻市	松岡	篤
豪雪の予感地球の唸り声	河内長野市	村上	直樹
台風で隣の屋根が降ってきた	大阪市	近藤	正
降りしきる雨に献花の無念泣き	河内長野市	坂野	澄子
降れば止め降らねば降れと人のエゴ	富田林市	山野	寿之
ドシャ降りへ男の傘を借りて出る	西宮市	亀岡	哲子
降りそいで降らぬおでかけファッション	大阪市	津守	柳伸
珍しい人が来たから雨になる	藤井寺市	太田扶美代	
大雨の度に削れる古の家	八尾市	宮崎シマ子	
外は雨ポリリューム上げて二三曲	寝屋川市	平松かすみ	
転た寝に秋の日差しが降り注ぐ	高槻市	島田千鶴子	
台風一過夏の夜空に星が降る	富士見市	中島	通則
AIも降雨量には手が出ない	丹波篠山市	藤井美智子	

庭の隅胸の底にも落葉降る

京都府 都倉 求芽

暴言に非難の聲が降り注ぐ

大阪市 坂 裕之

幸運は降っては来ない掴み取る

鳥取市 副井ゆたか

降るといふよりは天裂ける豪雨

朝霞市 前田 洋子

村捨てる男の肩に降る木の実

阿南市 小畑 定弘

雨が降りもしやに揺れるかくし事

大阪市 笠嶋 惠美

花吹雪飛んでいるよな降るような

鳥取市 夏日 一粹

非正規に降る雨だつて詩を生む

唐津市 仁部 四郎

もう少し様子みましよう 明日も雨

弘前市 高瀬 霜石

バカバカバカと私に降ってくる自虐

松江市 石橋 芳山

百均の傘にも同じ雨が降る

寝屋川市 伊達 郁夫

人生の盛り火の粉も槍も降る

土佐清水市 辻内 次根

異国の街道頓堀に雨が降る

大阪市 古今堂蕉子

どしゃ降りに人のところが試される

神戸市 山口 光久

疑いの残る火の粉が降りかかる

大阪市 金川 宣子

独りぼっちの屋根星が降る月が降る

島根県 伊藤 寿美

吐き出した悪口肩に降り積もる

大阪市 小野 雅美

ステンドグラスに降る巴里の陽差しよ

豊中市 きとうこみつ

パリに降る雨はピアアのピブラート

奈良県 安福 和夫

青と黄でアルルの空に降らす星

河内長野市 中島 一彌

疑いの雨降る心刻み居り

神戸市 富永 恭子

星の降る故郷若者が居ない

大阪市 田中ゆみ子

独りきり思い出だけで降り積もる

和歌山市 武本 碧

降りしきる雨に心がしめりだす

神戸市 山根 弘華

一日中降って語らず日が暮れる

大阪市 樋口 眞

幸運が降って来ぬかと宝くじ

河内長野市 木見孝孝代

降るような星に見られて入る秘湯

堺市 坂上 淳司

旅に出る夫は何時も雨男

岡山県 山縣のぶ子

雨降って土地の崩れる村に住み

羽曳野市 三好 専平

欲しいなと思う雨量の調整機

丹波篠山市 北澤 稠民

種蒔きを終えて恵みの雨が降る

貝塚市 吉道あかね

母の忌の母が私の中に降る

大阪市 平井美智子

友の通夜悲しむようにこぬか雨

藤井寺市 鈴木いさお

霧雨が二人を少し走らせる

和歌山市 まつもとともこ

降らないで子と約束の日曜日

奈良市 宇賀 史郎

星が降るプラネタリウム白昼夢

八尾市 山川 寧

虫の音を降らせ舞台に秋つくる

岡山県 藤澤 照代

雪国の雪は下から降ってくる

弘前市 稲見 則彦

紙の雪降らす裏方への拍手

札幌市 三浦 強一

幸運は降っては来ない掴み取る

鳥取市 副井ゆたか

暴言に非難の聲が降り注ぐ

大阪市 坂 裕之

ドカッと降る雨に外出怖くなる

長岡京市 山田 葉子

ミサイルの降る傘小さく見えてくる

枚方市 藤村 亜成

どしゃ降り走る私は悪くない

鳥取市 倉益 一瑤

疲れたら帰ろう星の降る里へ
 失恋は降雨コードゲームです
 さんなんの降る公園の哲学者
 退院の背へ残暑の陽降りそそぐ
 ポロポロと降る雨やまぬ西瓜切る
 さよならの雨は斜めに降ってくる
 雪国の雪は下から降ってくる
 一日中降って語らず日が暮れる
 木鶏の翼に黒い雨が降る
 どしや降りるを走る私は悪くない
 8ミリのわが青春に雨が降る
 雪国の雪は覚悟を決めて降る
 忘却の始まり雨が降り止まぬ
 降る雪が永久とわに白とは限らない
 降るといふ字がどうしても逢うになる
 只管打坐雨に打たれるガマガエル
 秋霖の午後は金魚も動かない
 指揮棒の先から降ってくる宇宙
 土砂降りて翼豊んでいる麒麟

秀句

松原市 森松まつお
 笠岡市 藤井 智史
 和歌山市 古久保和子
 三田市 久保田千代
 高槻市 富田 美義
 大阪市 平井美智子
 大前市 稲見 則彦
 大阪市 樋口 眞
 仙台市 月波 与生
 鳥取市 倉益 一瑤
 堺市 澤井 敏治
 鳥取市 岸本 宏章
 佐賀県 真島久美子
 宝塚市 丸山 孔一
 岡山市 永見 心咲
 千葉市 海老池 洋
 桜井市 安土 理恵
 弘前市 福士 慕情
 富田林市 中村 恵
 八王子市 川名 洋子
 羽曳野市 徳山みつこ
 大山市 金子美千代

あすは我が身か土砂降りの中する避難
 過疎の村なんにもないが星は降る
 ご破算にするどしや降りも悪くない
 8ミリのわが青春に雨が降る
 雨宿り入った店で酔いつぶれ
 雨女二三人居るバスツアー
 もう少し様子みましょう明日も雨
 降り出しにご用心です山の雨
 降る言葉はねつけ頑固出来上り
 満天の星ときどき流れ星と僕
 花吹雪飛んでいるよな降るような
 どしや降りるの雨よ恵みのままであれ
 生き急ぐ僕にことさらにわか雨
 星の降る故郷若者が居ない
 さんなんの降る公園の哲学者
 指揮棒の先から降ってくる宇宙
 守りたい星降る空と地の緑
 事故現場手向けの花に雨しとど
 本降りる予感日韓せめぎ合い

秀句

堺市 内藤 憲彦
 奈良県 長谷川崇明
 松山市 宮尾みのり
 堺市 澤井 敏治
 鳥取市 岸本 孝子
 三田市 堀 正和
 弘前市 高瀬 霜石
 大阪市 柴本ばっは
 鳥取県 竹信 照彦
 三田市 野口真桜子
 鳥取市 夏目 一粋
 熊本市 杉野 羅天
 羽曳野市 吉村久仁雄
 大阪市 田中ゆみ子
 和歌山市 古久保和子
 弘前市 福士 慕情
 宝塚市 丸山 孔一
 尼崎市 藤井 宏造
 札幌市 小沢 淳
 松原市 森松まつお
 桜井市 安土 理恵
 唐津市 仁部 四郎

「ハード」

(投句 202名)

梶谷和郎選



ハードだが流した汗に無駄はない
 口先のハードな妻にかなわない
 子の寝顔ゆっくり見れぬ救命医
 ロボット化進む職場の生き残り
 四島も二島も遠くなって行く
 生き延びてハードになっていく余生
 一気飲みハラスメントの渦の中
 ハードな男の汗拭く仕事好きだなあ
 口がかたい彼なら相談してもいい
 超ハード亀も首出す暇がない
 マニュアルから一步も出ない石頭
 配達の人クロネコは眠れない
 濡れタオルハードな汗を包み込む
 核持たぬ固い決意を子に孫に
 ハードでも明日を夢見てやりこなす
 ハードよりハードに使え国予算
 罰ゲームみたい真夏の墓掃除
 鬱憤をハードロックに食べさせる
 寿司米は少しハードに炊いてグー
 ハードなる貧しさ耐えてきた昭和

和歌山市

北原 昭枝

香芝市

大内 朝子

門真市

坂本 星雨

神戸市

奥澤洋次郎

三田市

堀 正和

奈良県

渡辺 富子

黒石市

北山まみどり

藤井寺市

太田扶美代

鳥取市

池澤 大鯨

岡山市

永見 心咲

三田市

村田 博

大坂市

森 廣子

海南市

小谷 小雪

豊中市

水野 黒兎

堺市

内藤 憲彦

高槻市

富田 美義

松原市

森松まつお

横浜市

菊地 政勝

大坂市

古今堂蕉子

池田市

上山 堅坊

余白までびっしり埋めてある予定

令和でも頑固親父を演じてる

日本中モーレッツ社員いた昭和

ハードな仕事すすんでこなすポランテア

もう少しソフトに言ってくれませぬ

よくやったよく頑張った僕なりに

猛練習上手になった切れ役

秋霜烈日人の傲りに来る試練

独り身に浮き世の風が突きささる

最期まで笑って生きるのもハード

パワハラとハードの線が揺れている

激動の昭和を生きた笑い皺

佳句

大人になれないハードカバーの童話

きつい事言うからみんな身構える

胃カメラに写る男の古戦場

ほどけない男結びに縛られて

冷湿布とても無口な足の裏

人

休まない蟻の列にもある矜持

地 河内長野市 坂野 澄子

天 ハズキルーペの上にお尻を乗せてみる 大坂市 平井美智子

軸 着ぐるみの中でもがいている酷暑

富田林市 中村 恵

気がきかぬ酢漬けにした石頭

弘前市 富士 慕情

富山市 伴 よしお

大坂市 小野 雅美

河内長野市 木見谷孝代

三田市 九村 義徳

三田市 上田ひとみ

高槻市 原 洋志

堺市 澤井 敏治

西宮市 高橋千賀子

八幡市 今井万紗子

米子市 後藤美恵子

三田市 尾崎 一子

仙台市 月波 与生

大坂市 坂 裕之

弘前市 高瀬 霜石

大坂市 柴本ばつは

佐賀県 真島久美子

「低い」

中山 春代 選

(投句 207名)



すぐそこに星が散らばる山の上
標高の低い山にもある魅力
草に寝て未来語った若かった
蹴つまずく段差年々低くなる
まだ思うあと十センチ背がほしい
手をとって孫の目線で説く躑
大雨が低い所を丸呑みに
ため池の底に鉄筋ケアハウス
低い鼻ですが元気に生きてます
小三に背を抜かされるのも間近
低糖のおはぎついつい二つ三つ
ハードルを下げて欲び分かち合う
野菊からとがめられてる朝帰り
子報土も不覚か妻の低気圧
腰低く上司の嵐受け流す
しがらみを断ち切りたくて低姿勢
背が低く背伸びの癖を持ち歩く
たいていは低血圧である美人
低い鼻だから私に似合うのよ
身長的事で孫等に恨まれる

尼崎市 山田 厚江
弘前市 稲見 則彦
三木市 山口ヨシエ
豊中市 水野 黒兎
大阪市 江島谷勝弘
三原市 笹重 耕三
香芝市 大内 朝子
池田市 太田 省三
羽曳野市 徳山みつこ
神戸市 能勢 利子
生駒市 飛永ふりこ
鳥取市 谷口回春子
黒石市 千葉 風樹
三田市 北野 哲男
箕面市 出口セツ子
大阪市 小野 雅美
鳥取市 池澤 大鯨
豊中市 きとつこみつ
松山市 柳田かおる
藤井寺市 太田扶美代

妻腕を見せびらかさぬ低い腰
低姿勢それ外交に向きません
カギ付きのタンスが売れる低金利
低収入二千万など夢の夢
神様の声は重低音だろう
耳障り囁く様な低い声
コーラスのノイズはほくの低い声
お嫁さんおめでたらしいローヒール
高くなれ呪文唱えて天瓜粉
愛らしい鼻とは上手い形容詞
匍匐前進葡萄狩ではありませぬ
生きていく為です低く飛ぶカモメ

佳 句

ときどきは背のびしたくてピンヒール
説得をする時に出す低い声
哀しみは低い方へと流れゆく
濁流に手を振っている低い屋根
底辺で触れる絆のあたたかさ

人

飛行機のマークが読める基地の街

地

早魃に村が浮き出るタムの底

天

底辺の職とは言わせない介護

軸

寄ってくる犬の目線に膝を折る

池田市 上山 堅坊
上尾市 中村 伸子
宝塚市 岸田 万彩
大阪市 磯島福貴子
今治市 永井 松柏
豊中市 松尾美智代
大阪市 佐々木満作
大阪府 米澤 俣子
奈良県 長谷川崇明
三田市 久保田千代
弘前市 高瀬 霜石
神戸市 富永 恭子
三田市 上田ひとみ
橿原市 居谷真理子
鳥取市 夏目 一粹
大山市 関本かつ子
大阪市 平井美智子
横浜市 菊地 政勝
弘前市 福士 慕情
笠岡市 藤井 智史

初級教室

題 — 気まま

高瀬 霜石

ここが初心者コーナーだと、分かっている、この際、ハッキリ言わせてもらおう。

題が「気まま」だからといって、すぐに「自由さまに生きる」とか、「ゆつくりと気ままな旅」とかを書くのは、あまりに安易。

ちよつと立ち止まれば——ちよつと考えれば、すぐに分かるはずだからさ。

「気まま」という言葉を使ったら、「自由」はいらぬ。逆もしかり。重複を避けよう。たった十七音しかないのだから、もつと言葉を大切にしたいものである。

① まずは、上下を入れ替えてみる。

(▼が原句。▽が参考句)

▼一人旅行先気決めず青春切符 ゆき
やつぱり、頭が重くても、下五はピシッと。

▽青春切符行き先決めず一人旅

▼もう少し勝手気ままに生きて行く (高千賀子)

句を楽しくするには、あえて頭が重くても。

▽勝手気ままに生きて行きますもう少し

▼定年後気ままに生きるがあてはずれ秀 爺

中八だし、なんとなくこちないの、

▽気ままに生きるあてがはずれる定年後

▼ジャンボくじ置き場忘れてそのままに 洋一
面白いけど「そのままに」はいらぬか。

▽置き場所を忘れちまつたジャンボくじ

▼勘違い気ままに生きてパッシング (あさくら
この句も、分かんではないが、

▽パッシングされたりもする自由人

▼大浴場慣れてきましたスッポン (東美智子
美智子さん。いいですねえ、スッポン。ただねえ、リズム的にはねえ。

▽大浴場スッポンに慣れました

② この言葉でいいのか。もう一度チェックして、別な言葉に変えてみる。

▼気まま猫今日はどこらにお出かけか 厚 江
猫は気まま。これ、当たり前。「気まま猫」は言い過ぎ。つまり、気ままは余計だから、

▼この素直に、こうしたい。

▽うちの猫今日はどちらにお出かけか

▼誘われて気まま有るままバスツアー 道 子

これも、ぎこちない。こども素直に。

▽誘われてすぐ参加するバスツアー

▼米を研ぐ今の幸せ言い聞かず 眞智子
佳句だが、これ、自分が自分に言い聞かせているんですよ。となると、もつと分かりやすく、こども素直に。

▽米を研ぐ今の幸せかみしめる

▼年寄りの気まま主治医がたしなめる 整
年寄りって誰？それは、きつと自分。

▽わたくしの気まま主治医がたしなめる

▼怖いのは協調欠ける国のドン 貴美江
言いたいことはよく分かるが、あんまり言葉を削るのは如何なものか。ぎこちない。

▽怖いのは協調性に欠けるドン

▼きまだねきさまといわれて別れ道 マキコ
面白い句。これはこれで、僕はいいと思うのだが、中八も気になるし、句意もちよつと分かりにくいから、こんなもので。

▽お互いにきままそろそろ別れ道

▼裕福でなくても気ままに生きている 光雄
これも中八。中八が絶対ダメというわけではないが、もつとリズムよく仕上げたい。

▽裕福じゃないが気ままに生きている

▼気ままでも息災なれば子孝行 千代

なるほど。「子孝行」という言葉は、是非
いかしたい。ここは、気ままをカット。

▽息災でいけばすなわち子孝行

題が「気まま」だからといって、それを
あえてカットしてもいい場合が、ままある。

▽趣味違え気ままに暮す夫婦 くみ子

▽別々の趣味持ち仲のいい夫婦

▼気ままにて人生ゆつくり老いの恋 嘉 昭

これも中八。ここはもう、達観しよう。

▽人生はゆつくり恋もまたしかず

▼脳が気ままで花の名がすぐに出ず 風 露

▼水をやる花の名前が出てこない

▼お惣菜買って気ままな一人ご飯 高弥 生

これはこれで、いい句だと僕は思う。でも、

下六が気になる人も、きつといる。と

なる。「気まま」をカットすればすつきり。

▽お惣菜買ってひとりの晩ご飯

▼梅雨時の気ままな天気恐ろしい ひでお

よく分かる。が、あえて言葉を入れ替

えてみる。こつちの方が、恐ろしい？

▽梅雨時の天気さまざまで恐ろしい

▼待つ人のいない気ままを持って余す 紀美代

▽待つ人のいない時間を持って余す

③1字（1単語）の重みを考える。

▼スマホ切りひとり気ままな旅に出る 奈津子

▽スマホ切るひとり気ままな旅に出る

▼天満橋気の向くままに食べ歩き のぞみ

▽天満橋気の向くままに食べ歩く

▼これもいいあれもいけどこれにする 澤良子

面白い句。でも、ここまで言うなら。

▽これもいいあれもいけどそれにする

▼独りです勝手に起きて食べて寝て 亜希子

▽独りです勝手に起きて食べて寝る

▼気ままは楽だけど二人は淋しいな 一 弥

▽気ままですだけど一人は淋しいな

▼行き先も風に任せるひとり旅 通 則

▽行き先は風に任せるひとり旅

▼気まま虫百匹も飼いた頑固 (則) 正 子

▽気まま虫百匹も飼いた元氣

○は佳句。◎は優秀句。

○お前さん自由でいいな猫を抱く よしお

沢山あつた「猫」の代表句。

○わがままで気ままな人は大きい 峰 子

ハ、ハ、ハ。素直で、正直で、楽しい。

○肩書がやと外れて気ままです 久直

○年金で気ままに暮らすシエアハウス 佳子

久直さん、佳子さんたちは、年金で十分

暮らせるのでしようなあ。羨ましい。

○妻は留守部屋の空気は僕のもの えい子

妻の留守、夫の留守は、わんさかあったが、

「部屋の空気」が面白かった。以下、目の

付け所がユニークだった句。

○夫逝きて朝夕お経あと気まま 由紀子

○あまりにも気ままに上げる消費税 弘 美

○アリさんよ一度気ままにやってみな 不二夫

○孤独死の兄は気ままに生きました 正 美

○自己流で描く傑作アートです 厚 子

その意気やよし。次の句も、決意が見事。

○老いて子に従いたくはないわたし 里 子

○雑草に花が咲いたら抜きません 信 子

○サイコロの出た目の数が行ける駅 三樹夫

今回も、卒業生が出ました。坂野澄子さ

ん（河内長野市）。誠にめでたい。

○わたくしが逢いたい時にメールする 澄 子

「あう」には、いろんな「あう」がある。会う、

遭う、合う。この「逢う」は、お互いに出

向くこと。すなわち「逢い引き」の逢う

だから、大変だ。スリルの「逢う」。

◎学校を雨が降るから休んどこ 澄 子

◎ひとり居にトイレの扉開けてます 澄 子

この、軽快さがなんとともたまらない。

川柳塔鑑賞

同人吟 山崎武彦

— 10月号から

冷房をつけているかとの電話

徳山 みつこ

子は親の鏡と言われますが、高齢の母（失礼）を氣遣う子の優しいひと言が嬉しい。

頼りたくない、しかし頼りたい気がする微妙な母心が垣間見える。そんな複雑な心境を「さらり」と詠まれている奥深い一句に感銘。

新しい自分に出会うまで走る

中村 恵

いいですね。青春真っ直中の恵さん。こんな前向きな気持ちがあるから、何事も精一杯頑張れるんですね。羨ましい限りです。急ぎすぎて躓いたり、転んだりしないよう、ご注意の程を願っています。

安全な歩道で油断してしまふ

藤村 亜成

亜成さんの気持ちよく解ります。便利なのは車の車が突然凶器となつて、交差点や歩道に飛び込んでくる。時には車ごとコンビ二の客となる。枯れ葉マークは益々肩身が

狭くなつてきました。原因は色々あると思うが、免許返上も方策かと思う。とにかく自分の身は自分で守る。青信号も安心だとは限りません。気を付けましょう。

伸びて縮んで百歳までのスクワット

今井 万紗子

口だけは達者な私も、八十歳を真近にして足腰が軋み出しました。少しは歩け歩くと万歩計に叱られてします。そんな中、万紗子さんは、百歳まで伸びて縮んでスクワットを楽しむと言いつつ切られました。その心意気に乾杯。

どの皺も笑い皺だと笑つとく

斉尾 くにこ

いいですね。何ごともプラス志向のお人柄が目につかぶ。人生このように生きたいものです。私も少しは見習いたい、多分無理だと思ふ。

付度をする気なさそう温度計

山岡 富美子

連日の猛暑が少し納まったかと思うと、

台風、竜巻、集中豪雨そして森林火災、地球の悲鳴が聞こえてきます。地球規模の温暖化を阻止しようと、世界の子供達が今立ち上がろうとしています。大人の愚かさを嗤うかのように。我々の住むこの豊かな星にこそ、ほんとうの付度が問われているでしょう。

八六と記した墓石に手を合わす

石田 隆彦

唯一の被爆国である日本。毎年八月になると太陽を真っ黒に染めたあの悪夢がよみがえる。敗戦や原爆の句が沢山あった中で、代表してこの作品を頂戴しました。もう戦争は懲りたはずなのに国会では改憲論が囁かれて久しい。安倍一強の危うさを感じる。戦争を知らない世代の平和論が気に掛かるのは考え過ぎでしょうか。

人生はこうありたいね肩ぐるま

川端 一步

羨と称して、限度を超えた虐待や学校でのいじめが後を絶たない。そんな殺伐とした世にあつて、父親の温もりを感じる「肩ぐるま」に何だか「ほっと」した安堵感と親子の強い絆を感じる。「人生こうありたいね」と言い切られた一歩さんの心境がよく解る一句。我々も、せめて「塔まつり」

では全員手を繋ぎ、交流の輪を広げ、再会を誓い合いたいものです。

赤いのがいいのに青にされたバラ

穂谷和郎

種なし西瓜やぶどう、それに座りがいいからと言うだけで四角い西瓜まで市場に出回っている。人間の都合で自然界の法則を変えてしまうヒト科の傲慢さを感じる。

赤いバラは有りのままの姿で咲きたいと訴えているのでしょうか。作者の深い洞察力が読み手に迫ってくる。

描き易い位置に柿の木立っている

黒田茂代

過疎の村に茅葺きの古民家。何となく絵になる日本の原風景。片隅には一本の柿の木、真っ赤に熟した実が寒々と残っていた。ワンポイント赤を前景に置けば絵になると思いスケッチした。後日先生の評価は誰もが絵にしたいくなる構図で陳腐であるの一言であった。

使い古した言葉や、誰でも思いつく発想は捨てなさい、と教わった川柳の原点と同じだなと痛感した次第。

政界にご意見番が見当らぬ

岸本清

お友達で身の内を固めた安倍内閣、益々

一強体制が続きます。その強引な国会運営は如何なものか。先が思い遣られる。

作者のご指摘通り、忖度は出来ても、正面から議論のできる「ご意見番」のいない現状に危うさすら感じる。

自民庄勝茶漬けサラサ生あくび

藤井寿代

テレビの前で刻々と流れる選挙速報に注目しておられる作者。結果は野党の頼り無さだけが目立った選挙でした。「茶漬けサラサ生あくび」に寿代さんの心境が余すことなく語られています。

無理するな秋まで待とう墓そうじ

安土理恵

ごもつとも、ごもつともです理恵さん。この炎天下に雑草も懸命に生きているんだ。殺生は止そう。草ぼうぼうの墓の前で勝手な理屈をつけ、私も涼しくなるまで待っています。ご先祖様にそつと手を合わせながら……

日本列島どこにも逃げ場のない暑さ

大川 桃花

この世のようあの世も暑いのだろうか

富山 ルイ子

生命の安全を脅かす異常気象と自然災害

の多発に「いま行動を起こさないと間に合わない」と世界中の若者が立ち上がった。スウェーデンの少女グレタ・トゥンベリさん（16歳）を中心とした若者達である。その規模は一五〇ヶ国、数百万人に達する。

そんな危機感と怒りは、やがて自国中心のアメリカや石炭火力にこだわる日本へと向けられることでしょう。安倍首相や小泉新大臣の今後の対応が問われているのです。国民は騙されませんよ。

壁破る覚悟の一步踏みしめる

松原寿子

何事も決断するまでには、迷い、苦しみ、悩まれたと思います。それでも一步勇気を持って踏み出せば、新しい自分、新しい世界や風景が新鮮に映ることでしょう。現状に満足せず、自分を叱咤激励されている寿子さん、頑張ってください。私には到底無理ですが……

惨劇はアニメの中にして欲しい

中村金 祥

数多くの名作を遺したアニメスタジオがガソリン男に狙われた。その衝撃は海外にも広がり献花が後を絶たない。一日も早い復活を祈るばかりです。

水煙抄鑑賞

—10月号から

中村 惠

今しがた天より竜田姫お越し

柴 本 ばつは

一際暑かった今年の夏、傍らを、微かに秋の風を纏って通り抜ける竜田姫。ようこそお越し。

初盆の欠けたピースに手を合わす

石 田 孝 純

お盆のたびに、欠けたピースを数えている。最後の一片はわたし。

窓閉める全てを拒む音のして

小 野 美那子

一日を終えて夕闇の頃、窓も雨戸も閉め、全てシャットアウト。失礼して私の空間と時間を楽します。また明日。

ゴメンなさい小さな嘘をつきました

大 頭 としお

小さな嘘だと思っているのは、自分だけかも。大小を問わず、嘘はダメ。

わがままに手を焼く老いの反抗期

西 郷 紀美代

唯唯、感情に任せた反抗には、皆がそっぽを向く。素直になるか、いっそ暴走老人と言われようが、突っ走る？

天井を見つめて今日も微熱あり

原 熊 知津子

療養の身だろうか。為す術もなく、天井を見つめているだけの日々。元氣を出して下さい。一日も早い御快復を！

強烈な香水に負け席移る

若 松 由紀子

あまりに強い香水はマナー違反、これが食事の席なら最悪。お気持ち解ります。おしゃべりを止めれば病気がと聞かれ

戸 田 真理子

いつも喋り過ぎという自覚はあるのです。今日は聞き役でいようと、思っているのに、反対に心配をかけてしまう。まさしく共感句です。

飲んでいる飲んでいないと腹が立つ

下 田 茂登子

いらいらするあんな事、こんな事、腹の虫を鎮めて、無事に眠らせるために、飲むのです。もう一杯。

ふしくれの指に指輪が光りすぎ

永 見 安子

荒れてふしくれた手に、不似合いな指輪が少し恥ずかしい。でもあなたの気持ちが眩しくて、とてもうれしい。

歎異抄八十にしてまだ解けぬ

岸 田 武

八十歳の探究心に脱帽。理解できましたら、ぜひ御教示願います。

好きだからより熱心になる仕事

森 下 よりこ

土や作物と会話しながら、野良仕事。足腰の痛みなど、何のその、やっぱり好きだから。

私のポケットマネー開業

前 田 紀 雄

そんなおいしい話、わたしにも一口。

氣を抜けば自分の顔にすぐ戻る

奥 野 健一郎

お出かけ用の仮面を付けてきたのに、気がつけば外れてる。どうしよう。

冥土から夫の土産が届かない

馬 場 喜美江

間もなく届きます。もう少しお待ち下さい。わたしは催促に逝くつもりです。



追悼

さようなら中原みさ子さん

森山盛桜

九月六日早朝突然の訃報でした。近年

は、みか月例会にも殆んどが投句での参加でしたが、みさ子さんの所へは月に一、二回は顔を出して、さほど不調とは感じられませんでした。本当に驚きました。「雨漏りがするけえ業者を頼んだがア」が最後に聞いた言葉でした。

みか月への入会は、昭和五十五年の第一回大会後間もなくで、諷人さん、汲香さん共々みか月を支えて頂きました。

昭和六十年代になると、みか月大会に黒川紫香先生を始め川柳塔の皆様が大挙してお見えになるようになり、山紫苑のマイクロバスで鳥取駅までお出迎えをして、砂丘観光のあとリングゴ狩りをするというのが定番になっていました。このお出迎えの先頭に立っていたのがみさ子さんで、毎年嬉々として出かけておられますが、程無く、森中恵美子先生とも親

しくさせて頂いていたようです。

みさ子さんも諷人さんも元気な頃は、諷人さんの車に乗せてもらい川柳塔大会によく出掛けて行きました。プレーキは手で掛けるように改造されておりましたが、みさ子さんは多分に付添いの意味があったと思います。

二年に一度の鹿野祭り大祭は豪華な山車で知られていますが、諷人さんや汲香さんがお元気な頃は、毎回のよう川柳関係の方を招待されていて、私も随分お世話になりました。この日はどの家に入つて飲んでもいいという慣例なので、私もあちこちと厄介になりました。みさ子さんは突然の来客にも慌てることなく対応されてました。

今年六月に突然黒川紫香先生の娘さんからお電話があり、鹿野学園にある先生の句碑を見たいとの事でした。平成十四

年の国文祭川柳鹿野大会のあと句碑句木が沢山建てられ、学園入口に紫香先生の校門を出ると一年生走る

の句碑があります。みさ子さんに話したところ、迫之上ご夫妻には以前お目にかかった事があるとの事。諷人さんが元気な頃に一緒に鹿野城址等をご案内したとの事で、確かに証撰写真が残っていました。早速日程調整をしてご夫妻をお迎えし、句碑・夢こみち・鹿野城址・大タブノキ（正平さんが行った）などを回つて楽しいひと時を過ごしました。みさ子さんととってはいい思い出になったと思えますが、これが最後の川柳外交になってしまいました。

義母に仕え夫を支えという人生でした。が、「夫唱婦随」というよりも、「婦唱夫随」の部分も大いにあったと思つています。一徹者の諷人さんもみさ子さんの意見は、時に大様に聞いていたように思います。近詠には夫を偲ぶ句も多く見受けられます。

ひとり居てめつきり涙もろくなる
想い出を空に浮かべて仰ぎ見る
ぼんやりの視野で夫が呼んでいる



(投句200名)

明治時代の句に(菊
權)て隠居の小言遠
ざかり)というのが
あります。



隠居なんていうコトバも懐かしくなっ
てしまいましたが、人間、何もやること
が無いと他者のことが気になるようで、
言わなくていい一言が滑り出たりします。
その点、川柳という厄介(?)なもの
に係わらせて頂いていけば、自分のこと
で手一杯になりシアワセかも知れません。
では、ナビを。

岡山市 大石 洋子

スマホという輪っかのなかで生きている
(評)今やスマホの無い生活は考えられ
ないほど、でも、それに縛られているこ
とに気付く人は少ないかも知れません。

松山市 宮尾みのり

失恋のその後拝金主義になる

(評)やっぱり頼れるものはお金のみ、

なんて思ってしまうのでしょうか。いい
え、新しい恋がきつと変えてくれるはず。

大阪市 石橋 直子

おまつりの聴こえてきそう啖呵売

(評)威勢いいことはをまくしたてて物
を売る、そんな口調に聞きほれているう
ち買っていたなんてことも。

三田市 村田 博

遺言はマトリョーシカの中にある

(評)重なっている人形を次々と剥いで
いつて出てきた遺言、さぞかし大金のこ
とが、なーんて期待しますよね。

和歌山市 喜田 准一

めつたには起ころぬことがまた起ころ

(評)事件、事故、あるいは反対に、す
ごく嬉しいこと。あれこれ想像してしま
いますが、いいことでありますように。

倉吉市 山中 康子

ハードルを下げてから身がやわらかい

(評)無理な背伸びをしていては緊張で
こわばってしまうけど、ハードルを低く
したとたん身も心もふんわり。

大阪市 宇都満知子

礼儀正しくロポットが出迎える

(評)いくら礼儀正しくてもロポットで
わねえ。なんて言っていたらきつと時代
に取り残されるんでしょうね。

八尾市 山根 妙子

保存食偶に入れ替えしませんか

(評)缶詰やらお水やら、置いていろ

ち期限切れになることも。かと言って普
段にそれを食べるのもなかなか。

堺市 坂上 厚司

ワンコインけちり荷物を持ち歩く

(評)あるある、たつたン百円をけちっ
たのが最後まで崇ってしまうこと。判断
ミスは自分のせいだから、トホホ。

大阪市 笠嶋 恵美

流行の服に合わない目鼻立ち

(評)うなずいていいやら悪いやら。お
化粧でそれなりにはないながらも、根本的解
決までは至りませぬ。

弘前市 福士 慕情

安近短カバン一つで足りる旅

門真市 坂本 星雨

淋しさと自由を溶かす空の色

鳥取市 田中 天翔

お風呂場のランパ懐かしい昭和

米子市 八木 千代

筋肉痛のあなたにせめて貼り薬

大洲市 花岡 順子

抜け出せぬ男の諦めのポーズ

大阪市 小野 雅美

今日ぐらい視線逸らさず話そうよ

羽曳野市 中川ひろ介

京美人くすつと笑いかんにんえ

大阪市 藤田 武人

この次はタライが落ちてくるドリフ

肩車何かを掴みかけている

貝塚市 石田ひろ子

高槻市 松岡 篤
手前生国ナニワです鉛どうぞ

黒石市 北山まみどり
できるなら気付かれぬよう帰りたい

河内長野市 山岡富美子
限界は頭脳ではなく資金です

三田市 多田 雅尚
カード決済に戸惑うアナログ派

堺市 澤井 敏治
梵鐘の音うるさいという世相

防府市 坂本 加代
診察日一番札をゲットする

土佐清水市 辻内 次根
無人駅ベンチの風に起こされる

豊中市 藤井 則彦
迷子札ぶら下げ妻と待ち合わせ

弘前市 高瀬 霜石
スケジュールだけは詰まっていた無職

豊中市 きとうこみつ
山頭火も通った道か奥島根

千葉市 海老池 洋
雷神へ楯突くようなノッポビル

和歌山市 土屋起世子
パパラッチ此処まで来れば大丈夫

鳥取市 山下 節子
広告を兼ねた案山子になりました

大阪市 柴本ばっは
二千万入れたカバンだしっかりと

香芝市 大内 朝子
何もかも妻を頼りにいい余生

弘前市 稲見 則彦
化けるのが下手で困っている狸

箕面市 出口セツ子
肌の色個性も違い面白い

松江市 相見 柳歩
腹巻きの似合う大人よどこ行った

三田市 堀 正和
香港を他山の石と台湾は

佐賀県 真島久美子
騙し絵に騙されないという右脳

福原市 居谷真理子
しょぼくれた宿で雨音聞いている

明石市 糺谷 和郎
空港で無いと気づいたバスポート

東大阪市 佐々木満作
人らしい生き方寅さんに学ぶ

松江市 石橋 芳山
月旅行までの準備はできました

犬山市 金子美千代
往々に大金持は不仕合せ

石川県 堀本のりひろ
着々と近づいてくる地獄門

西宮市 福島 弘子
通学路の昔のポストまだあった

和歌山市 上田 紀子
異国へと飛び立つ前に墓参り

河内長野市 木見谷孝代
ロボットにへそくりの番してもらおう

神戸市 富永 恭子
下げる為頭は付いていたらしい

奈良市 山本 昌代
ひょうひょうとたつた一人で行く晩夏

米子市 池田 美穂
どうしよう結婚指輪でかすざる

唐津市 坂本 蜂朗
正札を付けて街行くバナマ帽

仙台市 月波 与生
ロッカーに残った旅人の明日

堺市 加島 由一
かがり火にインスタ映えの老鶴匠

朝霞市 前田 洋子
フラフラ腰に食い込み回らない

寝屋川市 平松かすみ
やっこさ開けた金庫に借用書

三田市 谷口 修平
石コロの道に不向きなハイヒール

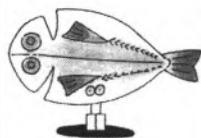
尼崎市 清水久美子
着ぐるみの中で唱えている梵語

横浜市 川島 良子
間違いさがし誤り3つ正しまししょう

大阪市 石田 孝純
もみじという妹ならばおりますが

1月号発表

(11月15日締切)



(平本 霧石人 画)

柳箋に2句

おせめか

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報

スベアキー小さい誤差に悩まされ
幸せを信じて明日を切り拓く
み仏の視線の中にある安堵
ミクロの差匠の指は見逃さぬ
煤煙は街を包んで鼻毛伸び
母の背が小さくなって愛おしい
タンカーの見守る南十字星
人生の節目節目にのし袋
再婚が増えて結び切りをやめる
女子会と言って出掛ける喜寿仲間
恵まれた仲間に感謝して余生
十本の指が仲間をささえ合う
知らぬ振りしてる仲間の温かさ
再婚に幾ら包むかまた迷う
趣味仲間個性七色唐辛子
同病者すぐ友達の顔になる
主義主張どうあれ同じ地球人

富香 准一 智三 敏照 一雄 康則 ひろ子 和子 知香 宏枝 まき 幹子 起世子 よしこ 俣子 弘子 保州

小さい噂派手に飛び交うせまい町
断捨離へ昭和平成包み込む
小さい嘘ひとつが癒すこともある
包み紙利用平和の千羽鶴
呱呱の声村の歓喜に包まれる
大部屋で明日の夢を語り合う
下積みの同じ痛みがわかる仲
風を切る男の小骨抜いておく
熟考を重ね上げるオリジナル
包まれていたんだやっとなわかる
愚痴言わぬ暮らしを包むにぎりめし
飲み会があつてつながらる職仲間
清濁を丸く包んで如来像
清引かないでと二葉ふるわす雨上がり
アルバムの裏に小さな内緒事
大勢の仲間がいとと母誘い
時経てば仲間外れも活きてくる
小銭貯め金婚式は宇宙旅

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

初孫を甘えん坊に失敗だ
甘党が面倒をみる酔っぱらい
長崎の鐘が辛くて甘い音
愚痴こぼし気分が晴れてさわやかだ
さわやかに夜空に咲いた赤青黄
さわやかな笑顔私のハート射る
人間が好きさわやかな人もっと好き
さわやかな噂持ち寄る夏帽子

悦子 紀の治 照彦 美美子 公恵 清 美知江 節子

笑顔でも売りに行こうか日曜日
さわやかな汗は老人臭しない
岩かげに隠れるかえる笑つてる
陰ふみで陰に隠れ幼き日
正直に生き隠しごとなどしない
太陽が隠れ私の至福時
あの世まで行つてはならぬかくれんぼ
新月に隠れて海の深呼吸
水着きて力士の腹と比べあう
海の中水着の花が満開だ
出番待つ水着タンスで半世紀
この身体水着の型におさまらぬ
ビキニつけ三途の川を初泳ぎ
枯葉散る頃には消える水着跡
水着ショー当てがはずれた子供向け
アリバイのように水着が干してある
水着見に行くより滝を見に行こう
ぼたもちは令和に残る昭和です

はびきの市民川柳界(大阪)中川ひろる介報

ライザップに入会すべき北のドン
夕立にしておれた町が甦る
投げ勝って勝って手にした優勝旗
正午のサイレン黙祷をする甲子園
投宿はイの一番に非常口
息子への投資は多分戻らない
投げかけた言葉をキャッチされ安堵
かき氷がぶりと猛暑忘れさせ

宏造 みつこ 壽峰 ちづる 欣之 大子 久仁雄

体型が子供産むたび大型に
ルーレット資産投げ打ちする夜逃げ

誘い球投げてアナタを確かめる
体型が似ていて見合い姉の服

絵ハガキの朝顔夏のおもてなし
体型もなにもわからぬ火事の後

亡き夫の投機で今の暮らしあり
お盆過ぎ投げ売りを待つ衣料品

出っ腹も個性と思や気ならぬ
今更に二千万円匙投げる

あの時の投げキッスから五十年
孟蘭盆に孫達集い妻しのぶ

勝敗は投手の出来で左右され
月澄んで秋の気配を投げかける

投げやりな人生変えたい出合い
川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

鳥になろう私のための空ならば
この空を奈落より見た八月忌
酔いざめの色即是空にわか居士
主張ばかり続く議論は空まわり
父母の味空は無限の愛の色
空一杯の花火に上げた世の刹那
忘却を誓い見上げた青い空
老いばれを悟らせまいと空元氣
空覚えふえて世間の隅っこに
蒼天を貫くほどのかい夢
空港のお土産秋も乗せてくる

フジ 清 高 鷲 かつ美 瑠美子 専 平 久仁子 シルク 千鶴子 紀 雄 洋 一 一文 正義 泰 子 ひろ介 雅 美 ひろ介 真理子 大 月 隆 昭 福 貴 子 里 子 満 作 妙 子

八月の空へ蝉しぐれ絶唱
雨模様今日は感謝の休み
広いひろい世界の人の空ですよ
空っぱの財布がタクト振りたがる
もう二度とご免こむるきのこ雲
屋久島の千年杉が空を突く
あーあーあ老いたもんだと空見上げ
核なくす魔法の杖はないものか
杖に乗りどこか遠くへ行きたいな
お互いが杖になり合い五十年
杖ついで笑顔の似合う母となり
富士登山共に挑んだ靴と杖
稲光空が破れる音連れて
破られるつもりで辞表すつと受理
破れかぶれ男に向かつて切る啖呵
破られた記録筋みにする若さ
時作り甲子園をば観戦す
代役にやつとめぐつてきたチャンス
チャンスつて驚掴みせな逃げまっせ
告白しようしようとまだひとり
出直しのチャンス転けたから気付く
七十五やつとチャンスが来たけれど
無人の寺円空仏に会うチャンス

いさお 日の出 美世子 充 子 克 己 進 たかこ 一 歩 廣 子 直 子 重 信 志津子 満知子 俊 雄 シマ子 美 籠 ミナ子 宏 造 舞 夢 ゆみ子 勝 弘 久仁雄 柳柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報 刈り込んでやつとやさしい風が吹く ガラガラパスで静かな街へ行く 梯子車の助け待ってるピルの窓 高 明 蜂 朗 實

鳴田昭紀 選
悟らずに生きてるうちが花だった
人相を見てきつちりと吠える犬
風鈴も鳴り続けるとやかましい
病院も混み霊園も混んでいる
おそらくと先入観で決めつける
鏡見るうちにだんだん笑い出す
金もなく頼る人なく知恵もなく
年金をちよつと持ち寄りお茶にする
きついのはあなたの娘だからです
お互いが突つ支い棒になる残暑

石花菜 フジ 敏 子 洋 二 茂 夫 知 香 ふりこ

佳句地十選 (10月号から)

倉 益 一 瑤 選
大きな樹大きな山を見て育つ
たつぶりの恥をくぐつて花開く
人の世をぶれずに生きる独楽の芯
平成も令和も同じ飯の味
情念を抱いたまんまの無人駅
切り取つた日記のあとと深い闇
人間を時どき僕は休みたい
山をけり空蹴りできた逆上がり
鉛筆をみな尖らせている強氣
妥協などさらさらないが握手する
菜 摘 ふりこ よしみ 節 子 みさ子 志津子 ダン吉 武 彦 あかね 由紀子

謝罪シヨ一見せぬ背中であつて

四郎

セミの声日に日に消えて秋がくる

小三 陽

竹原川柳会(広島)

吉田

太虚報

道草はしない真面目な父の靴

若さの特権どんな道でも切り拓く

竹原へ今や根付いた道の駅

寺の鐘生まれの町の道で聞く

人生はまわり道ほど面白い

一本道だった絶好調だった

このころは古い記憶が闊歩する

一歳の記憶はあばのおんぶひも

シャボン玉記憶の中を飛び続け

幼い日の記憶たどれば父母の愛

鮮明な記憶たちは師のことば

眼裏の里山遠く僕の夏

朝早く蟬の視察する孫と

虫干しをしたい国会議事堂を

幼虫のカラリと抜けて夏になる

観た事のない虫が出る災害後

蟬時雨令和元年盛夏なり

蟻の行列夢は未来の大富豪

全力で走る白い歯夏を観る

心の汚れ流すかの如滝の水

海よ海昭和の日々を恋しがる

あさがおのおまつりいっばいさきました

おんせんにいったよきもちよかつたよ

おんせんにいったよきもちよかつたよ

四歳ちか
五歳ひろむ

川柳塔みちのく(青森) 稻見

則彦報

給料日生き生きして茶封筒

お静かにただ今発芽するところ

摘まないで夢を抱いてる新芽です

鏡見て我が身に活を入れる朝

いつからか守った子らに守られる

続編が佳境人生おられない

来年の花芽を想いりんごもぐ

秋大根種をまき終え茶が旨い

4Kならば鏡に負けぬ映像か

心は鏡くもりを知らぬ子の笑顔

立ち読みのページ覚えてまた明日

伸び伸びと芽を出し育つ場を作る

誰か見てる芽が出るまで続けよう

じつと見る鏡に年を教えられ

百葉の長はわたしのお友だち

麦茶飲み酷暑に堪えて夏過ぐす

三毛猫が私の老後をエスコート

嘘を言う心鏡に暴露され

色あせぬ人気続いてモノの筆

訊いてないことまで手鏡は喋る

なにかやが喧嘩しつつも妻が居る

レシートが重く感じる無駄遣い

キャッシュレス不安が過ぎる戦中派

雨の降る日は雨の降る街へ行く

ひとし

則彦

重虎

風来坊

のぶよし

隆樹

美鈴

友二

洋子

慕情

孝子

久美子

柳子

吹喜

初枝

英子

吞舟

真由美

黙人

一呑

龍馬

ふさあ

花峯

なけなしの金に火がつく義理もある
平成に名残りおしむかむつの花
ご覧くださいゴーンに振っていた尻尾
Yシャツの立てた襟から風まとう
女つて神世の昔からずるい

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

初音報

手術中あの世ふわふわ歩く夢

足の爪切るのがつらい腹が出る

地酒とろりローカル線の四人掛け

久しぶり誘われたけど荷物持ち

孫だつこ息子の嫁が居ればこそ

たこ焼きの上でふわふわしてるカツオおし

多数決時に良からぬ事も決め

足腰が駄目なら口で勝負する

誘われて句会に参加今がある

下戸なのに数が足りぬと誘われる

姿見に亡母そっくりと笑われる

誘われてことわり切れぬ僕がいる

焼ききたてのパンがエールくれた朝

終活をする為お血減らしして

妻の名を呼ばばでてくる捜し物

守備範囲うごかぬ位置に辞書をおく

お疲れさん目と目で息を整える

これ以上聞かない方がよいみたい

百面相踊るアホウの足さばき

誘惑に負けてしまった血糖値

三面鏡本音をちらり紅を引く

おんせんにいったよきもちよかつたよ

きよし

小とみ

霜石

和香子

規子

厚江

公子

和子

富夫

こみつ

紀恵

千賀子

たみえ

新録

つな子

正彦

雅美

五月

芳香

紀華

健二

ひとみ

祐康

修平

妾見は決して嘘はつきません
胎教に足がお腹を蹴り出した
うろこ雲夏の疲れを包み込む
君が誘えばタカラヅカだつて行く

休肝日の翌日に飲む二日分
足が出たらしい幹事のしぶい顔
どうしても足は飲み屋に向かつてる
痺れます説法よりも足の裏

顔洗う秋の気配を手を受けて
得意技もの忘れだと笑む八十路
万華鏡のぞけば母に逢えそうな
まず褒める事から探す通信簿

悠然と生きて明日へ弾む足
手鏡に青空もらうベットの児
川柳塔なら

愛こめて敷いたレールを外す子よ
てこずった次男がくれたお小遣い
見ためより意外と頑固わたしです
雨上がりわがもの顔で伸びる草

香港にてこずるチャイナ武力ノ
十七歳に意見するのはほどほどに
自然薯の深く育つて掘る苦労
不器用でいまだパソコン格闘す

生きるとや身から出る錆持て余す
意地つ張り損を承知で突き進む
意地張るが元気の証しおばあちゃん
意地と意地ぶつかる闇にある歴史

良種 一步
満作 久仁雄
いさお 耕治
勝弘 靖鬼
美籠 かずお
宏造 真核子
ひろ介 竹千賀子

大久保眞澄報

棟梁の意地は百年後へ挑む
這つてもタスキをつなぐチーム愛
澄んだ目に意地をチラッとぞかせる
バカですわね男の意地つてそんなもの
成り行きで意地を通して殻の中
スキヤンダル女の意地がほむら立つ
意地つ張りなオトコにちよつと甘めの茶
のんびりに見えて結構貯めてはる
家出を止めようか空が青すぎる
のんびりの友と気があういらちの子
草に寝てのんびり人生語り合う
豪放な割にはくせ毛気にしてる
夫という他人に悩む昼下がり
シュレッダーが恋の悩みを切りきざむ
生きて行く悩みが続く葉包紙
悩ましい生きるの死ぬのbe動詞
悩みごと五臓六腑に溜めてる
考える度で悩みは尽きぬまま
悩みながら常識論へ着地する
百歳の悩み友達居なくなる
胡座から正座に涙帰らない
悩むのも今を生きてる証です

理恵 江里子
勝弘 純子
純子 恭昌
恭昌 藤倫

賛郎 光堂
敬子 文聡

すみえ 貫一
展代 すみれ
ひろ介 万紗子
萌子 敬介
史郎 富子
和夫 崇明
惠美子 美智子
行久 盛隆
比呂志 榎子
成子 國治
ふりこ

すみえ 貫一
展代 すみれ
ひろ介 万紗子
萌子 敬介
史郎 富子
和夫 崇明
惠美子 美智子
行久 盛隆
比呂志 榎子
成子 國治
ふりこ

すみえ 貫一
展代 すみれ
ひろ介 万紗子
萌子 敬介
史郎 富子
和夫 崇明
惠美子 美智子
行久 盛隆
比呂志 榎子
成子 國治
ふりこ

南大阪川柳会

松岡

はらはらと位牌見守る爺の恋
迎えるたびにはらはら涙八月忌
落葉はらはら秋は詩人にしてくれる
パスの席代わつてほしいけど言わぬ

直樹 楓 修

篤報

妹よ長生きしてね葬儀イヤ
政治家は笑いをとってどないする
洗髪が苦手でいつもかゆい髪
自治会長年だ病氣だ無理ですわ
そこそこ飲むが酔いたくないのです
少し違う自分演じて赤い服
物分りよい義母演じ和を保つ
どつしりと母の演技は神がかり
聞こえてる振りも悲しい老の知恵
修羅場でもクールな顔できりぬける
子の嘘にそうかそうかと母は聞く
晩酌と妻がほっこり出迎える
嬉しい日は猫もほっこり膝の上
思い出に浸り居眠りしています
アンパンが買つて買つてとボクを呼ぶ
鍵つ子をほっこりさせる窓明り
退院にほっこり描く未来像
ほっこりを邪魔する電話コマーシャル
忘れ物みたいひとりの六帖間
忘れ物みたい出させる八月忌
忘れ物で済ましてならぬ汚染水
忘れてる微笑みだけで医者いらす
忘れ物忘れたことを忘れてる
さるすべり不戦の誓い忘れまい

山田 葉子報
ふりこ 保子

京都塔の会

山田

跡始末させて育む処世術
茶碗にも二人で生きた傷の跡

ふりこ 保子

痕跡は残しませんとしゃぼん玉
激辛のカレーを食べて暑氣払い
食欲をそそる薬味の底力

逝つた後の日記涙のあとばれる
悪さして陰に隠れる一歳児
大いばりばれた年齢勲章に

スパイスの利いた一句に膝を打つ
スパイスでやる気出させる朝ごはん
ばれる迄被つています良妻賢母

馴れ初めがばらされてゆく披露宴
ばれるのを待つてる重い内緒ごと
抱きしめた幸せばれるはずがない

渓谷に残るこだまは父母の声
ふる里はむかしむかしの夢の跡
母校再訪窓から草が生えている

焼け跡が背景だった紙芝居
さよならの航跡島の盃蘭盆会
飽食にスパイス求めジム通い

後ろ手にかくしたチヨコが可愛くて
疲れていても飲むとなつたらしゃんとする

川柳塔わかやま吟社

小谷 小雪報

何しても思い出つることはない
何も無い時間自分を見つめてる
同じこと何度見ると辞書が言う
何事もやる気ひとつで出す答
絶対と言えなくなつて来た自信
首傾げなんでやねんを繰り返す

文代 朝子 光久 ルイ子 弥生 哲子 英旺 弘子 多津子 かずお 葉子 求芽 弘委智 万紗子 弘之 洋志 欣之 正彦 美津子 則彦

気がつけば傾くほどに深くなる
じつくりと傾く風を読んでいる
外見はチャライが性格は真面目
合せ鏡それから自信失せました
ご用心一部さくらがもぐつてる
よく打つが守備がまずくて代打です
さつきまで体の一部だった爪
一部なら私の臓器さしあげる
この星の一部わたくしの陣地
性格の悪さがCTに映る

ふうもん吟社(鳥取)

両川 無限報

大声で妻を怒鳴つて負けている
温暖化地球の危機と海が泣く
両親が逝つて故郷が他人めく
潮騒もせせらぎも有る良い里だ
幸せのカタチ違つていいと知る
体力も金もないから弱く生き
甘すぎる隣国へ塩一つまみ
満天の星に形容詞は要らぬ
善を積むやがて仏の列に入る
胸襟を開く男のコップ酒

あちこちにおつかつたのね丸い石
安堵する豊かな胸に抱かれた子
歌自慢豊かな声が胸を打つ
見習おう豊かなさもらうボランティア
カラスさえ豊かなさ読んでゴミ選ぶ
不用品部屋にたつぷりこの豊かな

寿子 富美子 日出男 紀久子 よしこ 保州 航太郎 徑子 小香 知香 美恵子 凱柳 みゆき 白兔 楓花 鐘旭 紀美江 茶人 妻子 振作 幸子 節子 昌鼓 房江 孝二 殺

殺人鬼豊かな心持たせたい
ちと足らぬ二千万だが愛豊かな
温暖に豊かな海に漁がない
豊かさが人情さえも愚弄する
亡き母の豊かな笑みに逢うお盆
喜怒哀楽豊かでウソがつけません
同居して勝手なことが見えて来た
薬湯に勝手に浸かる猿もいる
料理べたレシビのせいにしてます
身勝手なことばかり言う血の絆
うっかりで何度も転ぶ同じ場所
うっかりを丸く包んでくれた母
高かつたシャネルうっかり捨てました
うっかりと吐いた本音に地獄見る
うっかりならサザエさんとはいい勝負
気がつけば違う電車に乗つていた
うっかりと喋れぬ人が側にいる
長生きは自己責任という勝手

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

褒められて借りた知恵とは言い出せず
取り柄と云う元気以外は誇れない
いのちをつなぐ鳥の子育て見て習う
仏滅もこんな楽しいことがある
しまつたと後で気がつくお節介
腹つもり生命線にとらめっこ
鈍感に生きて皮肉が通じない
免許更新通知来る度もう一度

勲章 天翔 蟹郎 敏夫 一平 真理子 茂登子 金祥 紫陽 一瑤 善平 修 回春子 みつこ 宏章 無限 健二郎 菜美 和代 みどり 章子 安子 惠美代 紫音

神様が見ていくれる玉の汗
楽な道選んでも明日は来ぬ
シベリアの遺骨収集杜撰なり
沖繩の負担軽減口ばかり

公約が選挙の後に様変わり
病状が中待合で駄々洩れる
母さんが遺した服を着ています
また恋がしたくて鏡拭いている

人間に置き換えてみる車間距離
自分史の中では耐えている女
吠えるより尻尾振るのが向いている
町カフエの手軽さ詩人にはなれぬ

がんばろういっぱい書いている余白
有名な草ではないが生きてます
留守のまに開いたバラよ何を見た
添える物無いが愛ならたと有る

里山は昭和に帰る夕涼み
ふる里は星星に手が届く
的を得た助言で世界新記録
やさしさを問えばあなたに辿り着く

望郷の募る秋思のカネタタキ
SLの勇姿昭和を直走る
すんなりのみんなすくすくまーるい輪
繕って膝って二人午後のお茶

引かれ合う縁看に飲む酒よ
アポ無し之余命宣告お断り

真帆
かずこ
美恵子

一 陣
れい子
節子

陽子
千恵子
華蓮

和郎
游子
ダン吉

清報
公弘
千里

紀雄
みどり
清

高鷲
恵
あかり

欣之
寿之
卓郎

涼子

合鍵に添える別離の一筆箋
川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

稲の穂に花が咲く頃無事にすぎ
はやぶさが帰還するまで死ねません
諷いも酒が友との潤滑油

古希過ぎてまたあたためているロマン
持って出た傘へ笑った人を入れ
子を産んで育てて母と言えるはず

血の絆屈通りに割り切れぬ
二人なら二人の音で朝が来る
嵐去り優しい水の川となる

介護したあの母親に歳迫る
晩年といわれる年齢の月明かり
夫婦ではあんなに会話はすまない

猫の手借りる家族総出の収穫期
脇見してひとまわりして今の妻
お喋りしてニュース交換若返る

語り継ぐ昭和平成聞く令和
ブラザ川柳(大阪) 穂口 正子報

匿名で悪意ばらまく人の闇
三世代カラオケ行けば知らぬ歌
ケータイの待ち受け画には孫曾孫

旧友の変わる生きざま涙する

常男
雅美
まみ子

三樹夫
美千代
週行

かつ子
北澤 稠民報

北哲男
稠民
善輔

幸子
剛
重男

喜弘
良
照代

美智子

正子
和代
淳司

しゅう

つつましい暮らしの先に描く夢
モグモグは気分高める勝負菓子
積んで来た功德の石は縁の下

次世代へバブルの記憶語り継ぐ
妻娶り来る日来る日も笑顔の日
団塊はお荷物ですと国保上げ

つくればのクイック料理ええ塩梅
ギネスブックもあきれてました長電話
電車の揺れ物ともせずにする化粧

惚けてない老いの世代の反抗期
次世代が受ける年金先細り
有縁でも無縁でも皆仏の子

「鐘の鳴る丘」生きている希望の湧いた空
耐え抜いて歩いた道に花が咲き
老いとは生との戦だと思ふ

ジム通いスリムになったのは財布
くりかえしデパートとスリムの末にデパート
老いの坂影もスリムになって冬

天井のスリムな海老よ消費税
埋み火へ未だこれからと夢を足す
秋雨に濡れて羅漢の男前

眉を引き煙草屋守る卒寿です
良い話聞いて楽しいティータイム
自活してスリムになった子の帰省

ピオロンの音色に聞き惚れる暮色
マドンナの秋波へ嵌る恋の罟

清乃
修
悦夫

政夫
五月
千枝子

弘光
一彌
克三

正報
福貴子
捷二

野鶴
直樹
朝子

和夫
寛昭
郁夫

克己
満洲夫
志華子

杖香
武彦
星雨

満作
寿之

仲人へ今も感謝の年賀状

病得てスリムになつても悲し

メタボでも夕陽の影は超スリム

楽しみを残して今日を締めくくる

ベルト穴一つ縮めて夏終わる

マツタケを忘れ久しい秋が来る

断食を三日したつて瘦せもせず

原爆忌無縁ですます人が増え

耳寄りな誘い一旦深呼吸

蝉しぐれ消えゆつたりと秋あかね

秋風が増税連れてやつて来る

鏡面にさざ波立てる嘘ぼとん

電柱の影に隠れて待つ信号

五十年注ぎ込みました宝くじ

表現の不自由展で地金見せ

ほたる川柳同好会(大阪)水野

いけずかてはんなりしはる京都人
何度でも京の町並奥深い

温暖化甘い見積もり洪水に

甘いガード孫はしつかり突いてくる

甘いもの好きですつかり総入れ歯

夕日いま甘い名菓を持って余す

家計簿がびつたり合つて物悲し

びつたりとは合わずに飽きず五十年

慣れぬ旅ガイドの後をびつたりと

びつたりと煙草を止めて柔になり

亡母の着物びつたり似合う歳になる

たもつ

峰子

一步

正彦

洋志

実

高志

弘委智

肇

賢子

榮子

博

宣子

勝弘

正

黒兎報

純子

守啓

信男

正子

一弥

孚彦

堅坊

郁子

則彦

奈津子

五十年住んでびつたり両隣
びつたりと合鍵はまる老夫婦
猫に聞く昼寝の風の通り道

川柳塔さかい(大阪)

内藤 憲彦報

けなすより誉めて育てた母卒寿

人けなす陰であなたもけなされる

けなされる事なく生きる小市民

けなされても愛だと思ふタイガース

爆音が消えた平和を離さない

心音の元氣予定日待ち兼ねる

パシッと噛む笑つてくれたアチトマト

着信の音はワルツにしています

音立てて顔見せにくる可愛い孫

三世代和音で繋ぐ夕ごはん

八月の終りを告げる法師蝉

ボク4才銀河鉄道運転手

鱗雲ススキ穂を出す散歩道

月へ帰つたかぐや姫今何してる

イルミネーション見上げる街の都市砂漠

見上げれば上には上があるものだ

さすが名馬見上げたものやこの強さ

空仰ぐそこに答えがあるように

金平糖が落ちてきそうな星月夜

風鈴を涼しいと聞く日本人

嫁さんの軒で家庭内別居

音の無い世界想像出来ませうか

廃線の駅舎に響く蝉しぐれ

桂子

黒兎

春代

志津子

光雄

禮子

憲彦

唯教

ひろ子

ばっは

妙子

廣子

倭子

八千代

美津子

洋一

輝子

敏治

玄也

清

ゆみ子

進

恩

清

舞夢

憲

ドアホンも聞こえぬ耳が情けない
尻尾振る音聞き馴れている議員
音もなく折り目もつけず四季移る

音立てて足腰老化始まった

甲乙は愛弟子二人つけがたし

恋人がまじめ過ぎてつまつまらない

高齢者真面目に生きて使い捨て

広辞苑真つさらのまま積んである

幸運は曲がり角からついてくる

これからは漫画みたいに連れ添つてとしお

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

秋はそこそれがなかなか来ぬ残暑

四鳥はもういらないとブーチン氏

遅い帰り連絡つかぬ濁く喉

自慢話について傾いてからのウツ

ボディフロー効いてまさかのダウンする

両の手に握る小さな幸せを

質素にも不足感じぬ幸福度

幼子のニギニキ守るパパとママ

令和ではみんな百まで生きる顔

愛掛ける人あつてこそ生きる甲斐

不足だと言えはこの世が空回り

紅葉散る人に寿命がつい定め

東電の力不足で灯がつかぬ

朝寝坊したいけれども出来ぬ喜寿

散髪屋の椅子の上でも指を折り

カードでもチャージ不足にうらたえる

富夫

五月

敬子

さくら

素頓馬

雅明

時雄

佳子

みつこ

求芽

美津子

肇

公子

野鶴

ヨシエ

英三

多津子

健二

武彦

時子

歌留多

きらり

敏昭

耕治

正彦

身も心も軽くしてこそいい余生
不足ばかり言う和幸福逃げてゆく
見も知らぬ人の笑顔に救われる
いわし雲年々遠くなる故郷
偶然の出合いまさかの五十年
鉛筆を持ったら名案が消えた
いい男は見ると散漫癖がある
美しい誤解のままゴルーイン
イマココに私がいるという不思議
リベンジを誓う拳は胸の中
塩砂糖不足の味は妻の愛

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見 柳歩報

アウトでもセーフと言ってくれた母
ややくしやアウトとインで違う税
ハイエナのおおりに運転即アウト
アウトだと思つた時が負け人生
アウトにはならないようにやるつもり
セクハラのジャッジ決めるは女性陣
アウトなどするかい腕を鍛えている
如才なくマネキンの服残っている
孫の守あと一週間だホツとする
母さんのお昼はいつも残りもの
先生と呼ばれてバカにされている
先生が事件の度に生まれ出る
教え子に出会う長髪のアナ家
先生に成れず生徒で終わろう
憧れたイケメン先生今百歳
国会の先生たちはポロ儲け

則彦 美智代 美龍 黒兔 千鶴子 見清 (岩)玲子 弘之 葉子 (永)玲子 楓楽 柳歩報

残飯で育つた猫も今グルメ
先生か反面教師道ふたつ
森を出て人間らしくなつた猿
真夜中のフクロウが取る緊急電話
橋ができ神話の森が荒れはじめ
森林浴燃える小鳥の声を聞く
嘘八百森の中では通じない
ガラスの器レタスの森にプチマト
念押しされ火気心配で舞い戻る
あの人は押すに押されぬ大物に
背中押す人にはなれず生卵

六甲川柳会(兵庫) 奥澤洋次郎報

やる気です新しい靴買いました
人生の祭だ父の大往生
少年をきりりとさせる夏祭り
役割がちやらんぼらした長い道
B面で生きてきました長い道
だんじりを追いかけて行つた隣り町
高齢の免許更新冷たい目
飛翔体発射ニュースの蟬しぐれ
一年を祭りのために生きている
来年の祭り揺れてる高齢化
着い空ストレス無用夏祭り
半世紀母という名の重し乗せ
夫婦仲親より長く縁があり
呑気です夫は単身子等巢立ち
厚化粧ぬつたあとから汗でとれ

豊仙 柳歩 美智子 寿代 桂子 久絵 雪代 モナカ あきら 朋子 青帆 廣光 美恵子 博 光久 弘華 盛夫 狸月 道明 義明 洋次郎 憲三 真桜子 芳江 恭三 邦子

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

風速五十メートル一度体験してみたい
閻魔大王私の欲を吹き飛ばす
法螺吹きで相手にされず孤独なり
折り鶴に息吹き込むと飛びたがる
励まして闘志に燃える顔になる
落ち込んだ友の背中をさすつてる
どうもならん励まされても曲がる腰
無言という励ましがあまる父の背
川柳で脳を励ます磨きます
ハイカラな酒瓶へ見栄移し替え
ハイカラにしても中身が追いかぬ
ハイカラも乳ガン検診ひやひや
マドンナが村へ来たぞと大騒ぎ
食卓も洋風になりハイカラだ
ハイカラは脳が生きてる明日を見る

和郎 崇史 利子 敏夫 弘 美津子 浩司 ひろし 千賀子 武彦 和宏 鬼一 麦青 紀美恵 重忠 龍枝 風露 けいこ 宣子 明友 雄大 由紀子 康子 次男 智恵子 恭子

新車からハイカラさんがハイポーズ
 ごっそりと儲けた頃の武勇伝
 ごっそりと万札抱いた夢の中
 モンゴルがごっそり稼ぐ土俵上
 笑い合う今がごっそり過去になる
 田や畑ごっそりもらい苦労する
 子供部屋ごっそり抜けて空気だけ
 ごっそりと使いたいけど元がない
 病み上り気力ごっそり落ちちまい
 がんばれ香港がんばれ民主主義

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

祐子 石花菜 隆昌 日出子 萩江 醉芙蓉 茂夫 美知江 大鯨 照彦

ガン告知とつさに妻の顔うかぶ
 仰げば尊しとつさに涙あふれ出る
 15号日常茶飯裏返る

まつお 弥生 紀雄 彦弘

明暗を分けるとつさの避難先
 ほとほどの気兼ねくらしの潤滑油
 添い遂げる言葉いよいよ死語になる
 震度3とつさに妻に抱きついた

みつこ 一歩 いさお 一文

割り勘でとつさに席を立つ男
 困った時添えられた手は忘れない
 意に添わぬ事にはつきりノーと言う
 付添いにつき添いが要る医者通い

フジ子 キーキ シルク ゆみ子 光男

添うたびに彬の一句沁みてくる
 五十年添いとげました飽きました
 恋するもプラトニックで気兼ねない

ダン吉 久仁雄 絹子

かくれんば名前呼ばれて返事する
 気兼ねする額でなかつた祝い金
 とつさの時の力は隠し持っている
 無愛想とつさに笑顔できません
 同窓会とつさに名前出てこない
 気兼ねなく日々をすこして肥満体
 手を繋ぎ伴走したい最後まで
 母が逝きふるさと敷居高くなり
 反対を叫ぶとつさの正義感

岩美川柳会(鳥取)

山下 節子報

六点 信二 瑠美子 しげ子 育代 喜代子 文重 俣子 扶美代

胸を打つ盲導犬の柔順さ
 トンネルで放送途絶え速度上げ
 忠告を聞くアンテナが錆びている
 永久に日韓和合杭を打つ
 アンテナであの世の父母と話して
 公民館で老いの大将しています
 打つ釘も心曲がれば曲がりぐせ
 ふる里の香り懐かしアンテナシヨップ
 ありがとう心づかいに胸を打つ
 カップルの横に坐つた長い旅
 親戚も先祖も帰り横になる
 京アニに心打たれて鎮魂歌
 打診してみれば地球も不整脈
 風を読む為のアンテナ磨きます
 スマホならアンテナいらぬニュース飛ぶ
 アンテナに届かぬ声もどかしい
 アンテナ揚げ家族を見張るお母さん

重忠 弘六 完司 一平 一瑤 一粹 美恵子 たぬ 菖子 幸安 敏子 凱柳 雅女 真理子 振作 彰夫 千代

心筋梗塞横になつたらそれつきり
 自慢話聞き飽きました横を向く
 長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

おはようとイケメンの孫太い声
 佳き愛を築けたらうか今更に
 窓ガラス張り付くヤモリ視線合う
 チャンス消え後の祭り悔やむ日日
 火酒過ぎて我は渚の千鳥足
 騒がれた男だ敵も多かるう
 心から妻とおおきに有難う
 黒猫が銚子になる老い二人
 知りたくて君の書籍を眺めてる
 終章へ夕陽に染まる私の帆
 戦争を知らぬ世代がする政治
 次世代へ守る人絶え郷の墓
 三世代でちやぶ台囲む良き昭和
 祖母と孫世代感覚埋らない
 レシビを問われない按配にと笑う母
 知るほどに明日の地球を憂う日日
 一億の家屋パブルで掻き消され
 今日歯科科明日は眼科の扉待つ
 夫婦げんかばかりしてて子沢山
 あちこちであおり運転日常時
 交通違反反キテ居直り文句つけ
 禁煙の回数自慢タバコ吸う
 スーパーに行き買いたい物を忘れちゃう
 言う事とする事違う二枚舌

蟹郎 節子 ヒロ 千代 秀子 洋二 正博 和子 靖博 由夏 旅人 一男 和代 三和子 孝代 弘美 敬二 直樹 光弘 隆彦 正美 規之 ともこ 孝 ゆき 登美子

へまばかりおれの頭はまだ青い
 いらつちで青待ち切れず歩き出す
 いつまでも青いと言われ悩ましい
 殻脱げばまだ翔べるわと騒ぐ胸
 無視されて自死にも走る青い鬱
 ソプラノで青い山脈歌う母

あかつき川柳会(大阪) 磯島福貴子報

血圧計電池切れまで計つてる
 六Bの十七音字で描く宇宙
 宇宙戦艦ヤマト憧れ少年期
 食欲が細いと笑われてみたい
 あの犯人はきつと黒だな目が泳ぐ
 細腕で五人育てた母の意地
 血圧を下げるためには朝バナナ
 夢の中はくの一の小宇宙
 イモカボチャ些細なことは気にしない
 年とれば血圧上がる胸下がる
 アマゾンが燃えて地球は酸欠に
 日韓の歪みを溶かす策がない
 宇宙人と交信チキウジンハバカ
 助詞副詞言葉の闇を彷徨つて
 細いけど芯はしっかりお母ちゃん
 隣国を嗤えば日本にブーメラ
 法善寺にひっそり俺の小宇宙
 黒い雨降らせた国にすり寄つて
 血圧は二度計つて三で割る
 神の業毛細血管の緻密

たけし 幸子 ふみ 福子 淳司 隆明
 忍 堅坊 弘子 信子 清子 紀子 たもつ 喜八郎 博美 一志 喜之 克己 里子 ばっは 太郎 英夫 多代美 勇 満知子

オリンピック済んだら流す汚染水
 光年が単位宇宙の無限大
 旬くるが我が口まではこぬサンマ
 友達になれそうイカスミのバスタ
 皿の上細い秋刀魚でスイマセン
 細ぼそと命つないで九十年
 細い糸結ばれ金婚式もすぎ
 入閣後たまたも不祥事即辞任
 ポスト改憲社会保障の充実を

細かいこと言うな勘定ワシが持つ
 お月見にはやぶさ2の無事捧る
 採血で細い血管涙する
 ときめきは宇宙遊泳する心
 血圧が上がる気晴らしのパチンコ
 目減りする年金寒い先細り

川柳花の輪(大阪)

岡本

握らない寿司がレーンを流れてる
 付度のアメに群がり落ちる穴
 知らぬまに介護の母の手を握る
 残照のなかポトリと落ちる蟬
 地獄絵図群がる人に蜘蛛の糸
 群がって生きてる方が楽だけど
 宇宙開発欲に群がる国のエゴ
 握手する手の中にあるバラのトゲ

翠洋会(大阪)

大久保眞澄報

秋まつり出店をエサに孫誘う

一角 壽峰 万作 律子 直子 武 廣子 高鷲 九条男 一行 五二 優子 朝子 ひろ介 浩子 薫報 正太郎 みちる やすの 亜成 泰子 笑子 信子 薫

祭り好き手振り身振りの母ベッド
 笛太鼓母の手弾む祭り寿し
 両親の姿勢が目に見えぬ資産
 子等の為と資産遣さず逝つた父
 資産などないが笑顔が宝物
 資産にする土地もお金もありません
 タイヤより光る健康体がある
 資産価値とだけだけあるか分からない
 徒歩十分医者もお寺も葬儀社も
 内科外科歯科眼科十分以内
 ロボットに介護まかせる近未来
 婿探し近くにおれど甲斐性なし
 遺言書生きた証のラブレター
 趣味いくつ学び余生に身構える
 働いて汗を流すという誇り
 赤トンボ群れを張りつけ青い空
 全世界笑顔が届くカップリン
 寿命百年楽し事だけ考える
 ごちやごちや言うなとんでもマイウエイ
 まなうらの昭和残像あざやかに
 熊や猿飢えぬ為にも植林を
 蹴っている命おなかの子の元気

舞夢 富子 すみ子 桃花 ふりこ 千枝子 理恵 廣子 眞澄 義 恭昌 善之 宣子 昭 満作 弘子 行久 敬子 蕉子 希久子 和夫 大子

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

荒地から先祖の唸る声がする
 病院では修理居酒屋でチャージ
 善い人といると哀しくなってくる
 オギヤと泣いた時は善人だったはず

麦青 紀の治 くにこ 芳光

コンサートの最初と最後まで起きている
 精神的にタフというより頑固です
 タフだから根っ子切つても飛ぶ胞子
 勸善懲惡庶民が持つ誇り
 一日の一善近所巡りする
 太陽系環状線が走ってる
 むらむらと湧く感情がまだ若い
 善人の顔がくずれる遺産分け
 想像力及ばなかった父母の老い
 どうしよう家や子どもや墓のこと
 善人は一人もいない娑婆世界
 見果てぬ夢が積乱雲の先にある
 逞しさを消えてしつこさ目を覚ます
 善と悪どちらも同居する心
 この世界善悪でなく損得で
 夢かなう想像という魔法あり
 善と悪ばくの心は風見鶏
 そこいてお尻で弾き場所を取る
 百年後いまの地球は健在か
 想像が出来ぬ私の最終章
 たくましい娘の婿はおとなしい
 お疲れの善人の肩揉んでやる

川柳ねがわ(大阪) 籠島 恵子報

合格の人桜ゆつくり見て歩く
 叱ること山程あつてひとり言
 八十年生きて人間合格証
 暇なので猫と一緒に大欠伸

老春の迷い虫が胸に棲む
 年頃のタマが今夜も帰らない
 叱られて出ていったきり不明だと
 虫干しの遺品に匂う陀羅尼助
 昭和には見合い話もたんと有り
 人生の合格者だよと自負の友
 足腰がわが身の重さ愚痴り出す
 胸の奥積り続けている昭和
 原爆忌知るや知らずや赤トンボ
 老いるとはこう言うことか初体験
 叱られるうちが華です脈がある
 こじ開けて触れねばならぬ過去もある
 張りつめた糸が綻ぶサクラサク
 叱られてトボトボ歩いて医者へ行く
 汗かいた地球体重軽くする
 ふくよかな微笑み交わす朝茶漬け
 年頃の娘に父はナフタリン
 右とれば左も欲しい思案坂
 初めての和服でそりり村祭
 合格は運と努力で実る時
 早く大人になりたいなんて馬鹿だった
 不器用な愛でいつでも叱る父
 この名刺何人合格させたやら
 叱られても母が一番好とき言う
 風がちがう空気がちがう小さい秋

川柳さんだ(兵庫) 村田 博報

時駆ける少女と過ごす母白寿
 哲夫

闇の中浮かぶ夜店のかき水
 今日はこちらへお仏壇から言うてます
 空気など読まぬオレにはオレの道
 夜空には地球の憂い写らない
 子を想う終着駅のない祈り
 自由っていいなこんな広い空がある
 お願いやゆつくり来てよ誕生日
 何度でも月が出てくる盆踊り
 病いまだ秋にはきつと元氣だよ
 判定は勝者サイドの歴史の目
 レスリング判定勝ちも勝ち勝ちは勝ち
 俺よりは妻が上だと判るポチ
 兄ちゃんが悪いとママは決めてる
 孫の絵に婆ばの皺は忘れない
 判定は地獄行きだよお前さん
 良い店はお客の数が決めている
 文句なし一本勝負盛りあがる
 パソコンが拗ねて妻より困らせる
 パソコンが消耗品とは知らなんだ
 詳しくはホームページと出るテレビ
 古いラジオ叩けば開けた君の名は
 ガラケーを笑うスマホも古くなる
 賞味期限試食するのは亭主なり
 じいものは残るチャップリンの映画
 じっくりと古典落語を聞く
 増税に家計見直し切り詰める
 秘め通す古い写真に秋深む
 スマホ水没大事な人が消えてゆく

星雨 美佐子 秀雄 茜 尚世 麗 鈍甲 和織 壽峰 朝子 賢子 寿子 信子 薰 祥昭 武彦 仁 博泉 かずみ 弘委智 弘一 郁夫 千賀 高鷺 恵子 哲夫

どん底に落ちて分かつた友の情
 隠し事本音ポロリと落としてた
 日が落ちてからが勝負の一仕事
 手を合わす命を繋ぐ点滴に
 こうなれば後はゆつくり起き上がる
 落ちるだけ落ちたらやる気湧いてきた

川柳大坂

山崎 珠生報

山肌の緑も鏡い合う個性
 平和な地球緑の大地永遠に
 故里の夕日きれいな始発駅
 株式欄ここだけいつも飛ばし読み
 ここだけを安倍麻生菅悪巧み
 ここだけは決して譲れぬ白は白
 優先席君は心が痛まぬか
 母となるために荘厳なる痛み
 愛の矢がドキュンと刺さり胸痛い
 尾瀬沼は水芭蕉咲く別天地
 泥沼にはまって人の情け知る
 泥沼に浸かりそうだな進次郎
 川柳の底なし沼に落ち込んで
 年金を底なし沼にしてならぬ
 泥沼に極楽浄土の花咲かす
 自転車のマナー違反が日に余る
 満月が癒してくれる熱帯夜

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

大 鯨

川またぎ遠くて足をドボンする
 広いのに猫を跨いでいる不便
 悲売です八十年の歴史
 伝統の歌舞伎を見ると肩が凝る
 世界地図で見る日本は一跨ぎ
 派手な顔作り直しも出来ません
 元号を三つ跨いだ知恵袋
 今思う下手な芝居で看護した
 亡父が跨いだ畦道は草だらけ
 同じ手は母と猫との背をさする
 人間の芝居見ているお月様
 地味よりも派手さが似合う村芝居
 コンパスは跨いで円を描いている
 跨がずに見続けること気づくこと
 晩酌のついでに少し飯も食う
 はまり役私生活まで色眼鏡
 国会で猿芝居する議員たち
 夫跨ぐついでにちよっと蹴ってみる
 三途の川跨ぐ日時はまだ極秘
 がっかりだお金が跨ぎ逃げていく
 歌舞伎座に出たと自慢の馬の脚
 終電に間に合わせて呉れるナイター
 夢を売る子供の国の紙芝居
 ついでついでと隣の仕事寄ってくる
 泣きまねもアンヨも上手三歳児
 特売を買ったついでの高級品
 保育児のまなこ見開く紙芝居
 台風があちこち跨いで気まま旅

義 徳
 えい子
 徹
 寅 男
 ひとみ
 利 子
 昌 代
 福 貴 子
 芳 香
 まつお
 美 世 子
 賢 子
 (田)ゆみ子
 一 歩
 珠 生
 和

好 幸
 孔 美 子
 和 子
 宏 章
 孝 子
 実 満
 鈴
 弘 子
 盛 桜
 綾 子
 重 忠
 弘 六
 照 彦
 よしあき
 完 司
 ゆり子
 ゆたか
 茶 子
 満 文
 草 文
 恒 郎
 蟹 郎
 かおる
 小 鹿
 すみれ
 睦 子
 一 平
 英 子

西宮北口川柳会(兵庫) 緒方美津子報

笑つてるさぞかし腹も立つだろに
 さぞかしの期待に背き風のまま
 白いばらさぞかし秘めている炎
 産直の秋刀魚さぞかし旨かろう
 さぞやさぞ官僚不正容疑無罪
 神様もさぞやお迷い甲子園
 美男美女さぞや子供も可愛いから
 継ぎはぎの戦後知つてる裁ち鉢
 よく研いだハサミに枝が身構える
 過去の悔い断ち切る鉄探してる
 庭中を虎刈りにしてああしんど
 持ち方で凶器にもなる裁ち鉢
 決断は私がいります裁ち鉢
 みな独りひとりで漕いでいる小舟
 地球人舵取り漕ぎ手正念場
 この頃は澆季の日々に気候まで
 藤椅子で舟を漕いでる里帰り
 川柳会舟漕いでるか呼名なし
 手漕ぎ舟案内するよにかいつぶり
 ポート漕ぐ救援隊へ感謝する
 切れすぎの鉢に腕が追いつかず
 どんぶらこプラごみ海へ漕いででる
 できすぎの妻さぞや夫は苦しかる
 歳やからドローンします三代会
 九月やで三十五度はおかしいぞ
 まだ望みあるから弱音吐きません

千賀子
 浩 司
 いわゑ
 新 録
 洋次郎
 邦 男
 利 子
 武 彦
 宣 子
 廣 光
 和 宏
 宏 造
 紀 華
 哲 子
 正 彦
 (浦)弘
 敏 夫
 伯 備
 (編)弘
 順 子
 恭 子
 恭 子
 忠 夫
 勝 弘
 正 和
 光 久



川柳塔WEB句会 兼題「出る」

*平抜きは到着順
*webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

9月例会入選句 投句数324句(163名) Sin 平井美智子 共選

S i n 選

行き先を告げず家出た消費税
うかうかと騙し絵を抱き家を出た
出産後あれからずっと妊婦服
丁寧に剥いて出てきた生卵
布団から出るまで社会適合者
この世から搬出される日も赤で
ピカピカのランドセルから出る手足
出て行った悪霊に出すバイト代
すり足の指から零れ出るきのう
時々は出現してる救世主
スマホからアスバラにゅつと顔を出す
ドア開けて僕はスーパーマンになる
汽水域を出るさざ波と口癖
もう出ると言う男から刺していく
いちばんやわいとこからめるととろけ出る
終活をせずとも川は海に出る
物差しと 苗字を変えて 出直そう
気を遣う入口ホッとする出口
靴下から芽が出てきたぞ母ちゃんよ
鬼が出ることも考えつつ進む
煙とか塵になっても出る波紋
理科系の言い訳も出る墓じまい
ドラえもん時を出してよ二人分
人生の背景として出演す
夕闇に飛び出す母のあしのうら
落陽の改札を出て曲がろうか
スリッパを手にはめたまま出て行った
出る台の隣に座る人生だ
目玉から出た影がテレビをつける
座布団の綿のなから出る金魚
秋分をはみ出るひと房の葡萄
アヒージョの油が悪意出すところ
佳5 かと言ってどう出る冷めた茶を吸る 雨 径
佳4 カフェ・オ・レが電話に出るといふ仕組み 芍 薬
佳3 コーヒーを三途の川で淹れる役 甘酢あんかけ
佳2 バス停が醬油くさくて町を出る 芍 薬
佳1 欲ばりな息ばかり出る春の宵 米山明日歌
人 副作用でること覚悟してる紅 坪井 新
地 北米を南米にして部屋を出る 臈
天 さるすべり散り永遠を出ていった 柴田比呂志

平井美智子 選

やる気出るまで十年という時間 大木 雅彦
入院の順には出ない患者様 龍 せん
炙り出しのように浮き上がった疑心 北田のりこ
出ないよう未練をぎゅつと絞り切る 森元恵美子
かと言ってどう出る冷めた茶を吸る 雨 径
出る杭は打たれ続けて潜伏者 板谷 達彦
出るとこへ出たから虎が猫になり 竹中 正幸
出遅れた足をめげずに撫でている 武本 碧
布団から出るまで社会適合者 西沢 葉火
欲ばりな息ばかり出る春の宵 米山明日歌
真空パックを出てキラキラ野心 冬 一
出すものは出し惜しみせず出さない 岸井ふさゑ
旅に出る理由探しに旅に出る 涅 繁 girl
打たれても打たれてもお杭である 光畑 勝弘
キャッシュレス家を素通りしてしまう 辻内 次根
風呂を出る少しふやけた脳をして 水野 黒兎
出かけるともれなく夫が付いてくる 蒼い 朱 鷲
物差しと 苗字を変えて 出直そう 蒼い 朱 鷲
気を遣う入口ホッとする出口 ま さ と
一本でも出ると問拔けになる鼻毛 塚山 繁
出しきった後でホンモノに出してくる 寺川 弘一
花瓶から溢れるのは涙です 尾崎 良仁
芽が出て花が咲くとは限らない 石川 柳寿
出る杭になろうと声を上げてみる A 2
舟が出るここから先は月の道 青砥 和子
増税もしばらくすると慣れてくる 尾崎 一子
チューブから出た歯磨きは戻れない 平尾 定昭
カフェ・オ・レが電話に出るといふ仕組み 芍 薬
一つしかない出口がまだ迷う まみどり
スリッパを手にはめたまま出て行った 水城 鉄茶
後出しのグーは美形で声高で 美馬りゅうこ
家出した家がリフォームされていた 月波 与生
佳5 もう出ると言う男から刺していく 榎本 ユミ
佳4 舌出した鏡の隅に目撃者 宮尾 柳泉
佳3 チューブから出るなら白いままでいい 西沢 葉火
佳2 すり足の指から零れ出るきのう 田村ひろ子
佳1 アヒージョの油が悪意出すところ 怜
人 珊瑚礁から出る桃色の吐息 岸井ふさゑ
地 バス停が醬油くさくて町を出る 芍 薬
天 終電は出ました夏は去りました 居谷真理子

川柳塔 web 句会は休会中です。再開までしばらくお待ちください。

senryutou.net

(サイト管理 森山文切)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 巡る・朝・高い・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	16日(土) 14時締切 仕事・支える・じんわり ニュース	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-33-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	16日(土) 17時締切 引・こだわる・塩	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	17日(日) 大会	詳細は本誌P125参照
川柳 藤井寺	17日(日) 14時締切 しぶしぶ・アバウト 席題 共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	18日(月) 13時50分締切 喉・狙う・ずるい・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
京都 塔の会	19日(火) 14時締切 パンチ・涙・なつく	ハートピア京都 京都市中京区烏丸九太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川柳 さんだ	19日(火) 13時30分締切 どっこい・進化・リスク・生きる 自由吟	キッピーモール 6F (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	20日(水) 13時45分締切 印象吟・青・数える・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 すみよし	23日(土) 14時15分締切 懐(ふとこ)・戻る・ 困った事(読み込み不可)	住吉区民センター 2階 集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸川柳会	23日(土) 13時15分締切 ゲーム・働く・平和	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市川柳会	24日(日) 14時締切 農・感動・ネオン	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	24日(日) 13時締切 自由吟・無言・動揺 パスワード・席題	県民ふれあい会館 4階(県立生涯学習センター) 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
南大阪 川柳会	25日(月) 18時締切 夕焼け・ワイルド・弱気・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	2日(土)14時締切 うすうす・冬物・閃く・自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉 川柳会	2日(土)14時締切 ふるさと・助ける・ハツタリ 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ社	4日(月)11時開場 川柳塔まつえ吟社 創立50周年記念大会	島根県民会館 3階第会議室 TEL 0852-22-5506 詳細は川柳塔詩10月号P117下段参照
川柳塔 な	6日(水)吟行句会 「平城宮跡東院庭園」 独・さわやか・囲む・囁目吟	集合場所:9時30分近鉄西大寺駅南側からバス 散策後10時15分発バスでロイヤルホテルへ 行先:平城宮跡東院庭園 散策後食事会 奈良ロイヤルホテル2階ロイヤルホール
あかつき 川柳会	8日(金)14時締切 収穫・冷たい・鼻・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	9日(土)14時締切 仕度・マスク・ちまた	メトロ・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳 とんだばやし 富柳会	9日(土)14時締切 間・いびつ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
六甲 川柳会	9日(土)14時締切 席題・恋・個性・いとおいしい 自由吟	六甲道勤労市民センター 5階 E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン6甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 わかやま 吟社	9日(土)14時10分締切 兼題=攻める・しみじみ・ラッパ 課題吟=千	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西汀丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 楽原道夫
川柳塔 打吹	9日(土)13時30分締切 家族・暗い・もたもた・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	10日(日)14時締切 熱燭・わくわく・濁る・雑詠	八尾市安中町3-5-1 洪川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	11日(月)14時締切 瀬戸際・飛ぶ・クール・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
ほたる 川柳 同好会	12日(火)13時30分締切 米・散る・やっと	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池 蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兔
川柳塔 さかい	12日(火)14時締切 じわじわ・道・折句:こくら	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

★第9回ふるさと川柳誌

上大会結果発表。参加者

439名・同人成績。

秀句 小河 柳女

雀百まで負けるなよお

ばあさん

秀句

生きるべしミミズのよ

うに蚊のように

天位

素のままで生きる裸の

まままで逝く

★「2019年文化祭吹

田市民川柳大会」は9月

22日千里山コミュニティ

1センターで開催。同人

成績。

秀句 山本希久子

遅く生きるおばちゃん

のエプロン

秀句 関 よしみ

底辺を生きる男の陣太

▽訃報△

○古田太虚さん(同人・竹

原市)。8月25日死去。

享年89。

○細川花門さん(同人・

神戸市)。9月28日死去。

享年78。

○前たもつさん(相談役

・大阪市)10月4日死去。

享年87。

▽新誌友紹介△

根県・松本昌会長)は高

齢化のため9月20日を以

て解散した。

○小島蘭幸主幹は9月15

日開催の「しまね文芸フ

ェスタ第17回島根県川柳

大会」で、「川柳と私」を

講演した。

▽訂正とお詫び△

○十月号P116 2段目16行

目・河内長野市↓富田林

第33回 NHK学園全国川柳大会

日時 令和2年3月5日(木) 13時～16時
会場 くにたち市民芸術小ホール

指定の用紙(コピー可)または大ききな
ど同形式でご投句ください。ひとり何組
でも、どなたでも応募できます。

事前投句締切
当日投句締切

第61回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝日) 正午開場
 ところ 豊中市立中央公民館 1Fホール
 (阪急宝塚根根駅東100メートル)
 会 費 1500円(記念品・発表誌進呈)
 宿 題 「飾 る」 長島 敏子 選
 「好 意」 三村 舞 選
 「不 意」 嶋澤喜八郎 選
 「友 」 岡田 篤 選
 「ほどほど」 西出 楓楽 選
 「ひとり」 森中恵美子 選
 「カ ード」 田中 螢柳 選
 締 切 午後1時
 *昼食を済ませてご出席ください
 連絡先 田中螢柳
 電話06-6853-0470
 主 催 豊中川柳会

第43回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月17日(日)
 午後1時開場 出句2時締切
 ところ 寝屋川市立市民会館 3F講義室
 〒572-0848 寝屋川市秦町41-1
 (京阪寝屋川市駅東口から京阪パ
 スイズミヤ前1番乗り場31番太秦
 行き5分、市民会館前下車または
 寝屋川市駅東口より徒歩15分)
 TEL072-823-1221
 会 費 1500円(発表誌呈)
 題と選者 (各題2句 席題なし)
 「くつろぐ」 籠島 恵子 選
 「燃える」 村田 博 選
 「味 方」 大内 朝子 選
 「王 様」 伊達 郁夫 選
 「補 う」 佐藤 后子 選
 「税 金」 米田 恭昌 選
 投句受付 82円切手5枚同封下記事務所宛
 11月15日必着
 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
 高田博泉 方 川柳 ねやがわ
 主 催 川柳 ねやがわ

第38回 鳥取県没句川柳供養大会

と き 12月15日(日) 午前9時30分開場・受付
 ところ 新日本海新聞本社ビル 5階大ホール
 JR鳥取駅南(駅裏)徒歩3分
 川柳大会のみ参加 2000円(昼食・作品集呈)
 精進落し 3000円(懇親会希望者)
 兼 題 「蓋(フタ)」 戸田真理子 選
 「強 い」 西浦 小鹿 選
 「ひとまず」 島田 明美 選
 「新 型」 木天 麦青 選
 「つぶやく」 紫 しめの 選
 「回 避」 藤原 絃一 選
 「三 角」 鈴木 かこ 選
 「敗者復活吟」 小島 蘭幸 選
 (この一年間で没になった句から2句吐)
 ◎席題なし 各題とも2句吐
 投句締切 11時厳守(締め切り後・弔辞・焼香)
 柳 話 「おもしろい人たち」
 新家 完司 氏
 欠席投句 1000円(切手可・作品集呈11月末日締切)
 投句先 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3
 中村 金祥 宛
 電話0857-59-1056
 主 催 川柳ふうもん吟社

第71回 大阪川柳大会

日 時 11月27日(水) 12時20分開場
 場 所 大阪市立住まい情報センター 3階ホール
 〒530-0041 大阪市北区天神橋6-6-20
 TEL 06-6242-1160
 ※メトロ堺筋線・谷町線・阪急
 「天神橋6丁目」下車3号出口より連絡
 ※JR大阪環状線「天満」下車北へ660m
 会 費 1500円(発表誌呈)
 宿 題 (各題2句 席題なし)
 「さらさら」 大西 將文 選
 「場 」 赤松ますみ 選
 「軽 い」 山田 葉子 選
 「困 る」 船木しげ子 選
 「こんがり」 松本 柩子 選
 「見 る」 山田 耕治 選
 「浮 遊」 井上 一筒 選
 締 切 13時20分
 披講開始 (予定) 15時10分
 賞 各題秀句に大阪市長賞贈呈(副賞)
 主 催 番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロ
 キウム・川柳天守閣・川柳瓦版の会
 後 援 大阪市

編集後記

★人の世というは石にも裏
表 薫風

★9月28日、95周年記念大会は盛会のうちに終えることができました。皆さま方の温かいご支援、ご協力の賜物です。感謝に堪えません。当日は何かと行きとどかないことも多かったです。一〇〇周年に向けて二層のご支援よろしくお願ひ申し上げます。

けながら治療の全てを拒否し、ホスピスに入所された同人細川花門さんの9月号巻頭句です。まつり当日私は例年のように葉書を用意し、参加者の方に寄せ書きをお願いした。「会いたいです。たもつ」「元氣出してよ我らがホープ。蕉子」雲ふわり。直樹「会いたい。蘭幸」「花門さん 花門さん 花門さん。木津川計……」

★9月29日朝、一本の電話。「花門の息子です。父は昨夜亡くなりました」絶句しながら私はお聞きした。「何時ですか」「7時20分です。言葉もなかった。「その時間は星影のワルツを全員で歌っていました」。「父はそこに居ましたよ」と、ご子息はきつぱりと言われた。たしかに花門さんの魂魄は川柳塔名物、星影のワルツの大きな輪の中に居られたに違いない。「不死鳥になって千年生きてやる」花門さんの絶唱です。

ひとつこと

川柳に感謝

昨年3月の退職を機に、4月より川柳教室に通い始め、川柳のイロハを学び、先生の勧めで8月に川柳塔本社句会に参加しました。席題とはお題を聞いてその場で句をつくるものだという事も知らず参加したのですが、「初参加の方は」と紹介された後に始まった披露で、すぐに私の句が読まれびつくりしたことをよく覚えています。その句が10月号の「句会燦」に採り上げられ二度びつくり。

これからも句会に参加し諸先輩方の句に触れ、勉強しようと思いましたが、9月からは川柳塔に毎月投稿が送られてくるのを心待ちするようになりました。今年の8月号で合計46句が掲載されましたので、続けていて良かったなあと、喜んでおります。その中から気に入りのものを選んで、川柳塔賞にも応募しました。川柳のお陰で充実した日々を送っています。(斎藤 隆浩)

★花門さんの寄せ書きに「会いたいです。たもつ」と書かれた前もつさんが10月4日、心筋梗塞で急逝された。ただただ声もなく立ち竦むのみ。こころに細波たつ秋です。(朱夏)

△「破つても帳尻合わぬ御金蔵」「紅葉をば散らして誘う裾模様」など、戯れ句が楽しめる長編時代小説に最近嵌っている。△坂岡真の「照れ降れ長

屋風聞帖」である。剣は立の川柳となり、絵馬や免許皆伝だが人情家の上州浪人(三左衛門)が主人公。時代考証が実に詳しく、江戸の暮し向きがちと同様に、武士も江戸良くわかる筆致。侍(半四郎)、商人(金兵衛)とある。

△「川柳作るのなら、小説を読みなさい」と編集の先輩の示唆で、お手軽な時代小説を読み始めてこの作品に行き当った。

△川柳に役立つか分かります。せんが、一読されては如何でしょうか。(憲彦)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

<input type="radio"/> <input type="radio"/> 年 年 月 月 から から 一年 半年 9800円 5000円 } 該当の方に○をつけて下さい	紹介者 (無記入でも可)	電話 	住所	氏名
			〒 -	フリガナ

川柳塔のホームページアドレス
<https://senryutou.net>

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
 川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

作品募集

1月号発表表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島 蘭 幸 選
水煙抄 (8句)	川上 大 輪 選
愛染帖 (2句)	新家 完 司 選
檸檬抄 (2句)	水野 黒 兔 共選
インスピレーションナビ (2句)	鴨谷 瑠 美 子 選
一路集 (2句)	大西 泰 世 選
初歩教室	片山 かずお 選
	山本 希久子 選
	居谷 真理子 担当

初歩教室「肉」は2月号発表

2月号
 檸檬抄「糸」
 一路集「鬼」「灰色」
 初歩教室「たまご」

本社11月句会

とき 11月7日(木) 13時開場・13時40分締切
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし「遺言」というかたち」

兼席 兼席
 題題 「腹」 「かわいい」 「枯れる」 「巧み」 「構図」

佐々木 満 作 選
 長川 哲 夫 氏
 緒方 美津子 選
 小谷 小 雪 選
 吉村 久仁雄 選
 木嶋 盛 隆 選
 小島 蘭 幸 選

会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社12月句会
 6日(金) 午後1時から
 兼題「特別」「店」「切る」
 「少し」「未来」

★ 同人参加 ★

「私 の 一 句」

■今年中に発表された句に限ります。
 ■締切 11月20日 (本社事務所宛)

定価 八百円(送料97円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇一九年(令和元年)十一月一日発行

発行人 小島 和 幸
 編集人 木本 朱 夏
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話(〇六)六七九―一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇四―一九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
 新聞・広告・ポスター・伝票等
 あなたの思いをかたちにします。



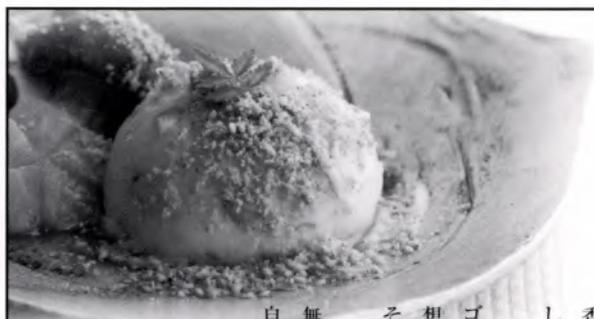
美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
 TEL (06) 4800-3018
 FAX (06) 4800-3028
 Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
 ホームページ <https://www.bikenart.com>
 ※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

令和元年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻二二〇号

川柳塔

十一月号

定価 八百円（送料 九十七円）